中世における『源氏物語』古注釈の研究

カラーヌワット・タリン

目次

凡例……1
序章……3
一、はじめに……3
二、中世における『源氏物語』古注釈研究の重要性……3
三、本論文の構成……5
四、『水原抄』について……7
五、『光源氏物語抄』について……7
第一部　『葵巻古注』の研究……10
第一章　『葵巻古注』の注記
——鎌倉時代の『源氏物語』古注釈との比較から——……11
一、はじめに……11
二、『葵巻古注』について……11
三、『葵巻古注』の先行研究……13
四、『葵巻古注』と鎌倉時代の『源氏物語』古注釈……15
五、『葵巻古注』の本文区分……18
六、終わりに……25
第二章　『葵巻古注』と『水原抄』の関係
——鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の利用——……28
一、はじめに……28
二、池田論文の問題点……29
三、『葵巻古注』の利用者の想定……41
四、終わりに……42

第二部　内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の研究……45
第三章　内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の独自性……46
一、はじめに……46
二、三冊本『紫明抄』の先行研究……46
三、三冊本『紫明抄』の特徴……48
四、『水原抄』と関わる注釈内容……54
五、『光源氏物語抄』と関わる注釈内容……56
六、『河海抄』と関わる注釈内容……58
七、『花鳥余情』と関わる注釈内容……63
八、終わりに……65
第四章　内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の位置
——『光源氏物語抄』および『紫明抄』諸本との関係を中心に——……68
一、はじめに……68
二、三冊本『紫明抄』と『光源氏物語抄』・京大本『紫明抄』との関係……68
三、三冊本『紫明抄』と『光源氏物語抄』との比較……70
四、三冊本『紫明抄』の位置……79
五、終わりに……80
第三部　東山御文庫蔵『七毫源氏』の研究……82
第五章　東山御文庫蔵『七毫源氏』の特徴……83
一、はじめに……83
二、『七毫源氏』について……83
三、基本の構造……89
四、本文中にみえる注釈……92

五、巻頭と巻末の和歌……93
六、伝称筆者と鑑定……95
七、終わりに……98

第六章　東山御文庫蔵『七毫源氏』と
鎌倉時代の『源氏物語』古注釈……105
一、はじめに……105
二、注釈にみえる古注釈の書名……106
三、出典名を示さずに引用する注釈の例……108
四、『水原抄』の逸文……112
五、『七毫源氏』の注釈中にみえる人物名……115
六、終わりに……122

第七章　東山御文庫蔵『七毫源氏』と『光源氏物語抄』……125
一、はじめに……125
二、『七毫源氏』と『光源氏物語抄』の注記の関係……126
三、『七毫源氏』と『光源氏物語抄』の注記の一致……127
四、『七毫源氏』で『光源氏物語抄』の構成がみられる注記……133
五、終わりに……137

第四部　九曜文庫本『源氏物語抄』の研究……140

第八章　九曜文庫本『源氏物語抄』の特徴……141
一、はじめに……141
二、九曜文庫本『源氏物語抄』という古注釈……141
三、成立と編者……144
四、注釈の由来とその性格……148

五、『源氏物語抄』において反復される注釈……152
六、終わりに……155

第九章　九曜文庫本『源氏物語抄』と中世の『源氏物語』古注釈
——『水原抄』と『雨夜談抄』を中心に——……157
一、はじめに……157
二、『水原抄』を引用した『源氏物語』古注釈……157
三、『源氏物語抄』にみえる「河内守」……159
四、『源氏物語抄』の「帚木」巻……163
五、「帚木」巻にみえる『雨夜談抄』の注釈……165
六、終わりに……170

終章……173
一、はじめに……173
二、中世における『源氏物語』古注釈の研究の試み……173
三、終わりに……177

初出一覧……179

凡　例

＊論文中に引用した『源氏物語』古注釈類は以下のとおりである。

・『源氏釈』

渋谷栄一編『源氏釈』源氏物語古注集成　第一六巻（おうふう、二〇〇〇年）

・『奥入』

中野幸一・栗山元子編『源氏釈　奥入　光源氏物語抄』　源氏物語古註釈叢刊　第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年）

・『光源氏物語抄』

中野幸一・栗山元子編『源氏釈　奥入　光源氏物語抄』源氏物語古註釈叢刊　第一巻（武蔵野書院、二〇〇九年）

・内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』

内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の写本による。

・東大本『紫明抄』

田坂憲二編『紫明抄』源氏物語古注集成　第十八巻（おうふう、二〇一四年）

・京大本『紫明抄』

玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年）

・『葵巻古注』

引用本文は後藤祥子・吉田幸一両氏による翻刻「源氏物語古註　葵巻二巻」（『源氏物語　研究と資料―古代文学論叢第一輯―』武蔵野書院、一九六九年）に拠ったが、複製本などを参照して適宜あらためた箇所がある。

・『河海抄』

玉上琢弥編『紫明抄・河海抄』（角川書店、一九六八年）

・『仙源抄』

岩坪健編『仙源抄　類字源語抄　続類字源語抄』源氏物語古注集成　第二一巻（おう

ふう、一九九八年）

・**『原中最秘抄』**

池田亀鑑編『源氏物語大成 第七　研究・資料篇』（中央公論社、一九五六年）

・**『花鳥余情』**

伊井春樹編『花鳥余情』源氏物語古注集成　第一巻（桜楓社、一九七八年）

・**東山御文庫蔵『七毫源氏』**

宮内庁書陵部・東山御文庫蔵『七毫源氏』のマイクロフィルムによる。

・**『珊瑚秘抄』**

阿部秋生、岡一男、山岸徳平編『源氏物語　上』国語国文学研究史大成三（三省堂、一九七七年）

・**『千鳥抄』**

塙保己一原編・太田藤四郎補編『続群書類従　第十八輯下』（続群書類従完成会、一九五七年）

・**『源氏和秘抄』**

中野幸一編『花鳥余情　源氏和秘抄　源氏物語之内不審条々　源語秘訣　口伝抄』源氏物語古註釈叢刊　第二巻（武蔵野書院、一九七八年）

・**『雨夜談抄』**

中野幸一編『明星抄　種玉編次抄　雨夜談抄』源氏物語古註釈叢刊　第四巻（武蔵野書院、一九八〇年）

・**『一葉抄』**

井爪康之編『一葉抄』源氏物語古注集成　第九巻（桜楓社、一九八四年）

・**『弄花抄』**

伊井春樹編『弄花抄』源氏物語古注集成　第八巻（桜楓社、一九八三年）

・**『細流抄』**

伊井春樹編『内閣文庫本　細流抄』源氏物語古注集成　第七巻（桜楓社、一九八三年）

・**『紹巴抄』**

中野幸一編『紹巴抄』源氏物語古註釈叢刊　第三巻（武蔵野書院、二〇〇五年）

・**九曜文庫本『源氏物語抄』**

早稲田大学図書館、古典籍総合データベースの九曜文庫本『源氏物語抄』のカラー影印による。http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko30/bunko30_a0103/index.html

序　章

一、はじめに

『源氏物語』の成立から時代が比較的近い中世の『源氏物語』古注釈は、平安時代の社会、歴史、言語、習慣、文化など、多くの情報を提供してくれる可能性を有するが、この研究分野にはまだ解明されていないことが多くある。第一の原因は現存している資料が少ない点にある。資料が現存していても、編者、成立年代、作成の目的などが不明なものも多い。しかも、伝本も一本か二本しか存在しない場合、指摘されている情報が正確かどうかは確認もできない。さらに、『水原抄』のように大部な古注釈と知られていたものでも、早い時期に散逸してしまったために、逸文でしか研究ができない注釈もある。このような研究状況である中世の『源氏物語』古注釈には、調査が行き届かない古注釈書も多い。これらの古注釈書を調査することで、中世の『源氏物語』古注釈に関する新しい情報を発見することができよう。本論文で扱った資料は、興味深い注釈を有しながら、調査が行き届いていないものばかりである。

序章ではまず、本論文の扱う『葵巻古注』、三冊本『紫明抄』、東山御文庫蔵『七毫源氏』、九曜文庫本『源氏物語抄』は概ねどのような古注釈であるかを説明したい。

二、中世における『源氏物語』古注釈研究の重要性

現存している最も古い『源氏物語』古注釈は平安末期に成立した『源氏釈』である。『源氏釈』は、『弘安源氏論義』跋文に「世にもてなすことは、すべらぎのかしこき御代にはやすくやはらげる時よりひろまり、くだれるたゞ人のなかにしては、宮内少輔が釈よりぞあらはれける」と記されるように、後代の注釈に大きな影響を与える存在であった(1)。その

次に、藤原定家により『源氏物語』本文の巻末に注記を付した『奥入』がある。『源氏釈』と『奥入』は後の時代の古注釈と違い、内容は和歌に関する注釈が中心で、有職故実や、単語の説明が少ない。しかし、この二書の『源氏物語』古注釈史における影響力は大きく、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『河海抄』などには、『源氏釈』と『奥入』の注記のほとんどが引用されている。『奥入』の後に、どれほど古注釈が存在したか、明確ではないが、散逸した中で最も有名な古注釈は鎌倉期成立の『水原抄』であろう。『水原抄』についての詳細は第四節で述べるが、この本は河内守、つまり源光行と親行の親子の手によるものである。『水原抄』は早く散逸してしまったため、この注釈書がどのようなものだったかは、他書に引用される逸文からしか確認できないが、親行の子息にあたる聖覚の『原中最秘抄』の奥書により、『水原抄』は膨大な注釈であったことが知られている。

『水原抄』の研究といえば、本論文に扱う『葵巻古注』との関係が問題となる。なぜならば、『葵巻古注』は発見当初から、『水原抄』の一部ではないかという議論が長らく続いていたからである。『葵巻古注』は鎌倉時代に書写された『源氏物語』古写本であり、巻子本の形態で、『源氏物語』の「葵」巻の本文全文が記載されている点に特徴がある。しかも、本文の周りの余白や巻子本の裏面に非常に多くの注釈が記載される。『水原抄』の一部か否かにかかわらず、巻子本の『葵巻古注』は注目すべき注記を有しており、中世の『源氏物語』古注釈の研究にとって、非常に大事な存在であると考えられる。

『水原抄』の次に近い時代に成立したものとしては、『光源氏物語抄』がある。『光源氏物語抄』の詳細は第五節で述べるが、この本は編者が不明であり、親行の弟である素寂の『紫明抄』に先行し、しかも、鎌倉時代の多くの源氏注釈の活動を教えてくれる本でもある。但し、『光源氏物語抄』は江戸期に書写された二本の同系統の伝本しか現存せず、二本の比較で判明することはほとんどない。このような事情から、稿者は現存する他注釈書から、『水原抄』、および『光源氏物語抄』の引用を探すこととした。その結果、本論文には内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』と東山御文庫蔵『七毫源氏』を検討の対象に加えることになった。

三冊本『紫明抄』は『紫明抄』の他諸本の分量に比べると三分の一しかなく、『紫明抄』の略本や抄出本と言われてきたが、三冊本『紫明抄』には他の『紫明抄』諸本に全く見られない情報がある。それは、第三巻巻末に付される、『紫明抄』の成立過程を教えてくれる書状である。この書状がなければ、我々は『紫明抄』の経歴をほとんど知りえなかったのである。このような大事な情報があるにもかかわらず、三冊本『紫明抄』の研究は部分

的な検討にとどまっており、あまり注目されなかった。そこで、稿者は三冊本『紫明抄』をできるだけ詳細に検討しようと考えた。

『紫明抄』の後に、『源氏物語』の古注釈史において巨大な存在といえる『河海抄』がある。その少し後に、長慶天皇作とされる『仙源抄』がある。また、この南北朝時代に近い時代に、東山御文庫蔵『七毫源氏』が成立したと考えられる。『七毫源氏』には注釈が多く記載されるが、従来『源氏物語』古写本として扱われており、その注釈に関する先行研究はきわめて少ない。稿者の調査により、『七毫源氏』には現存古注釈にない注釈も多くあり、しかも、南北朝期よりさらに遡った時代の注記が残存している可能性もみえてきた。『七毫源氏』は中世の『源氏物語』本文だけではなく、古注釈の研究にとっても、大事な資料なのである。

最後に、江戸期書写の九曜文庫本『源氏物語抄』を取り上げた。『源氏物語抄』は中世の『源氏物語』古注釈から遠く離れるが、この注釈書の作成者は、注記は『水原抄』、『河海抄』、『千鳥抄』、『花鳥余情』、『一葉抄』、『弄花抄』から引用したとことわる。江戸期まで『水原抄』が存在していたとは考えにくいが、九曜文庫本『源氏物語抄』については中世の古注釈がどのように引用されたのかという問題が興味深く、本論文に加えた。

このように、本論文で扱う資料は興味深い情報を有しつつ、先行研究では触れられなかった古注釈書類である。

三、本論文の構成

本論文は四部に分けられており、各部で一つの資料を中心に扱う。

第一部では『葵巻古注』を中心に扱う。第一章は『葵巻古注』の先行研究でほとんど言及されていない当該本の本文区分に関する考察である。但し、『葵巻古注』の最も大事な問題は、当該本が『水原抄』であるかどうかという問題である。この議論は約五〇年にわたって続いてきたもので、本論文の第二章ではこの問題の解決を試みる。従って、第二章は『葵巻古注』と『水原抄』の関係を中心に考察し、さらに、『葵巻古注』の利用者についても想定してみる。

第二部では内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』を扱う。第三章では、今までの先行研究で言及されてこなかった、三冊本『紫明抄』の独自性について考察する。三冊本『紫明抄』の分量は少ないにもかかわらず、『紫明抄』の他諸本と異なる性質もみられるので、これらの

性質をまとめて考察する。第四章では『紫明抄』諸本における三冊本『紫明抄』の位置づけを試みた。先行研究では『光源氏物語抄』に先行するとみる説と、『紫明抄』他諸本より後とみる説とが対立している。この問題を解決するため、稿者は三冊本『紫明抄』と『光源氏物語抄』、そして三冊本『紫明抄』以外で唯一の『紫明抄』の完本である京大本『紫明抄』の内容を比較した。第四章では、これらの本の一致する注釈の割合を指摘し、『紫明抄』他諸本にみられず、『光源氏物語抄』と三冊本『紫明抄』だけに一致する注記についても考察する。

第三部では、東山御文庫蔵『七毫源氏』を中心に考察する。『七毫源氏』についての先行研究は少ない。そのため、第五章では『七毫源氏』を詳細に検討し、先行研究で言及されていない情報について考察する。

第三部の第六章と第七章は『七毫源氏』の注釈を中心に考察する。第六章では『七毫源氏』と鎌倉時代の『源氏物語』古注釈との関係を把握し、さらに注釈の時代をほぼ特定できる人物名のある注釈内容を指摘する。重要なのは他の古注釈に存在せず、『七毫源氏』だけにみられる注釈がふくまれる点である。『七毫源氏』は今後の注釈の研究においていっそう注目されるべきであろう。

続いて第七章では、『七毫源氏』と『光源氏物語抄』との関係について考察する。先述したように『光源氏物語抄』の伝本は二本しかなく、『河海抄』への影響など、限られた影響関係のみ指摘されてきた。このようにあまり流布していない『光源氏物語抄』が『七毫源氏』に引用されていることが、先行研究[2]で指摘されるものの、『光源氏物語抄』のどのような内容が引用されているのかについては具体的に指摘がなかった。稿者は『七毫源氏』において、『光源氏物語抄』と一致する内容を指摘するだけではなく、『光源氏物語抄』の構造がそのまま残された注釈内容に関しても指摘する。『七毫源氏』は江戸期に書写された現在の『光源氏物語抄』より、約三〇〇年も先行するものなので、『光源氏物語抄』原本に近い注記本文を有している可能性も考えられる。

第四部は九曜文庫本『源氏物語抄』を中心に考察する。まず、第八章では、九曜文庫本『源氏物語抄』がどのような注釈書なのかをまとめる。九曜文庫本『源氏物語抄』の先行研究は中野幸一氏の資料紹介[3]のみであり、研究論文でとりあげられることはなかった。但し、九曜文庫本『源氏物語抄』には他の古注釈にみえない特徴的な性質がある。

九曜文庫本『源氏物語抄』は十冊もあり、一冊は約百丁以上もある、膨大な古注釈である。九章では、九曜文庫本『源氏物語抄』の編者は実際に『水原抄』を参考にしたのかと

いう問題、ならびに当該本の「帚木」巻に多く引用される『雨夜談抄』との関係を考察する。江戸期に書写された当該本が『水原抄』を直接引用したとは考えにくいが、一方で当該本には興味深い「河内守」と関係のある注記がある。また、当該本に引用される『雨夜談抄』がどのような注釈なのかについても考察する。

以上、本論文の構成について示した。『葵巻古注』、三冊本『紫明抄』、『七毫源氏』、『源氏物語抄』を検討するにあたって、比較、対照する注釈は、鎌倉時代のものが多いが、それらのうち、『水原抄』と『光源氏物語抄』については比較すべきケースが多い。そこで、『水原抄』及び『光源氏物語抄』についての概略をあらかじめ整理しておく。

四、『水原抄』について

『水原抄』は鎌倉時代に成立した『源氏物語』古注釈であり、著者はともに河内守をつとめた源光行・親行父子である。『水原抄』は早い時期に散逸してしまったが、『原中最秘抄』奥書により、成立の背景を知ることができる。

『水原抄』の逸文が最も多くみられるのは『河海抄』である。「水原抄云」または「親行説」と書かれる注がそうである。『光源氏物語抄』には『水原抄』の書名が見いだせないが、「光行」と「親行」の名前を示す注記がある。

『水原抄』の逸文は『光源氏物語抄』と『河海抄』以外、『仙源抄』と『花鳥余情』にもあるが、時代と共に数が少なくなる。本論文で扱う資料、三冊本『紫明抄』と『七毫源氏』にも『水原抄』と書名で示される注記が存在する。これらの内容は他の『紫明抄』諸本に存在しない。さらに『七毫源氏』の『水原抄』注記は他の古注釈にない独自の注記であり、『水原抄』の研究にとって貴重である。『水原抄』の多くの先行研究は、『葵巻古注』がそうである可能性を示唆してきたが、稿者はこれまでとは異なる視座からこの問題にもとりくむこととする。

五、『光源氏物語抄』について

『光源氏物語抄』は長らく『異本紫明抄』と呼称されてきた。題簽と奥書に「紫明抄」とあり、注記者名も「素寂」が最も多くみられることから、『紫明抄』の「異本」と思われてきたためだが、堤康夫氏の研究[4]により、『光源氏物語抄』の成立は『紫明抄』より先

行するとされ、これが今日ではほぼ定説になっている。

『光源氏物語抄』の重要な特徴の一つは、ほぼ各項目に注記者の名前が記される点である。この点は、栗山元子氏が「鎌倉期に行われた『源氏物語』の注釈活動のあり方を窺い知ることができる資料として貴重である」[5]と述べる通りである。しかしながら、『光源氏物語抄』は江戸期書写の伝本二本しか現存しないこともあり[6]、後代の注釈書への影響に関しては、『河海抄』が指摘されているのである[7]。

『光源氏物語抄』の大きな特徴は、複数の注記者の名前や引用した先行注釈書の名前が基本的に逐一記されている点である。『光源氏物語抄』の編者は未詳であるが、稲賀氏は藤原時朝説[8]、堤康夫氏は金沢実時説[9]を提唱してきた。堤氏の論によれば、『光源氏物語抄』の編者は『源氏物語』の初学者で、直接問答したのは清原教隆のみであり、編者は教隆と親しい関係者と推測されるという。『光源氏物語抄』のもう一つの特徴は引用されている内容である。『光源氏物語抄』の注記では関連の漢詩文などを、注に不必要なほどの長さで丹念に載せる[10]。『光源氏物語抄』は高貴な人物に献上する『紫明抄』や『河海抄』と性格が異なり、研究のノートのようなものである。そのため、『光源氏物語抄』はあまり流布しなかったのだろうが、このような資料が『七毫源氏』などに引用されるのはとても興味深い事である。

*

以上、序章では、中世における『源氏物語』古注釈の研究の重要性を述べた上で、本論文でとりあげる四つの古注釈類について確認し、本論文の構成について説明した。あわせて、比較、対照される『水原抄』及び『光源氏物語抄』についての概略も示した。

【注】

（1）伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）の「源氏釈」の項にも同様の説明がある。

（2）池田亀鑑編『源氏物語大成』研究・資料篇（中央公論社、一九五六年一二月）や、稲賀敬二「中世源氏物語注釈の一問題――『正和集』から『原中最秘抄』へ――」（『源氏物語の研究 物語流通機構論』笠間書院、一九九三年、初出一九七二年）にこの件について指摘がある。

（3）中野幸一「近世初期写『源氏物語抄』」（『源氏物語の享受資料―調査と発掘』武蔵野書院、一九九九年）

（4）堤康夫「『紫明抄』と『異本紫明抄』」（『源氏物語注釈史の基礎的研究』桜楓社、一九九四年）

（5）栗山元子「『光源氏物語抄』編者考」（陣野英則・新美哲彦・横溝博編『平安文学の古注釈と受容』第二集、武蔵野書院、二〇〇九年）

（6）石川一他責任編集『光源氏物語抄』（武蔵野書院、二〇一〇年）の解題（新美哲彦）では「完本はノートルダム清心女子大学本のみ。宮内庁書陵部も完本であったが、関東大震災で第一冊を焼失。現在は第一冊を内閣文庫蔵『紫明抄』より補写している。この二本以外に、実践女子大学山岸文庫、国文学研究資料館初雁文庫、東海大学桃園文庫に、昭和に入ってから書陵部本を転写した新写がある」とされている。

（7）新美哲彦「『光源氏物語抄』から『河海抄』へ―注の継承と流通―」（『文学・語学』第一八六号、二〇〇七年三月）

（8）稲賀敬二「河内本の成立と流布」（『源氏物語の研究―成立と伝流―』笠間書院、一九六七年）

（9）堤康夫氏、注（4）論文。

（10）新美哲彦氏、注（6）解題。

第一部　『葵巻古注』の研究

第一章　『葵巻古注』の注記

――鎌倉時代の『源氏物語』古注釈との比較から――

一、はじめに

『葵巻古注』（七海本・吉田本）は、鎌倉時代の『源氏物語』の古写本であり、散逸した『水原抄』の一部ではないかと池田亀鑑氏により紹介されたもの[1]である。『葵巻古注』には『源氏物語』本文も全文が載せられており、本文の一部を抜き出して注を掲出する同時代の注釈書とは根本的に相違する。本章では、まず『葵巻古注』はどのような本なのかを説明し、『葵巻古注』の注記はどのような特色を持っているのかを検討する。特に先行研究ではほとんど言及されていない、本文区分に関する独特な注記について考察したい。検討に際しては、ほぼ同時代に成立した『光源氏物語抄』、ならびに素寂の『紫明抄』と比較する。特に、『葵巻古注』と『光源氏物語抄』との比較は先行研究が少ないので、これら二つの注釈書の相違点をおさえた上で、『葵巻古注』の特異性をとらえたい。

二、『葵巻古注』について

『葵巻古注』は、呼び名の通り『源氏物語』の「葵」巻しかない。鎌倉時代末期の本ではないかと推定されている[2]。当該本は巻子本であり、同時代の『源氏物語』の古注釈の中には同じ形態を持っているものが見当たらない[3]。『葵巻古注』は前半部「七海本」と後半部「吉田本」とに分かれている。

「七海本」は「葵」巻の冒頭から、途中「のゝしりさはくほと夜中にもなりぬれは、やまのさすなに」という『源氏物語』本文で終わり、「吉田本」はその続きの部分、すなわち「くれのそうつたちもえさうじあえ給はす」という部分から「葵」巻の終わりまである。吉田本には脱落部分がある。それは、葵上の死後、四十九日の忌が明けることが語られた後の部分で、「いとゝまちとをにそなりたまはんとおもふにいと」で文章が切れ、それ以下、源氏が桐壺院や藤壺のもとへ参上する場面と、「葵」巻後半の最も重要な場面というべき、源氏と紫上との新枕のことが欠落しているのである。翻刻の解題では、「もともと完備していたものがなんらかの事情によって切り出されたのであろう」と推察されている。[4] そのような次第で、「葵」巻の四分の三程度しかないのである。いずれにしても特に大事な点は、この本が『源氏物語』本文を全文載せており、その多数の傍注、あるいは頭注の形で、さらには裏書として注記がなされているところである。

『葵巻古注』のもう一つの大きな特徴は、『源氏物語』本文が河内本系ということである。当該本は『源氏物語』の「古注」として紹介されているものの、実際には『源氏物語』

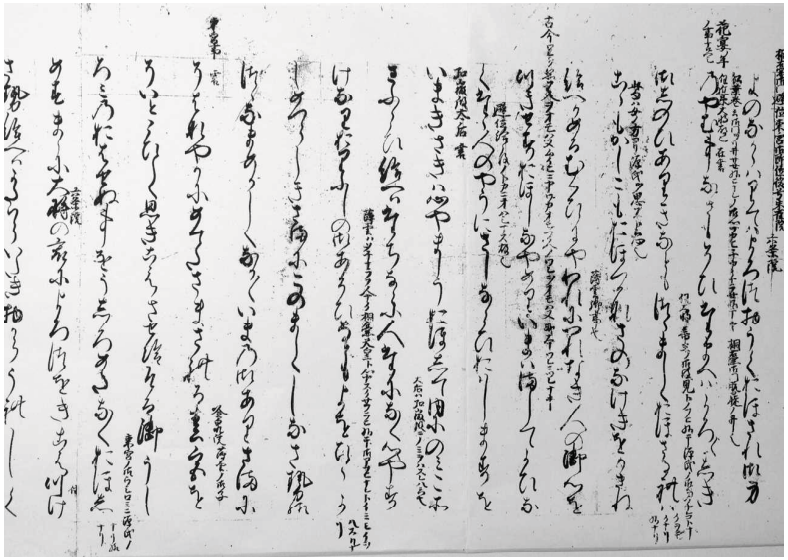

図１：『葵巻古注』七海本（冒頭・複製本）

の写本に書き込みがなされたもので、やや大きめに書かれた本文の行間、および上方に注釈が漢字片仮名混じりの小さい文字で書かれている（図1を参照）。また、やや長い注釈は本文の裏面に書かれ、大体三～四行以内にきれいにまとめられている[5]。裏面に注釈がある部分はほとんどの場合は本文の隣に、「裏」か「在裏」と示されている。注釈内容は歴史、故実有職、引歌など幅広く、他の巻の『源氏物語』の本文や系図まで記されている箇所もいくつかある。なお、仏典では巻子本型式の注釈が多くあり、裏書の特徴も共通する面がある。

『葵巻古注』を『水原抄』であると容易に断言できない理由として、当該本に『水原抄』の名前がどこにも書かれていない点と、『水原抄』の逸文の中に「葵」巻の項目が一例も見出せない点の二つがある。とはいえ、『葵巻古注』は『水原抄』そのものであろうとなかろうと、『源氏物語』の研究にとって、非常に興味深い体裁と内容をそなえた資料の一つであることは間違いない。

三、『葵巻古注』の先行研究

池田氏の論文では、「七海本」のみ扱っており、『原中最秘抄』『河海抄』『仙原抄』『花鳥余情』などにみえる『水原抄』逸文や親行説の逸文を基にして、『水原抄』の原形と性質を推測している。池田氏が推測した『水原抄』の性質は『葵巻古注』と完全に一致するとされ[6]、『葵巻古注』が『水原抄』そのものであると結論付けた。ただし、「七海本」の「タヒシカハラ事」と「左近藏人事」の項目が『原中最秘抄』にもあげられていて、しかも、その内容が一致していないことについては池田氏自身が気づいていた。

その後、重松信弘氏は池田氏も注目していた『原中最秘抄』との比較を通じて、『葵巻古注』が『水原抄』ではないと、池田論を否定した[7]。それから、この研究は五〇年ほど放置されたが、一九八五年に、寺本直彦氏によって重松説は否定されることとなった[8]。寺本氏は、前述した七海本の問題となっている二項目と、さらに、「吉田本」にみられる、「界法三味普賢大士」という一項目の注釈内容を『原中最秘抄』の内容と比較・検討した上で、次のように両者の齟齬とみられた点を説明した。

『原中最秘抄』は、『水原抄』の秘説をそのまま抄出したものではなく、『水原抄』の勘注をふまえながら、それ以外の注が加えられるべきものである。したがって、『水原抄』の勘注と『原中最秘抄』の勘注とが「全く一致している」ことはあり得ないのであり、問題は両者が矛盾なく関連しているか否かということである。

最後に寺本氏は次のように結論づけている。

全体的にみれば、葵巻古注は『水原抄』たるべき諸条件をほとんど満たすのであり、かつまた『水原抄』以外、これに相当する河内方古注は他にないとすれば、この巻子本源氏物語古注葵巻は『水原抄』の零簡かとする故池田亀鑑博士の提案に対しては、然りと答えざるをえないと思われるのである。

その後には田坂憲二氏が検討を加え、『葵巻古注』の特色を紹介・整理されている。[9] 田坂氏によれば、その特色とは、次の如くである。

イ、『源氏釈』『奥入』のあげていない引歌、証歌の指摘がかなりあること
ロ、本文中にない主語、目的語、話主等を丹念に補い、文脈の解釈に供していること
ハ、物語の前後の記事を豊富に引用し、物語の場面を理解しようとしていること
ニ、系図、系譜的注記が多く、系図を座右において注釈を行ったと思われること
ホ、年立的表現や年齢の注記が多く、物語を時間軸の中で捉えようとしていること
ヘ、故実有職に関する注記準拠となる史例の考証が詳しいこと
ト、和漢の書物を博捜して資料として用いていること

田坂氏の結論は「他に否定説の論拠がない以上、現在の段階では『葵巻古注』を『水原抄』と断じてよい」ということである。[10] ただし、伊井春樹氏の『源氏物語 注釈書・享受史事典』[11]の「源氏物語古注」の項目では「たしかに『水原抄』の蓋然性はありはするが、断定するまでにはいたっていないといえよう」と述べ、さらに、『水原抄』の項目では「なお、葵巻の本文に注記の存する巻子本の『源氏物語古註』は、『水原抄』の逸書かとされ

るが、蓋然性はあるものの断定するにはためらいも存する」と判断を留保している。

本章では先行研究においてまだ充分にとらえきられていない『葵巻古注』の特色を考究していきたい。それは、鎌倉時代の注釈書の多様性を把握することにとどまらず、物語本文の当時の読まれ方を探る契機ともなりうるだろう。

四、『葵巻古注』と鎌倉時代の『源氏物語』古注釈

次に、『葵巻古注』と『光源氏物語抄』、そして『紫明抄』という鎌倉時代の三つの注釈の特徴を簡単に述べる。

先行研究においては、特に田坂氏論で『葵巻古注』と『紫明抄』の関係について詳細に考察されている。[12] 一方、『光源氏物語抄』の「葵」巻も『紫明抄』と重なる注記項目がいくつかあるが、全四八項目の中では、『紫明抄』との相違のある項目が三項ある。ここでは、その中から二つの項目に注目したい。残りの一つは『葵巻古注』の本文区分に関わる注記なので、後の五節、【資料１２】で触れる。

まず【資料１】は、葵上の死後、源氏が左大臣邸に戻り、葵上の死去を哀悼する場面である。

【資料１】

『葵巻古注』

…又たくひおはせぬをたにさう〳〵しくおほ　葵上為一子之故也

しつるに・そてのうへのたまくたけたりけんよりも　袖上珠事

あさましけなり・大将のきみは二条のゐんにたにあから　六条院

さまにもわたりたまはす…（３０６）

『光源氏物語抄』

袖のうへのたまくたけたりけんよりもあさましけなりと云事

捧テ二掌上之珠ヲ一摧心中之舟ヲ一古願文　摧

たな心のうへに玉をさゝけて心のうちの舟をつくると〇しゆもんの心也　云　窓門　素寂

『紫明抄』

袖のうへのたまくたけたりけんよりもあさましけなり

捧テ二掌上之珠ヲ一　推ヲクタク心中之舟ヲ一古願文

『葵巻古注』は「袖上珠事」とだけ、傍注として簡潔に説明されている。一方、『光源氏物語抄』と『紫明抄』は注記が似ているが、『光源氏物語抄』には漢文の注記の後に、説明が加えられており「素寂」と書かれる。『紫明抄』ではこの説明は入れられていない。このような注記から、素寂は自分の初期の説を『紫明抄』にとりこむ際に、手を加えたり刈り込んだりしていることが推察される。

次に【資料２】は時雨の日に、源氏、大宮、頭中将らが傷心の歌を詠んだ場面である。この注記も『光源氏物語抄』と『紫明抄』の注記が同一ではない例の一つである。

【資料２】

『葵巻古注』

…かせあらゝかにふきしくれさとしたるほとな

みたもあらそふこゝちしたまふ・あめとなり

文選云巫山之女朝為行雲暮為行雨

くもとやなりにけんいまはしらすとうちひとり

文選相逢相哭雨女夢為雨為雲今不知夢得詩也

こちてつらつえつきたまへるさまをんなにては（３０９～３１０）

『光源氏物語抄』

あめとやなりくもとやなりけんいまはしらすとうちこち

てと云事

有所嗟二首

奥庚令楼中初見時　武昌春柳似二腰一支

相逢相失両如二夢一　為雨為雲今不知

鄂渚濛々烟雨微　女即魂遂暮雲帰

只應三長在二漢陽渡一　化作鴛鴦一双飛

夢ヲ得ハ白楽天同時人也　思人ニおくれてつくれる詩也

文選
巫山之女且為行雲暮行雨
もろこしにふ山と云山あり其山のふもとに男女すみて
年ころになりにけり男まつ女のさきに死す女別
をおしむことはりもすきてなけきけりある夕くれに
くろき雲となりて空へのほりてやかて雨となりけり
其よりして今の世にいたるまて此山夕暮になれは時雨
事たへすあふひのうへのかくれ給ひるを源氏よそへて
なかめ給けるになむ寂素

『紫明抄』

あめとなりくもとやなりにけんいまはしらすとうちひとりこちて
相逢相別雨如夢、為雨為雲今不知夢得
巫山之女、且為行雲、暮為行雨文選

『葵巻古注』には「文選」[13]からの詩句を示し、本文の行間にどこからどこまでの内容であるのかが記されている。『紫明抄』も同じく「文選」のことを示しているが、ただ簡潔に記したようである。一方、『光源氏物語抄』は「文選」からの引用に加え、仮名の説明がある。上述したように、『光源氏物語抄』では必要以上に長めに文献を引用する傾向がみとめられるが、これにより、『源氏物語』に引用された箇所の前後の内容を確認することができる。『葵巻古注』や『紫明抄』と違って、『光源氏物語抄』は引用した書物の内容をかなり注意しているとも言えないだろうか。これらの注により、『葵巻古注』、『光源氏物語抄』、『紫明抄』の性格の相違がよくわかる。簡単にまとめると、『葵巻古注』は本文の位置を注視し、解釈内容をすぐ確認できるように、注記を本文の行間に記しており、『光源氏物語抄』では引用された漢詩文の前後を確認できるように、長文で引用されている。それらに対して、『紫明抄』は本文の必要な部分だけを切り出し、注釈内容を簡潔に記すにとどまる。

五、『葵巻古注』の本文区分

『源氏物語』の本文の中には会話文、内話文、消息文などがあるが、『源氏物語』の古注釈の注記で、本文の区分についての注記が一般に見られるのは室町時代の『花鳥余情』以降[14]で、南北朝時代に成立した四辻善成の『河海抄』まではきわめて少ない。鎌倉時代に成立した『光源氏物語抄』には本文の区分の注記もあるが、それは「雨夜の品定め」における発言者が誰か、またどこからどこまでが会話文なのかがわかりにくいために付された注記のようで[15]、きわめて限られており、全体的には非常に少数である。一方、同時代成立の『葵巻古注』では本文の区分の注記の数がとても多く、これは鎌倉時代の源氏学者達が、『源氏物語』本文を分析的に読もうとしていた証拠の一つともなりうるであろう。これから、『葵巻古注』の本文の区分の注記を紹介し、興味深い点を掘り下げてゆきたい。

A、会話文

まず、【資料３】と【資料４】はいずれも『葵巻古注』の会話文の区分を示す注記である。『光源氏物語抄』にはこれらの本文に対して、いずれも注記がない。

【資料３】『葵巻古注』

六条御息所ノ御共ノ人ノ云詞ナリ
・これはさやうにさしいれなとすへき御くるまにもあらすと…（２８６）

モノ、気ノ詞　六条院
・すこしゆるへよ大将にきこゆへき事ありとのたまふ…（２９７～２９８）

葵上詞
・いてあらすやみのいとくるしきをしはしやすめたまへ…（２９９）

六条院詞
・かくのたまへとたれともしらねはおほつかなきを…（２９９）

【資料４】は【資料３】と大きな違いがある。この場面は源氏、それに左大臣家の人々もこぞって参内、さらに桐壺院の御所にも参ろうとするところである。

【資料４】『葵巻古注』

桐壺御門ニ参給也葵上ニカタラヒ給フ詞也
…・ゐんなとにまいりていとゝくま

かてなんかやうにておほつかなからすみたてまつらは
うれしかるへきを・みやのつとおはするにこゝちな（母宮葵上母）
くやはとつゝみてすくし侍もくるしきを・…（３０２～３０３）

『葵巻古注』の注記では「桐壺御門ニ参給也葵上ニカタラヒ給フ詞也」とある。この注記が他の会話文についての注記と異なるのは、誰に向けて話しているのかということ、つまり話の聴き手が示されていることである。この点、従来の研究では注目されていなかったようである。

他の古注釈、たとえば『細流抄』には「院などにも」の本文に「源の詞」という注記がある。この【資料４】の注記と最も近い内容をもつのは『岷江入楚』で、三条西家の秘説に続いて示される注記、「源の詞 葵へいとまごひし給ふ」の注記である。このように、何百年も離れている注釈書の注記に似ている内容があるのは興味深いところである。

B、消息文

消息文（手紙文）の本文の区分も『葵巻古注』には見られる。【資料５】は源氏が物思いに乱れる御息所を訪問した後、源氏から御息所に送る手紙の場面である。

【資料５】『葵巻古注』

みつきぬへきことゝなか〳〵にものおもひをとろかさ
るゝこちし給に・御ふみはかりそくれつかたある（六条院ノ御フミ也）
まいりくへきを・ひころすこしおこたるさまなり（文詞）
つる心地のにはかにいといたくゝるしけに侍（葵上ノ身ノスコシ減シツルカニハカニマタワツラハシキトナリ）
をえひきよかてなん・いかになか〳〵にときこえさす（イカニ中々ニ哥歟可尋）
るなと・あるを・れいのことつけとみ給ものから
そてぬるゝこひちとかつはしりなからをり（御息所）（泥ヒチナソヘタリ）

たつたこのみつからそうき・やまの井のみつもこと
六帖クヤシクソクミソメテケルアサケレハソテノミヌル、ヤマノ井ノ水
はりにとそ(是マテ文詞)ある・御てはなをこゝらのなかにすくれたり（２９５）
巨々楽多ノ中也

【資料５】の注記をみると、『葵巻古注』の性格がよく表れている。それは、本文のどこからどこまでが消息文か、ということをきちんと示していることである。まず、「御ふみはかりそ」の注記として、「六条院ノ御フミ也」があり、そして「まいりくへきを」の注として「文詞」がある。これらの指示により、『葵巻古注』の読者はこの本文が「手紙文」であること、またその開始する位置もすぐわかる。「そてぬるゝ」の和歌には「御息所」の注記があり、さらに最後には「やまの井のみつもことはりにとそある」の終わりには「是マテ文詞」の注記がある。これは「カッコ」のつけられている現代の『源氏物語』の本文と似ている。このような注記の示し方は『源氏物語』全文を引用しない注釈書にはなかなかできないことだと思われる。

ちなみに、『光源氏物語抄』と『紫明抄』は同じく、六条御息所の「山の井の水」に「くやしくそくみそめてけるあさければ袖のみぬるる山の井の水」の引歌を示すだけである。本文の区分に関する注記はその後も長らくみられないのであった。

C、心中の言葉

『葵巻古注』には「心中の言葉」を示す本文区分の注記がいくつか見られる。この点、特に田坂氏の先行論ではほとんど言及がなかった。それらの用例は大きく分けると、二種類がある。それは注記の中に「ノ給」の表現で「心中の言葉」を示す場合と、「ヲホス」で表す場合である。

①心中の言葉を示す「ノ給」

「ノ給」は普段会話文の発話者が高貴である場合に使われているものだが、『葵巻古注』には「ノ給」の表現を使って、心中の言葉を表す用例がいくつか見られる。まず、【資料６】は源氏が葵上と御息所の間に車争いが起こったという報告を聞く場面である。

【資料６】『葵巻古注』

・いといとをしくうしとおほして・
自此以下葵ノ上ノ心操ヲノ給ナリ
なをあたらおもりかによくおはする人のものになさけをくれ
健
すく〳〵しきところのつき給へるあまりにみつか
らはさしもおほさゝりけめと…（２８９）

この本文に対して『光源氏物語抄』には注記がないが、『葵巻古注』には「自此以下葵ノ上ノ心操ヲノ給ナリ」がある。これは源氏の心中の言葉であることを示すだけではない。本文の「自此以下」という指示によって、心中表現の開始位置を示すのは、『葵巻古注』の特徴である。

次に【資料７】、これは源氏が源典侍と歌の応酬をする場面である。『光源氏物語抄』にはここの注記がないが、『葵巻古注』には「源内侍ノ事ヲ源氏ノヽ給也」がある。これは「源氏が源内侍のことを考える」と言う意味で、「ノ給」の表現で心中の言葉を表す注記となっているようである。

【資料７】『葵巻古注』

たれならんのりならふ人のけしうはあらしは
紫上ヲ　わ
やとおしはかりきこゆへかめり・いとましからぬ
源内侍ノ事ヲ源氏ノヽ給也
かさしあらそひかな・おもておこすはかりのけさう
もかなとさう〳〵しくおほせと・（２９２）

続いて、【資料８】は源氏が時雨につけて、朝顔の姫君と歌を贈答する場面である。『葵巻古注』の注記は「槿斎院コノナケキヲトヒタマハヌ事ヲノ給ナリ」があり、これも源氏の心中の発話を指している注記である。

【資料８】『葵巻古注』

六条院
…なをいみしうつれ〳〵なれは・あ

槿斎院コノナケキヲトヒタマハヌ事ヲノ給ナリ
さかほの宮にさりともけふのあはれはみしりたま
ふらんとおしはからるゝ御こゝろはへなれは・くらきほ
となれときこえたまふ・（３１１）

このように「ノ給」という表現を注記に用いているのは、心中の言葉（内話文）を会話文と誤解しているということだろうか。これらの例が三例もみられること、他の本文区分がかなり精確にとらえられていると思われることなどから判断すると、この「ノ給」は、あくまでも高貴な作中人物の心の中で言葉が発せられていることをあらわしているのではないかと思われる。いずれにしても、『葵巻古注』以降の諸注釈ではなかなかみられない注記の表し方であり、注目に値する。

②心中の言葉を示す「ヲホス」

『葵巻古注』にはもう一つの心中の言葉を指す表現がある。それは「ヲホス」の表現である。【資料９】、【資料１０】、【資料１１】はその用例である。どちらも『光源氏物語抄』『紫明抄』などには注記がみられない。

まず【資料９】は、朝顔の姫君の深い思慮を表す場面である。

【資料９】『葵巻古注』

桃園式部卿宮女
…かゝる事を
きゝ給につけてもあさかほのひめきみはいかて
六条御息所ニ似シトナリ彼御息所ハウチトケテ心ヨハケレハコソ
人にゝしとおほせははかなきさまなりし御かへ
ナケカシキウラミモヲハ
りなともおさ〳〵なしさりとて人にくゝはし
セワレハウチトケシト斎院ノオホスナリ
長々　無
たなくなとはあらぬ御もてなしを…（２８４）

【資料９】の注記には「六条御息所ニ似シトナリ彼御息所ハウチトケテ心ヨハケレハコソナケカシキウラミモヲハセワレハウチトケシト斎院ノオホスナリ」で、朝顔斎院が心中で思っている内容について説明している。

この『源氏物語』本文では「いかて人にゝし」という箇所が、いわゆる内話の形式をと

っており、朝顔斎院の心の中の言葉そのものであるわけだが、『葵巻古注』の注記は、そのことをふまえながらも、より踏み込んで朝顔の心の中の思いを解説しているように思われる。その際に「ヲホス」が用いられているということであろうか。他の例も見てみよう。

【資料１０】は、懐妊中の葵の上が物の怪に悩まされる場面である。

【資料１０】『葵巻古注』

…よのなかあまねくおしみきこゆるを

きゝ給につけてもみやすところはたゝならすおほ　六条御息所

さる…　葵ノ上ノ人ニヲシマレ給フヲ御息所コトサラネタマシクヲホスナリ　（２９４）

この注記は「葵ノ上ノ人ニヲシマレ給フヲ御息所コトサラネタマシクヲホスナリ」がある。これは六条御息所の心中のさまを表す表現である。ここは、御息所の心中の言葉そのものが内話の形にはなっていない。

最後に、【資料１１】は葵の上が夕霧を出産し、御息所の悩みが深くなる場面である。

【資料１１】『葵巻古注』

……まして人のおもひいふへ

きことなと人にのたまふへきことならねは・こゝろひと

つにおもほしなけくに・いとゝ御心かはりもまさりゆく　御息所ノ御身ヲウトマシクヲホシテ斗中ヘモイカンナン　トヲホスナリ（３００～３０１）

注記は「御息所ノ御身ヲウトマシクヲホシテ斗中ヘモイカンナントヲホスナリ」とある。これも六条御息所の心中の言葉そのものではなく、心のさまをあらわす表現だが、「斗中ヘモイカンナン」などというように原文にはみられない言葉を用いて踏み込んだ解釈を示している点も注目される。

このように見てくると、『葵巻古注』の注記における「…ヲホス」というのは、作中人物の心のさまを深く踏み込んで解釈・解説する際に用いられる。一方、典型的な内話の形

式をとっていて、作中人物の心の中の言葉そのものの位置を区分しようという場合には「ノ給」が用いられるというような使い分けがされているのではないかと考えられる。

D、本文の内容に即した区分

続いて、本文の内容に関わる重要な注記が複数みられる箇所をとりあげる。

【資料１２】『葵巻古注』

…つれなゝから・さるへきおり〳〵のあはれをすくした

まはぬこれこそかたみになさけもみはつへきわさ

ナヲユヘヨシスキテ云事品定ニアリ　コレヨリハ六条御息所ナリ

なりけれ・なをゆへよしすきて人めにみゆはかり

巳上アサカホノヒメキミノ事ナリ　紫上

なるはあまりのなんいてきけり・たいのひめきみ

をさはおほしたてしとおほす・つれ〳〵にてこひしと…（３１２）

ここにとりあげられているのは、朝顔の姫君、六条御息所、紫上という女性たちの三人と関わる本文である。『葵巻古注』の注記はここにいくつか集中して入っている。まず、「なをゆへよしすきて」の注記は「ナヲユヘヨシスキテ云事品定ニアリ」がある。これは「帚木」巻に左馬頭の二番目の女性の体験談を指している。このように物語の前後の記事を示すのは、『葵巻古注』の編者の物語の理解度と記憶を表している。

さらに注目したいのは、ここでの注記は、内容に即した本文の区分を試みているということである。この本文を三つに分けてみると、まず「つれなゝから・さるへきおり〳〵のあはれをすくしたまはぬこれこそかたみになさけもみはつへきわさなりけれ」の注記は「巳上アサカホノヒメキミノ事ナリ」がある。この本文は朝顔の姫君を指しているということである。次に「よしすきて人めにみゆはかりなるはあまりのなんいてきけり」のところの注記は「コレヨリハ六条御息所ナリ」とあり、この本文は六条御息所を指しているという意味である。最後に「たいのひめきみをさはおほしたてしとおほす」の「たいのひめきみ」は紫上を指している。このように、女性三人の関わる本文には、『葵巻古注』がど

こからどこまでが誰のことを指しているのかをはっきりさせるための注記を入れている。

一方、『光源氏物語抄』には「なをゆへつきよしすぎて人めにみゆばかりなるをはと云事」の本文に、「いろならばうつるばかりもそめてましおもふ心をしるひとのなき」の引歌を指定している。この引歌は『奥入』の説である。この本文には誰のことを指しているのかは書いていない。これも『葵巻古注』と『光源氏物語抄』の性格の違いを表していると思われる。もちろん、『紫明抄』にも『葵巻古注』のような注記はない。現存する鎌倉時代の『源氏物語』古注釈のなかで、『葵巻古注』が特筆すべき性質をもっているということが明確になった。

六、終わりに

『葵巻古注』と『光源氏物語抄』、さらにまた『紫明抄』は鎌倉時代の成立であるが、性格には大きな相違がある。まず、『光源氏物語抄』は『紫明抄』などの将軍に献上するような注釈書と異なって、いわば内輪のノート的な性質を有しているように思われるが、それでも『光源氏物語抄』は大かたの『源氏物語』の注釈と同じく、必要のある本文を切り出し、注記を加えるといった形である。一方、『葵巻古注』には基本的に省略のない本文が中心で、それに付随する形で、傍記、頭注などの注が付される。どこからどこまでが何をあらわしているか、また誰の発言であり心中の言葉であるのか、などという点がはっきり指示されている。

『葵巻古注』の特徴はとりわけ本文の区分に関する注記の充実にある。この点、田坂氏もある程度言及されていたが[16]、今回はより丁寧に掘り下げてその特質をとらえてみた。これは室町時代以降、特に『花鳥余情』以降の『源氏物語』の古注釈において定着してゆく注記で、『光源氏物語抄』『紫明抄』『河海抄』のような早期の古注釈には珍しいが、『葵巻古注』には多くみられるのである。これは、『葵巻古注』の編者の物語をきちんと理解しようとしている努力を表していると思う。

このように鎌倉時代の『源氏物語』の古注釈は、その歴史においては早期のものであるが、それにもかかわらず、それぞれの形はさまざまである。中野幸一氏の論によると、注釈は本文と共に存在することが自然な形態で、『葵巻古注』は「現存の『源氏物語』の古

注釈書の中で、初期の注釈の原態をそのままにとどめていると思われる資料」だと認められている。[17] 将軍に献上された『紫明抄』、学者達の問答を多数載録している『光源氏物語抄』、そして本文についての分析的な解釈が多く見られる『葵巻古注』、これらの作成の目的の相違があるからこそ、各本の性格の相違も大きくなったのではないかと思われる。中世における『源氏物語』の古注釈の中では、本文全文が載せてあるものはきわめて限られているが、『伊勢物語』など本文全文が載せてある古注釈、さらには鎌倉時代書写の『源氏物語』写本で傍記を含むものなどとも比較することによって、『葵巻古注』のような注釈書をより理解しうるのではないかと思われる。今後の課題として研究していきたい。

【注】

（1）池田亀鑑「水原抄は果たして佚書か」（『文学』第一巻第七号、一九三三年）。池田論文では『葵巻古注』の前半に相当する「七海本」だけが扱われた。後半部の「吉田本」はまだ発見されていなかったのである。なお当初から、『葵巻古注』は「源氏物語古注」と呼ばれてきた。伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）も「源氏物語古注」として立項している。寺本直彦「『水原抄』と『原中最秘抄』との関係―源氏物語古註葵巻の考察の選定として」（『源氏物語論考・古注釈・受容』風間書房、一九八九年、初出は一九八五年）で、初めてこの本が『葵巻古注』と呼ばれるようになった。「源氏物語古注」と呼ばれる注釈書は他にもあって、たとえば右の『源氏物語 注釈書・享受史事典』では計四種が並ぶ。紛らわしさを回避するため、本稿では、寺本論文に倣って『葵巻古注』の呼称を用いる。

（2）池田亀鑑氏、注（1）論文。

（3）巻子本形式をとる『源氏物語』古注釈としては、他に南北朝時代の書写と推定されている伝浄弁筆『源氏物語古注』（「若紫」巻〈東京国立博物館蔵本〉ならびに「末摘花」巻〈慶應義塾図書館蔵本〉）があるものの、川上新一郎「伝浄弁筆源氏物語古注　翻刻と略解」（『斯道文庫論集』第四十輯、二〇〇六年）が明らかにしているとおり、両本とも「冊子改装」、すなわち元の冊子本から巻子本に改装されたものである。一方、『葵巻古注』は巻子本の大きさと紙のつながりの部分からみる

と、この本は元々冊子ではないことが確認できる。

（４）松田武夫「源氏物語古註解題」（紫式部学会編『源氏物語　研究と資料―古代文学論叢第一輯―』武蔵野書院、一九六九年）

（５）『葵巻古注』の七海本の複製本（一九三五年に古文学秘籍複製会から刊行された）によって確認すると、ほとんどの注釈は三～四行にまとめられている。それより長い内容もあったが（最大で八行程度）、その項目数はせいぜい五項目程度である。

（６）池田亀鑑氏、注⑴論文で「この古写本は、上述のやうに、あらゆる点から考へて、『水原抄』の性質と形態とを完全に具えてゐると云ふことが出来る」と述べている。

（７）重松信弘「七海兵吉氏所蔵葵巻」（『源氏物語研究史』刀江書院、一九四五年）

（８）寺本直彦「『水原抄』と『原中最秘抄』との関係―源氏物語古註葵巻の考察の前提として―」（『源氏物語論考・古注釈・受容』風間書房、一九八九年）

（９）田坂憲二『源氏物語享受史論考』の第三章「水原抄」（風間書房、二〇〇九年）

（１０）田坂憲二氏、注（９）論文。

（１１）伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）

（１２）田坂憲二氏、注（９）書の第三章、第八節「『水原抄』から『紫明抄』へ」

（１３）【資料２】『葵巻古注』の二行目の注記について、翻刻「源氏物語古註 葵巻二巻」では「文選」からの引用とするが、実際には「文選」にみられない。なお、桃園文庫蔵『葵巻古注』（「吉田本」の現写）では「文集」である。

（１４）陣野英則「作中人物の話声と〈語り手〉―重なりあう話声の様相―」（『源氏物語の話声と表現世界』勉誠出版、二〇〇四年）

（１５）陣野英則「『源氏物語』古注釈における本文区分―『光源氏物語抄』を中心に―」注（１４）書。

（１６）田坂憲二氏、注（９）書。

（１７）中野幸一「注釈の始まり」（渋谷栄一編、伊井春樹監修『源氏物語と注釈史』講座源氏物語研究・第三巻、おうふう、二〇〇七年）

第二章　『葵巻古注』と『水原抄』の関係

――鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の利用――

一、はじめに

序章で紹介したように、『水原抄』は鎌倉時代の代表的な『源氏物語』古注釈であり、河内本『源氏物語』を校合した源氏学者の源光行、親行の手により作られたもので、その名は現在までよく知られている。にもかかわらず、『水原抄』は何らかの理由であまり普及せず、室町時代あたりから、誰も伝本を確認できない状態になり、幻の本になってしまった。『水原抄』の内容は現存している注釈書にみられるいくつかの逸文しか知られていないのである。

しかし、昭和初期に池田亀鑑氏が『葵巻古注』を発見し[1]、この本こそが『水原抄』そのものではないかと推断した。本章では、その推察の疑問点を示し、検討を加えることで、『葵巻古注』が『水原抄』との関わりをもつことはみとめるものの、『水原抄』そのものとは考えられないということを論じる。

『葵巻古注』に対する疑問は、『葵巻古注』が巻子本であり、しかも「葵」巻本文の全文を掲載するという点で、現存している同時代もしくは近接する時代の諸注釈書とは二重の意味で体裁が異なっているところにある。しかも、池田論文以外の先行論はいずれも『葵巻古注』の注釈内容ばかりを重視し、『葵巻古注』自体の基本的な問題、つまり、なぜこの本は巻子本の形態で、かつ本文を全て載せているのかという点について検討してこなかった。『葵巻古注』の注釈内容が仮に『水原抄』に一致するとしても、『水原抄』から引用された注記である可能性、すなわち『葵巻古注』が『水原抄』そのものではないということもありうるだろう。稿者は池田論文には大きな問題が残っていると考えているので、

本章ではまず、池田論文の問題点を指摘する。さらにその問題点を検討した上で、『葵巻古注』が『水原抄』そのものとは考えにくいことを明らかにし、合わせて『葵巻古注』の利用のされ方と利用者を想定してみる。

二、池田論文の問題点

『葵巻古注』を発見した池田氏の論文に関して、稿者が抱く疑問は次の三点である。

A、『水原抄』が巻子本形式だったとする根拠の問題

B、『水原抄』の性質と『葵巻古注』の性質の問題

C、『水原抄』に『源氏物語』本文の全文が掲載されるかどうかという問題

以下、これらの点について詳しく検討する。

A、『水原抄』が巻子本形式だったとする根拠の問題

池田論文では、なぜ『水原抄』は巻子本型式であったのかについて述べている。そして、そのことを理由の一つとして、巻子本である『葵巻古注』が『水原抄』そのものだと結論づけている。しかし、その根拠は妥当かどうか、まず、池田氏の論述内容を確認してみよう。

池田氏は、『水原抄』と『原中最秘抄』の原形についてのヒントを前田家本『原中最秘抄』の奥書に見いだした。

前田家本『原中最秘抄』

光源氏物語相傳事、自曾組光行至行阿四代、所令相読也、随而此物語五十四帖・同水原抄五十四巻・并原中最秘抄上下二巻、其外口伝故実当道之庭訓悉令伝受者也…

池田氏は、この奥書から『水原抄』と河内本『源氏物語』が別のものであることを確認し、あわせてこの奥書において「此物語五十四帖」、「水原抄五十四巻」というように、「帖」と「巻」の使い分けがあることから、『水原抄』の原形は『原中最秘抄』と同じで、河内本『源氏物語』の冊子本形態とは違っていたと推測した。その際、現存している『原中最

秘抄』で巻子本型式のものが見当たらないにもかかわらず、池田氏は『原中最秘抄』の「澪漂」巻にある注釈内容にもとづいて『原中最秘抄』の原形は巻子本だったと推測した。

『原中最秘抄』「澪漂」巻

源氏大納言内大臣ニ成給ヌ云々

行阿云内大臣事（中略）周公旦ハ文王ノ太子、源氏君ハ桐壺ノ御子也、周公旦写宰相源氏君任内大臣相叶此義者歟裏ニアリ

注目されたところは、この注釈の一番最後にみえる「裏ニアリ」である。この「裏ニアリ」とはどういう意味だろうか。池田氏は次のように説明する。

「裏ニアリ」といふのは裏書に在りといふ意味ではないであらうか。代々書きつぎをして行く家の秘本が秘抄とまでよばれて重んぜられた秘説・口伝・庭訓を記した最貴重の書が、片々たる冊子で、貼紙だらけで書き足してあつたと考へるよりも、かういふ種類の本に有り勝ちの巻子本であつたと考へる方が、もつと自然ではないであろうか。原中最秘抄が已に巻子本であつたとすれば、水原抄もまた巻子本であつたではないかと考へても、必ずしも不当であるとは言へないと思ふ。そしてもし巻子本であつたとするならば五十四巻から成つてゐたであらうといふことは、前期の奥書によつて想像される事である。

つまり、池田氏の論では『原中最秘抄』の原形が巻子本であり、この注釈内容が裏面に書かれていたものだったから、『原中最秘抄』が冊子に整理された際、巻子本でしか使われていない文言が残されたとみている。これによって、『原中最秘抄』の原形が巻子本であったとすれば、『水原抄』も巻子本であったのではないかと結論づけた。果たしてこの結論が正しいものかどうか、検討を続けよう。

池田論文では、原形が巻子本だった『源氏物語』古注釈として、『水原抄』、『原中最秘抄』だけではなく、『河海抄』の名前も挙げている。[2] その根拠としては、『河海抄』の中にも「裏書」という文言がいくつかあり、さらに、東山御文庫蔵『七毫源氏』にも「河海

抄裏書云」がみえることがあげられている。

その『七毫源氏』の「絵合」巻の巻末の「河海抄裏書云」について説明しておく。「絵合」巻の最後の丁の裏に、前半は「河海抄裏書云」としてその内容が、また後半は単に「河海抄」としてあり、その内容が示されている。後半の「河海抄」の部分は現存する『河海抄』（天理図書館や龍門文庫などが所蔵している中書本系統の諸本など）の本文中に確認ができた。一方、「河海抄裏書云」の内容は『河海抄』の中に見当たらない。池田氏は『河海抄』の「裏書」に対して、『『河海抄』がもと巻子本であつて、後人がそれを冊子として書き改め、内容の大整理を試みようとして、（中略）はじめから冊子に書かれて単にそれを写すといふ程度のものであつたなら、あれほど乱れるわけはない。」[3]と推察している。『河海抄』については本章では本格的に扱いきれないが、この裏書のことはある程度丁寧に確認しておく必要があろう。

『河海抄』に記される「裏書」は全八項目があり、いずれも短い注釈である。表の余白に書き切れないほどの量ではない。次に三例ほど掲出してみる。

『河海抄』「紅葉賀」巻

御うちきの人めして

裏書御クシラハラフハ上薦也スマスハ中薦也〔不本〕

『河海抄』「竹河」巻

九日にそまいり給

后妃也裏書云〔不本真本ナシ〕

『河海抄』「竹河」巻

よの人のすさましきことにいふなるしはすの月夜…

裏書に老女也〔不本裏書以下ナシ〕

注目したいのは『河海抄』の「裏書」は『河海抄』全体にわたっているとはいいがたく、「紅葉賀」巻の一項目以外は、いずれも「竹河」巻と宇治十帖の例ばかりであった。しか

も、これらの注釈内容は、実のところ『河海抄』のオリジナルかどうかは分からない。『河海抄』の中に、四辻善成の案が「今案」や「案之」として記されている項目は多数みられるが、「裏書」の注釈の中にはそのように明示している例がみられない。他方において、『河海抄』に限った話ではないが、四辻善成は他の注釈書などの注記を引用する際に悉く出典を明らかにしているわけではなく、たとえば『光源氏物語抄』(『異本紫明抄』)などの先行する注釈書の名を示さずに同一と見なされる注釈を掲げている場合などもかなりみられる。[4] 従って、「裏書」の内容は何らかの巻子本型の注釈書から写されたことを示唆している可能性もあろう。その注記そのものが『河海抄』オリジナルのものとは限らないわけだから、『河海抄』の原形が巻子本であったと断じるわけにはゆかないだろう。一方、『七毫源氏』「絵合」巻の示す「河海抄裏書」はどういうものなのか不明だが、もし『河海抄』の原形が仮に巻子本だったとすれば、このような「裏書」からの引用を示す例が、この箇所だけではなく、もっと多くみられるのではないか。つまり、『河海抄』の原形を巻子本であると確定的にいうことは困難であるといわざるを得ないのである。

右に述べたような事情は、『原中最秘抄』の場合も同様である。「裏ニアリ」という文言があったとしても、それは『原中最秘抄』のオリジナルのコメントとは限らない。すなわち、先行する注釈の文言がそのまま引用されている可能性を否定しきれないのである。むしろ、原形が巻子本だったとしたら、もっとこのような文言が多くみられたのではないかと推察されるのである。『原中最秘抄』の原形が巻子本であったかどうかがわからない以上、当然、『水原抄』が巻子本であったという、さらなる推論も成り立たなくなる。

B、『水原抄』の性質と『葵巻古注』の性質の問題

『河海抄』、『珊瑚秘抄』、『仙源抄』などから『水原抄』の逸文を拾ってみると、およそ六〇項目がある(『水原抄』と示されていないが、親行の名前がみえる説を含むと、一〇〇項目ほどある)池田氏はこれらの『水原抄』の逸文を分類し、『水原抄』の注釈内容の性質を検討している。その結果、『水原抄』の性質は大別して次の八種があるとした。

一、仮名に漢字をあてた簡単な語釈

二、文字・語句・文章等の釈義

三、和漢の文学・史実・伝説等の出典を注したるもの
四、諸種の事項の考証を注記したるもの
五、諸本の本文の考異を注したるもの
六、疑問のままとして勘物を示さざるもの
七、源氏物語研究に関する古人の逸話の如きものを記したるもの
八、源氏物語中の人物・事件等について考証したるもの

これらの性質について、池田氏はさらに次のように述べている。これは大事なポイントなので、いささか長い引用となるが諒とされたい。

水原抄は特に水原抄の初期の形態は、源氏物語の本文傍・頭・脚等に試みられた書入本ではなかつたかと考へられる。否さう考へるより外に自然な考へ方はないと思ふ。最初の注釈の形態が、書入本であることについては、伊行の源氏釈や定家の奥入等が已に実証してゐて、少しも不思議ではない。たとひ後人によつて注のみを集められるような事があつたとしても、少なくともその初期に於て、しかも重代の家の本に於ては、恐らく書入本の形であつたに相違ないと思ふ。

もし水原抄が源氏物語の書入本であつたとすれば、あの豊富な内容はどうして書入れられたのであらう。恐らくそれは冊子ではなく、巻子であつたからであろうと考へられる。巻子本の裏面を利用しなければ、冊子の余白だけでは絶対にあれほどの大きな内容を書入れることはできないであらう。重代の家の秘本であり、代々考勘を追加して行つた水原抄が、冊子であるよりも巻子本である方がどれだけ自然であるか知れない。

確かに、『水原抄』の逸文からみると、『水原抄』の注釈の内容は豊富で幅も広い。しかし、そのような理由によって『水原抄』の形態が巻子本でなければならなかったと考えるべきだろうか。実は、池田氏がまとめた『水原抄』の八種の性質というのは、同時代の『光源氏物語抄』や『紫明抄』にも全部そのまま当てはまるのである。だが、いずれの伝本も巻子本型式ではないし、巻子本であったことを示唆するような記事も見当たらない。

『水原抄』（『原中最秘抄』の奥書によると五十四巻）の分量は『光源氏物語抄』（五巻）や『紫明抄』（一〇巻）よりはるかに多い可能性は高いだろうが、豊富な内容を持つというだけで、巻子本型式だったと推察するのは無理がある。しかも、分量が多ければ多いほど、実は巻子本の方こそ冊子本よりもよほど扱いにくくなるのである。

さらに大事なことは、現存する『葵巻古注』をみると、たしかに裏書があるのだが、『葵巻古注』の裏書きされた注釈の大半は三～四行程度の長くないものばかりなのである。[5] 巻子本型式の『葵巻古注』が、本当に親行の『源氏物語』研究の成果を集めている『水原抄』そのものだと考えて良いのか、疑問をいだかざるを得ない。

池田氏の示した『水原抄』の性質の中に、もう一つの重要な問題がある。それは先にまとめて示した八種のうちの七番目、「源氏物語研究に関する古人の逸話の如きものを記したるもの」である。池田氏によると、「これは俊成・光行・西円・親行等が『源氏物語』を研究するにあたつて経験したような様々の研究上の逸事の如きものを記した」という特徴である。具体的には次のような例がみられる。

『河海抄』「花宴」巻

さかゆくはるにたちいてさせ給へらましかは世のめいほくにや侍らまし

水原抄曰此哥詞遺文歟但定家卿所覧本さか行時とありける歟云々

『河海抄』「松風」巻

ことりしるしはかりひきつけたるおきのえたなとつとにて…

西円法師といふもの草に枝あるへからすといふ義を執して木の枝とよみけり親行にあひてさま〳〵に問答しけるよし水原抄にも載之親行又草の枝の支証とて古今の萩の露玉にぬかんととれはけぬよしみん人は枝なからみよ…

『河海抄』「幻」巻

うないまつにおほえたるけはひ

（略）…

水原抄云大国には人の墓のしるしに小松をならへうふる事あり云々若は又峯つゝきなみ木なとにもひとしくおなしすかたなる松を馬鬣松と号する歟此松を馬のたちかみにたとへたりたとへはたけひとしかるへき心也然は紫上のたけすかたに中将の君思よそへられてたゝならましよりはらう〳〵しとある歟如何子此事俊成卿殊難義也云々…

右にあげた逸文にみられるように、『水原抄』には親行と同時代の学者たちとの問答が記されているのである。これらの例は『河海抄』から引用したものばかりだが、他の『水原抄』の逸文でも、このような性質がみられる項目は少なくない。だからこそ、この性質は池田氏自身も認めていたわけだが、寺本氏の先行論[6]では『水原抄』の性質があらためて整理される際に、この点は削除されてしまった。削除した理由は簡単で、それは『葵巻古注』にこのような性質が一つも見当たらないからであろう。池田氏もこの点について気がつかないはずはないと思うが、『水原抄』逸文の中にしばしば見いだされるこの特徴的なタイプの注記が『葵巻古注』に一切含まれない理由について、氏の論文は何も述べていない。『葵巻古注』の中に、この『水原抄』にみえる明確な性質が見いだされなければ、『葵巻古注』は『水原抄』と「完全に一致」などとは言えないのである。

稿者は、この問答形式の注釈が『水原抄』の中でも最も重要だと思っている。なぜならば、これは親行が同時代の学者達に質問したり取材したりした結果を、記録のように書いたもので、親行の『源氏物語』研究の積極的な努力を表している内容だからである。しかも、このような問答形式の注釈内容は、『水原抄』だけではなく、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『原中最秘抄』、『河海抄』、『珊瑚秘抄』など、比較的近い時代の注釈書において一般的といいうるほどよく見られるものでもある。『葵巻古注』に全く現れていないのはなぜか。それは、親行が「葵」巻に限ってはどこにも疑問を抱いていなかったというよりも、『葵巻古注』の注釈内容は簡略化されていると想定するほうが妥当ではないだろうか。

以上ＡとＢの二点、すなわち『葵巻古注』の巻子本型式と『水原抄』の重要な性質にかかわる問題について検討してきた。『水原抄』は本当に巻子本でなくてはならなかったの

かというと、膨大な注釈を有する大部の『水原抄』には、むしろ冊子本こそがふさわしいようであった。また、『葵巻古注』の中に『水原抄』逸文にしばしばみられる問答形式がないことも、『葵巻古注』が『水原抄』そのものとは考えにくい面である。

『葵巻古注』は確かに『水原抄』との関わりは有するだろうが、稿者としては、『水原抄』から注釈をとり出し、その内容を簡略化し、『源氏物語』の本文に添えて、巻子本形式に仕立てられたものではないかと推定する。従って、『葵巻古注』の注釈と『原中最秘抄』の内容の関連ばかりに注目すると、この本は間違いなく『水原抄』だという結論になってしまうのだろう。しかし、右にみてきたように『葵巻古注』が『水原抄』そのものとは考えられない点は無視しがたいのである。

『葵巻古注』にはまだ問題がある。それは、この本における『源氏物語』本文の問題である。

C、『水原抄』に『源氏物語』本文の全文が掲載されるかどうかという問題

前述したように、『葵巻古注』は『源氏物語』「葵」巻の本文を全て掲載する巻子本である。池田論文では、『水原抄』に『源氏物語』の全文が掲載されていたことを示す根拠を『原中最秘抄』の中に見いだしている。

『原中最秘抄』「行幸」巻

ハネヲナラフルヤウニテオホヤケノ御ウシロミモツカウマツラント思ヒ給シヲ

水原抄ニ不載此尺

『原中最秘抄』「御法」巻

ワカ宮マロカ桜ハサキニケリイカテ久シウチラサシ木ノメクリニ丁ヲタテカタヒラヲアケスハ風モ吹ヨラシト

此事本ニ尺ナシ

池田氏は、これらの注釈をとらえて、「即ち、水原抄の中には、注釈を必要とする源氏の本文を特に揚げておきながら、勘物を付してないものがあつたと見ることができるであ

らう」と述べた。しかし、「水原抄ニ不載此尺」といった類の言及は、池田氏が指摘したように『水原抄』に本文だけがあり、注釈を添えていなかったという意味だろうか。あるいは、単にこの項目は『水原抄』にあげられていないという意味ではないだろうか。『水原抄』は現存しないので、『水原抄』と『原中最秘抄』との関係に類する、『河海抄』と『珊瑚秘抄』との関係に注目し、比較してみよう。

『珊瑚秘抄』には三二項目があり、その内、『河海抄』の中に「秘説」や「秘事」と示されている項目は二〇項目ある。また、八項目は『河海抄』に項目があるが、「秘説」と示されていない。そして、残りの四項目は『河海抄』に全く見出されないものである。このように、『珊瑚秘抄』の中にみられる項目が『河海抄』の方では見当たらないという例から察するに、『原中最秘抄』の中に項目があっても、『水原抄』にはその項目がないということはありうることだろう。従って、『原中最秘抄』に「水原抄ニ不載此尺」や「本ニ尺ナシ」とあることをもって『水原抄』に『源氏物語』本文の全文が載っていたと推断しうるわけではないと思う。

さらに、『葵巻古注』に掲載されている『源氏物語』の本文にはなお疑問がある。それは大きく書かれた『源氏物語』の本文と、注記の中で改めて引用された本文との間に異同がある点である。もし『葵巻古注』が『水原抄』であるならば、なぜ、同じ本から引用した本文に異同が生じたのだろうか。以下、例をみてみよう。

イ、

『葵巻古注』（３２５）、『源氏物語大成』(294-01)

すきにける御めのとたつひともしはおやの御かたにつけつゝ…

『葵巻古注』（３２５）

スキニケルメノトタツモノトハ…

『葵巻古注』の本文は「すきにける御めのとたつひと」で、それに対応する裏面の注釈の中に改めて本文があげられているが、そこでは「スキニケルメノトタツモノ」である。このように、この本文にある「ひと」と「モノ」が一致していない。表と裏の違いはある

が、両方の本文が書かれている位置は非常に近い（裏の直後）ので、書写のミスとは考えにくい。もし『水原抄』が本文全文の載せられている注釈書だったとしたら、このような本文異同は起こらなかっただろう。可能性としては、この注釈が元々『葵巻古注』の親本から写されたものではなく、別の本から転写されたと考えた方が自然ではないだろうか。さらに、このような例は他にもある。

ロ、

『葵巻古注』（３３１）、『源氏物語大成』（296-08）

御禊ノ時ノ車アラソヒノ事ナリ　裏
はかなき事のおりふしに人の…

『葵巻古注』（３３１）

此巻ニ云クトシコロハイトカ[ウ]シモアラサリシ御イトミコヽロヲハカナカリシ車ノトコロアラソヒニ人ノ心ウコキニケルヲカノ殿ニハサマテモオホシヨラサリケリ云々

『葵巻古注』の『源氏物語』本文は「はかなき事のおりふしに人の…」で、その行間に「御禊ノ時ノ車アラソヒノ事ナリ　裏」の傍注がある。裏面をみると、「此巻ニ云ク」以下で、「葵」巻の本文が改めて書かれているのである。『葵巻古注』には本文全文が掲載されているにもかかわらず、改めて同じ巻の本文をあげるのはなぜか。過剰なまでに丁寧な作り方をしているか、さもなくば、他の本から引用したということ以外、考えられないだろう。しかも、この注釈に引用された本文と『葵巻古注』の表にある当該箇所の本文をみてみると、次のように異同がある。

『葵巻古注』（３２６）、『源氏物語大成』（294-08）

…さるとしころはいとか[く]しもあらさりし御いとみこゝろをはかなかりしくるまのところあらそひに人の
[御]こゝろ[の]うこきにけるを・かのとのにはさまてもおほ

しよらさりけり…

このような本文の異同があることで、『葵巻古注』の本文と、裏の注釈内に引用された『源氏物語』の本文は同じものだったのかという疑念が強くなる。

次の例からも、同様の疑問が生じる。

ハ、

『葵巻古注』（３５１）、『源氏物語大成』(304-04)

…おほしなけきとふらひきこえさせたまふさまかへ
ウレシキセニモマシリテ事
りておもたゝしけなるを・うれしきせもましりて…

この箇所の裏面にある注釈内容は『後撰和歌集』の和歌だが、問題は裏面ではなく、表の本文の行間にある。大きく書かれている本文は「うれしきせもましりて」で、一方の行間に書かれている本文は「ウレシキセ|ニモマシリテ」である。この場合は、大きく書かれている本文の隣にあるにもかかわらず、異同がある。「ニ」一文字の有無というわずかな違いではあるが、この傍注はこの本文から直接に作られたものとは考えにくい。他の本から転写した可能性のほうが高いのではないだろうか。

このような本文の異同がいくつかみられることから、稿者は『葵巻古注』の注釈は『葵巻古注』に元々備わってあった注釈ではなく、他の本から転写された可能性が高いと考える。つまり、『葵巻古注』とは、まず河内本『源氏物語』の本文が写され、次いで適宜簡略化された注釈を添えられたものだと推定するのである。

これらの本文異同の例以外に、もう一つ、とても興味深い項目がある。それは、注釈が河内本『源氏物語』に対するものではなく、定家本（青表紙本）の本文に対する項目となっている例である。

二、

『葵巻古注』（３５３）、『源氏物語大成』(304-12)

…かゝるよはひのするにわかく

もこよふ事トハ　　さかりのこにおくれたてまつりてもまとふ事と（こよ　或証本如此）
透（モコヨツフ）　蚰　日本紀　うちなきたまふをこゝらの人かなしくみたてまつる…
蟲（モコヨフ）　紵　同

この本文からみられるように、『葵巻古注』の本文は「たてまつりてもまとふ事と」であり、「まと」の隣に「こよ」と傍記されている。さらに、頭注をみると、「もこよふ」についての短い注釈がある。『源氏物語大成』や『河内本源氏物語校異集成』を確認すると、この本文は次のような異同がある。

『源氏物語大成』(304-12)
【河】　もこよふ—まとふ河
【別】　もこよふことゝ—こととうことゝ御—まかよふと陽

加藤洋介編『河内本源氏物語校異集成』風間書房、二〇〇一年
　たてまつりて—たてまつりても〔墨〕尾—たてまつりても海（七海本）
　もこよふ—まとふ河　—まと（こよ）ふ海

河内本『源氏物語』の本文は、いずれも「まとふ」であり、「もこよふ」ではない。従って、『葵巻古注』のこの頭注は定家本の本文に対する注釈である。もし、『葵巻古注』に傍記の「こよ」が書かれなければ、この頭注は意味をなさないのである。それゆえ、『葵巻古注』には小さい文字「こよ」があって、「或証本如此」が記されているかもしれない。この例は『水原抄』の問題には直接関わらないようにもみえるだろうが、『葵巻古注』という一種の河内本『源氏物語』の中に定家本系統の本文に対する注記が記されているという特異性ゆえにとりあげてみた。果たしてこのような注記が本来の『水原抄』に含まれていたとみることは可能なのだろうか。即断はしがたいが、可能性としては、『葵巻古注』の作成される段階で定家本系統の情報が転記されたということもありうるのではないか。

三、『葵巻古注』の利用者の想定

『葵巻古注』が『水原抄』そのものではないとするならば、両者はその体裁、注釈のあげ方と分量などから察して、利用の仕方が異なっているのではないか。ということはそれぞれにふさわしい利用者が想定されていることになろう。以下、『水原抄』と『葵巻古注』の利用のされ方、ならびに具体的な利用者について想定してみたい。

『水原抄』は河内方の注釈書であり、既に指摘されているように、大部の注釈書だったことがわかっている。その分量は『光源氏物語抄』、『紫明抄』、そして『河海抄』のような同時代もしくは比較的近い時代のものと比較してみると、はるかに多いと推測される。そのような分量の多い注釈書は巻子本にするとしたら、どれだけ手間がかかるかわからない。活用も検索もしにくい。当時の研究のためにも向いていないと考える。冊子本の方が分量の点から察するにはるかに合理的であろう。

『水原抄』は『紫明抄』や『河海抄』と違って、誰かに献上するために作られたものではないと考えられる。少なくとも、そのような記録はない。従って、『水原抄』は著者、親行の周辺で使われていたものであり、それゆえに、あまり普及していなかったのかもしれない。この点で『水原抄』は『光源氏物語抄』とかなり似たような環境において用いられたと考えられるのではないか。『光源氏物語抄』の伝本は、完本としては一種類しか現存していないが(7)、幸い残っているので、『河海抄』の中に引かれている注釈が多くあることが確認できる。この本は元々名前がないともいえる注釈ゆえ、『河海抄』では『光源氏物語抄』から引用したということが一切示されない。現存している『光源氏物語抄』がなければ、誰もこの本からの引用だと判断することができないのである。

『水原抄』のほとんどの内容は源親行の手により作られたものであろう。親行は河内本『源氏物語』を校合した人物であり、四辻善成も河内本『源氏物語』を使用して、『河海抄』を作った。このように、『源氏物語』の知識を持ち、それなりに有名な学者でもあった親行は、自分の知識が一番だとおもわず、何か疑問があったら、他の学者たちに伺い、『水原抄』に記した。『水原抄』が現存しなくても、『水原抄』の逸文から、親行のその積極的姿勢がくみとれる。

一方、『葵巻古注』はどのような古写本か、あらためて考えてみると、残念ながら、現

在のところ、実物にふれる機会が得られないため、複製本などによって確認したまでだが、それでも、『葵巻古注』はとても古くてきれいな巻子本であることがわかる。たとえば一行の字数、行幅、本文の位置、裏面の注釈の位置など、よく計算されて丁寧に作られたものであることが容易に確認可能である。この点に対して、実物をよく検討した池田氏は、次のように言及していた[8]。

（稿者注：『葵巻古注』は）書写年代は断じて鎌倉末期を下るまいと思はれ、能筆とは言はれないが、ある原本があつて、それを忠実に模写しようとする意図を自ら示してゐる。恐らくは家の秘本としようとして浄書したものか、或いは然るべき地位の人に贈ろうとして写したものかと察せられる。書風は古筆家が一般に書家流となす所のものである。巻首にはやや厚手の鳥の子に、表面は金襴、裏面は金箔を張つて表紙及び見返しとなし、竹の軸を付す。これ等の金襴、金箔は巻尾の水晶の軸と供に後人の付す所である。

「家の秘本」として「浄書」された可能性にも言及があるが、池田氏が二つ目の可能性として述べる通り、この古写本は非常に丁寧に作られたもので、「然るべき地位の人に贈ろうとして写したもの」という推定が正しいと思う。このように丁寧に作られた巻子本は、当時の学者たちが研究上使ったとは考えにくい。むしろ、誰か（相対的に）高い地位の人に向けて、『源氏物語』の本文に、本文区分や簡略な注釈を添え、『源氏物語』を研究するのではなく、ある程度のスピードで読み進めることができるような写本を作ろうとした可能性が考えられよう。そのように想定してみると、親行の研究上の重要な記録ともいうべき問答形式の注釈内容が削除されていることも納得されるのではないか。

四、終わりに

本章では、まず、池田論文が提唱した『水原抄』は巻子本であったとする説の根拠について検討した。池田氏は、『原中最秘抄』の奥書における「帖」と「巻」の使い分け、同じく『原中最秘抄』の注釈の中にあった「裏ニアリ」という言及などから、『水原抄』は

巻子本であっただろうと推測したが、その説は容易にはなり立ちにくいことを確認した。また、豊富な内容があるから、巻子本型式のほうが自然だという池田論文の指摘についても、根拠が乏しいばかりか、むしろ冊子本の方が大量の注釈を掲載するのに向いているということを指摘した。

次に、池田氏が『水原抄』の逸文から推察した『水原抄』の性質だが、そのうちの「『源氏物語』研究に関する古人の逸話の如きものを記したるもの」に相当する注釈が『葵巻古注』に全くみられないことを重視した。池田論文より後の先行論ではこの確実な特徴を『水原抄』の性質から削除してしまったが、稿者はこのタイプの注釈こそが『水原抄』の重要な部分であり、それが『葵巻古注』にみえないのは、少なくとも『葵巻古注』が『水原抄』そのものとは考えにくいことを示唆していると判断した。

さらに、『葵巻古注』の注釈の中に引用された『源氏物語』本文に異同がみられるという問題もある。もし、『葵巻古注』が『水原抄』そのものだとしたら、このような異同は起こらなかったと考えられる。

これらのさまざまな点をふまえてまとめるならば、『葵巻古注』が『水原抄』そのものに相当するとは到底考えられないのである。あえて推測を重ねるならば、『水原抄』をベースにして、そこから適宜取捨選択された注釈を『源氏物語』本文に添えていったものと考えられよう。

最後に、『葵巻古注』の利用者については、池田氏の論文にも一例として想定されていたように、誰か高い地位の人物に献上するために作られたと推測した。鎌倉時代の『源氏物語』古注釈においても、室町期以降と同様に、学者が利用するための本と、献上される本というように、利用目的が異なるものが併存していたものと推測するのである。

【注】

（1）池田亀鑑「水原抄は果たして佚書か」（『文学』第一巻第七号、一九三三年十月）

（2）池田亀鑑氏、注（1）論文では「筆者は河海抄さへもその秘本は巻子本であつたと信じてゐる」と述べる。

（3）池田亀鑑氏、注（1）論文。

（4）新美哲彦「『光源氏物語抄』から『河海抄』へ――注の継承と流通――」（『文学・語学』

一八六巻、二〇〇七年三月）

（5）『葵巻古注』の七海本の複製本（一九三五年、古文学秘籍複製会から刊行された）によって確認すると、ほとんどの注釈は三～四行にまとめられている。それより長い内容もあったが（最大で八行程度）、その項目数はせいぜい五項目程度である。

（6）寺本直彦『水原抄』と『原中最秘抄』との関係―源氏物語古註葵巻の考察の前提として―」（『源氏物語論考・古注釈・受容』風間書房、一九八九年）

（7）『光源氏物語抄』の伝本はノートルダム清心女子大学本と書陵部本があるのだが、両本の字や仮名遣いが完全に一致するように書写されているので、これら二つの伝本を一種類ととらえておく。なお、書陵部本の第一帖は関東大震災により焼失され、四帖が残っている。

（8）池田亀鑑氏、注（1）論文。

第二部　内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の研究

第三章　内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の独自性

一、はじめに

鎌倉時代の代表的な『源氏物語』古注釈書である『紫明抄』は、伝本の数が少ない上に、現存している完本は京都大学文学部国語学国文学研究室蔵本、そして、本章で扱う内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』（以下三冊本『紫明抄』または単に「三冊本」と呼ぶ）の二本しかない。それら以外では、東京大学総合図書館蔵本、内閣文庫蔵十冊本、龍門文庫蔵本などの、「若紫」～「花散里」の七巻を欠く系統本がある。

本章では、まず、内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の概要、そして先行研究を紹介し、次に、従来とらえられていなかった当該本の特徴をおさえた上で、三冊本と『水原抄』『光源氏物語抄』『河海抄』さらに『花鳥余情』との関わりについて多角的に検討する。その際、特に『紫明抄』他本とは大きく異なるユニークな注記項目をなるべく精密にとらえることにより、三冊本『紫明抄』の独自性について考察する。

二、三冊本『紫明抄』の先行研究

『紫明抄』は、素寂が久明親王の命により作成したものである。伝本系統は従来、京大本系統と内閣文庫十冊本系統（東大本系統とも）[1]の二系統に分けられている。田坂憲二氏の研究[2]により、内閣文庫十冊本系統は、さらにまた東大本群と龍門文庫本群に分けられる。

一方で、三冊本『紫明抄』は、引用された『源氏物語』の本文と注釈内容、そして他の『紫明抄』諸本にみえない独自の項目から、上記二系統とは別に位置づけられてきた。

三冊本『紫明抄』は名前の通り三冊しかないが、内容は『源氏物語』五十四帖と「雲隠」巻の注釈を含む。三冊本『紫明抄』の分量が京大本『紫明抄』の半分にも及ばない程度であるため、三冊本については、『紫明抄』の省略本[3]あるいは抄出された略本[4]だと言われてきた。しかし、果たしてそうだろうか。

重要なのは、三冊本『紫明抄』だけに、他の諸本にはまったくみられない、『紫明抄』の成立過程にかかわる書状が付随するという事実である。

永仁元年としの暮に此抄将軍家のめにしたかひて第一第二の巻を捧奉て同晦日に返し給しかは（御使一条左中将殿）　且はよろこはしき思ひをなす処に同二年四月十五日一部可進書之由依被仰下（御使同前）同五月六日ニ令書進畢其状云紫明抄十巻馳老毛之禿筆終書写之□（如本）却作者也　※□は解読不能

ひかりある君か御代とそあらはれん入江になつむわかのうらなみ
なれそめて忘なはてそむらさきの色よりいてしみつくきのあと

便宜之時以此趣可有御心得之由可令披露給候者素寂恐惶謹言

苗人後朝　　素寂上

――〈改頁〉――

伊勢前司殿

紫明抄備披覧畢神妙之由其沙汰候也

いとゝ又名そきこゆへき光ある御代にあひぬるわかのうら浪あかす見て心にしめん紫の色をあらはす水くきのあと抑揚名介三日夜餅事可被注申之状如件

五月十二日　　能成

素寂御房

この書状によって、我々は『紫明抄』の成立の様相を把握し得るのだが、このような情報はなぜ、分量の少ない三冊本『紫明抄』にのみ残っているのだろうか。三冊本成立当初から付随していたか、後補かどうか、といった問題も含め、現存する資料の少ない鎌倉時代の『源氏物語』古注釈史への理解を深め、あわせて河内方の注釈史の展開を探るためにも、三冊本『紫明抄』の実態を把握する必要があろう。

三冊本『紫明抄』の研究を牽引してきた田坂氏は、『葵巻古注』と三冊本とが近いこと[5]や、三冊本の「賢木」巻にみえる「未勘」という注記があることなどを踏まえ、『光源氏物語抄』の成立は『紫明抄』より先であるという定説[6]があるにもかかわらず、三冊本の親本が『光源氏物語抄』より前の初稿本的位置にあることを示された[7]。その上で、その親本を抄出したものが現存する三冊本だと推測されている。

田坂論文の指摘で重要なポイントは、他の『紫明抄』諸本には見いだせない『葵巻古注』独自の注釈内容と一致する項目が三冊本には見られるという点である。このことから、『葵巻古注』から直接影響を受けるかどうかは措くとしても、三冊本の粗本は古態を残していると想像される。

また、田坂氏の先行研究により明らかになった興味深いデータがある。すなわち、三冊本『紫明抄』は抄出本だと言われてきたが、項目数においては、完本である京大本と同じ数を持つ巻もあり、さらに京大本の項目数より上回る巻さえあるということである[8]。この情報により、三冊本『紫明抄』は抄出本や略本だと考えにくいのである。

一方、岩坪健氏は『光源氏物語抄』と三冊本の「葵」巻を検討し、さらに『仙源抄』の本文と内容を比較した結果、三冊本は、京大本の成立後、他の注釈書からの内容が追加された三撰本『紫明抄』が完成したのちに、その三撰本から抄出されたものとする。さらに、素寂が抄出したこの三冊本こそが献上本である可能性についても述べている[9]。田坂氏と岩坪氏の説はちょうど正反対ということになる。三冊本『紫明抄』の位置は第四章で考察することとし、次節以降では、三冊本『紫明抄』の特徴を指摘する。

三、三冊本『紫明抄』の特徴

三冊本『紫明抄』は他の『紫明抄』諸本と違って、いくつかの特徴がある。独自の項目がみられるという点を除き、簡単にその特徴をまとめると次のようになる。

A、引用された『源氏物語』の本文の長さが『紫明抄』他本と異なる。

B、編者の作成途上のコメントがある。

C、『紫明抄』他本にはみられない『水原抄』と「親行本」の異本注記がある。

以下において、これらのA～Cのポイントを確認してみよう。

A、引用された『源氏物語』の本文の長さ

まず、「浮舟」巻の一項で、京大本と三冊本の『源氏物語』本文の引き方を比べてみる。

【資料１】「浮舟」巻（注記内容を略し、引用されている『源氏物語』本文のみ掲出する）

三冊本『紫明抄』

絵なとをもみ所おほくかき給へれはわかき心ちには思ひもうつりぬへし心より
ほかにみえさらんほとはこれをみ給へよとていとおかしけなる男女もろともに
ひふしたるかたをかき給てつねにかくてあらはやなとの給になみたおちぬ

京大本『紫明抄』

ゑなとを見ところおほくかき給へれはわかき心ちには思もうつりぬへし

三冊本には、京大本と同じ本文が取り上げられているが、破線部のように、京大本より遙かに長い本文が引用されている。こうした項目の例は他にも多く見られる。

しかし、次の例のように、引用された本文が長く見えても、実はそうではない場合もある。『光源氏物語抄』もあわせて比べてみる。

【資料２】「蜻蛉」巻

三冊本『紫明抄』

かへたらはとゆへあるかみにかきたり繪(b)にかきても恋しき人をみる人はなくや
はある　李夫人の事也

『光源氏物語抄』

恋しき人をみるト云事　李夫人　素寂

東大本『紫明抄』

ゑにかきて戀しき人をみる　李夫人

※京大本『紫明抄』もほぼ同一

この項目では、一見すると三冊本が東大本より、長い本文を引用しているようにみえるが、実はこの本文は二つの断片から成り、(a)と(b)に分けられる。

(a)かへたらはとゆへあるかみにかきたり（1963-05）

(b)繪にかきても恋しき人をみる人はなくやはある（1968-02）

（ ）内の『源氏物語大成』の頁数と行数から確認できるように、この二つの本文は正しい順番に並べている。しかし、(a)の本文は『光源氏物語抄』や『紫明抄』他本にない。編者が元々注釈を付けようとした本文だったものが、注記を加えないままになったか、あるいは何らかの理由で消されてしまったのかもしれない。

さらに、次のような場合もある。これは同じく「蜻蛉」巻からで、【資料２】の次の項目である。

【資料３】「蜻蛉」巻

三冊本『紫明抄』

せり川の大将のとほきみの女一宮思ひかけたる秋の夕暮

古物語に　水になれ月にめてゝつらたゝす此宮そかゝるにゝちかいとこよなし

もてはやし給あさ露めなれてしなをいまみん初花のさまし給る

『光源氏物語抄』

せり川の大将のとをきみのト云事也　古物語事也

京大本『紫明抄』

せりかはの大将のとほきみの　古物語　　※東大本『紫明抄』もほぼ同一

【資料３】はせり川大将の物語に言及する箇所だが、この物語は早く散逸し、『源氏物語』古注釈には一般に「古物語」とだけ書かれている。ただし、三冊本のほうは、「古物語に」のあとに「水になれ月にめてゝつらたゝす」云々の長い本文らしきものがある。先行研究[10]では、せり川大将物語の逸文と思われる文章を引用していると指摘しているのだが、

実は「水になれ月にめてゝつらたゝす」云々は『源氏物語』「蜻蛉」巻の本文である(『源氏物語大成』、1977-02)。従って、長い注記内容にみえても、実は『源氏物語』の本文が混ざっている場合もあったのである。

B、編者の作成途上のコメント

三冊本『紫明抄』のもう一つの特徴は、編者の作成途上のコメントがみられる点である。これらのコメントは完成度の高い東大本や京大本にはみられない。先行研究[11]では「賢木」巻に「未勘」の項目があることを指摘しているのだが、本章では先行研究の指摘がない例を三つほどあげる。

【資料4】「夕霧」巻

三冊本『紫明抄』

すへなきやうに　又一本にはするゑなきやうに　可見他本

京大本『紫明抄』

すへなきやうに人〳〵おもひいふ　無便スヘナキ　※〈東大〉もほぼ同一

三冊本には「又一本にはするゑなきやうに　可見他本」と書かれている。ここには、三冊本の編者の、積極的に他の本の異同を調べようとする意志も表れている箇所であるので、「可見他本」は作成途上のコメントであろう。

【資料5】「橋姫」巻

三冊本『紫明抄』

しみといふむしのすみかになりて　衣虫シミ

蠹(シミ)　魚　蟫　衣魚　紙魚等　後勘也

『光源氏物語抄』

しみ（衣虫）といふむしのすみかになりてと云事

文集第十四　江綫白紙両三束半是君詩半是書経（マテ）年不展縁身ノ病今日開着生蠹奥　西円

京大本『紫明抄』

しみといふむしのすみかになりて　衣虫シミ　※東大本『紫明抄』もほぼ同一

三冊本の注記内容は「衣虫シミ」までが『紫明抄』他本と同様だが、その後に『紫明抄』他本にみえない漢語の注記があり、最後に「後勘也」とある。これもまた、編者の作成途上のコメントであろう。

【資料６】「椎本」巻

三冊本『紫明抄』

さく桜あれはいまひらけそむるなと色々にみわたさる

さくらさく桜の山のさくら花　前勘

『光源氏物語抄』

ちるさくらあれは今ひらけそむるなと云事

桜咲桜の山のさくら花ちる桜あれはさく桜あり　伊行

京大本『紫明抄』

ちるさくらあれはいまひらけそむるなと

さくらさくさくらの山のさくらはなさくさくらあれはちるさくらあり

※東大本『紫明抄』もほぼ同一

【資料６】では三冊本が「さくらさく」の引歌をあげている。この引歌は『源氏釈』の出典未詳歌である。注目したいのは引歌の下の句が省略された点と、最後に「前勘」がある点である。この引歌は、『紫明抄』の中では「椎本」巻よりも前の「竹河」巻において

も「さくさくらあれは」の本文に対してあげられていた。それゆえに、ここに「前勘」と記したかもしれない。それは、編者のメモのようにもみえる。

これらのように、三冊本では編集途上の段階にあると思わせるようなコメントが一部に含まれているのである。

C、三冊本『紫明抄』の『水原抄』と「親行本」の異本注記

『紫明抄』の中には異本注記の「イ」がいくつかみられるのだが、基本的にどの本と比較したのかを示すための書名が書かれていない。しかし、三冊本には『水原抄』や「親行本」の異本注記があり、とても珍しいのである。まず、「親行本」の異本注記をみよう。

【資料7】「常夏」巻

三冊本『紫明抄』　　親行本如此

しらへすこしひき給ことつゐ(ひイ)いとになくいまめかしうおかし

和琴也　琴粒(コトツヒ)　ことつひ　ことさい　なとあり

京大本『紫明抄』

ことつひいとになく　　和琴琴粒　　※東大本『紫明抄』もほぼ同一

三冊本には異本注記があり、「親行本如此」と添えてある。「親行本」はおそらく、源親行の手による河内本『源氏物語』のことであろう。

つづいて、**【資料8】**と**【資料9】**は同じく異本注記の例だが、「親行本」ではなく、『水原抄』との本文の異同を示す異本注記である。

【資料8】「総角」巻

三冊本『紫明抄』

常不軽をなむつかふ(つかせイ)まつらせ侍るなと申　水原如此

京大本『紫明抄』

おもふ給へえたる事侍て常不軽をなんつかうまつらせ侍るなと申

【資料９】「手習」巻

三冊本『紫明抄』

なにかをちきな さ(マヽ) ともに心み侍ぬれいつらいそたち(くイ水原)ことりまいれ

本點如此但いつらいそたち(くイ水原)ことゝりてとよむへきかの本からのをしきの屎は

人の名人也古今作者にあり、又貫之童名をは内教坊阿事子屎と云々

京大本『紫明抄』

いつらくそたち本如此、切句點、差声、予不得道理、只いつらくそたちとよむへきにや古今作者に屎あり、又貫之童名内教坊の阿古屎云故也

「親行本」および『水原抄』の異本注記は三冊本の中で【資料７】、【資料８】、【資料９】の三箇所のみに見られる。三冊本は近世初期ごろに作成されたと思われる写本だが、(12)「親行本」や『水原抄』との比較の箇所があるので、三冊本の祖本は古くからあったのだろうと考えられる。さらに注意したいのは、『水原抄』も河内方のものであり、源親行の河内本の本文に非常に近いはずが、三冊本の編者は両者を確認している点である。すなわち、『水原抄』と「親行本」の『源氏物語』本文を別個のものとして扱った可能性も示唆されよう。

四、『水原抄』と関わる注釈内容

三冊本において、引用される『源氏物語』古注釈書の名が明示されるのは『水原抄』と『原中最秘抄』のみである。『水原抄』の名称は三項目（異文注記二項目、注記内容一項目）に、『原中最秘抄』の名称は「葵」巻の頭注に一回のみある。これら以外は、特に注釈書名を記すことがない。三冊本の中に『水原抄』の名前がみえるその一項目は「東屋」巻にある。ここでは『光源氏物語抄』と『河海抄』も参考までにあげることとする。

【資料１０】「東屋」巻

三冊本『紫明抄』

ひとひはのしとてないけうはうのわたりよりむかへとり

内教坊尾前司教朝説万秋楽に内教坊と云事在也云々水原ニみえたり

『光源氏物語抄』

ないけうはう　内教坊おほ殿ゐのかたはら也

京大本『紫明抄』

ないけうはう　内教坊おほとのゐのかたはら也

※東大本『紫明抄』もほぼ同一

『河海抄』

ないけうはうのわたりよりむかへとりつゝならはすてひとつ

ひきとれはしをたちゐおかみてよろこひろくをとらすることうつむはかりにて

内教坊知女楽事別当大納言中堪其道之人補之裏書云…（以下略）

はやりかなるこくの物なとをしへてしと

万秋楽に内教坊説といふ事あり然ははやりやかなる曲の物とは五六帖の事

歟孝行説　…（以下略）

この項目の注記内容は『光源氏物語抄』と、東大本ならびに京大本『紫明抄』がほぼ同じで、「おほ殿ゐのかたはら也」と書かれている。一方、三冊本の内容は他の本と違い、破線のひいてある部分が『河海抄』と似たような内容で、傍線を付した最後のところに「水原ニみえたり」とある。注目したいのは、この説を『河海抄』も引用している点である。しかし、『河海抄』には「孝行説」と書かれ、『水原抄』としていない。三冊本によると、この説が『水原抄』から引用したものだということがわかる。残念ながら、三冊本の中で『水原抄』から引いたものとする注記はこの項目のみだが、三冊本には他本にない『水原抄』の内容があることが重要である。

五、『光源氏物語抄』と関わる注釈内容

序章でも述べたように、『光源氏物語抄』は『紫明抄』の著者素寂の注が多く含まれている古注釈で、成立は『紫明抄』に先行するものとされ、それが今日ではほぼ定説になってきている。三冊本と『光源氏物語抄』の一致している内容については第四章で詳細に考察するが、結論から言えば、成立の面では、三冊本の祖本は『光源氏物語抄』より後で、『紫明抄』他本より前の成立であろうと位置づけられた。ここでは、『光源氏物語抄』から『紫明抄』へ至る段階で増やしたり、削ったりしたことがわかる例を三つほどあげることとする。

【資料１１】「若菜下」巻

三冊本『紫明抄』

世の中はいとつねなき物を
恋しなはたか名（ママ）かおしき世中のつねなき物といひはなすとも

『光源氏物語抄』

よの中はいとつねなきものを人きはに思さためてはしたなくついきりなる事なの給そと云事
こひしなはたかなかおしきよの中をつねなき物といひなすとも奥伊
ついきりなるゝとふつきりなる心也　素寂

京大本『紫明抄』

世中はいとつねなき物を
こひしなはたかなかおしき世中のつねなき物といひはなすとも

※東大本『紫明抄』もほぼ同一

「若菜下」巻の「よの中はいとつねなきものを」の本文に『光源氏物語抄』、三冊本、京大本はいずれも「恋しなは」を引用しているが、『光源氏物語抄』だけには引歌の後、

素寂説があげられている。考えられるのは『光源氏物語抄』にはこの素寂説があったにもかかわらず、『紫明抄』になる段階で削除されてしまったという可能性である。

【資料１２】「真木柱」巻

三冊本『紫明抄』

かくるゝまてそかへりみ給

拾北野御詠君かすむ宿のこすゑをゆく〳〵とかへるゝまてもかへりみし哉

『光源氏物語抄』

はかなきこゝちすこすゑをもめとゝめてかくるゝまてそかへりみ給けるト云事

君かすむやとのこすゑをゆく〳〵とかくるゝまてに帰みしかな奥伊

真木柱の上の母は紫の上の姉也ひけくろの大将の御前也

而を■（原カ）氏玉かつらにむことる間真木柱出給父兵部卿宮の許におはしき素寂

京大本『紫明抄』

かくるゝまてそかへりみ給ける　　※東大本『紫明抄』もほぼ同一

君かすむやとのこすゑをゆく〳〵とかくるゝまてもかへり見しはや拾遺北野御詠

「真木柱」巻の引歌の注記として「君かすむ」の歌があげられているが、「真木柱の上の母」についての素寂の説は『光源氏物語抄』だけに見られる。この内容は『光源氏物語抄』の段階ではあったが、『紫明抄』諸本にみえない内容なので、素寂が『紫明抄』を作成する段階で削除したと考えられる。

次に、『紫明抄』諸本のほうが『光源氏物語抄』より長い注記内容をみよう。

【資料１３】「明石」巻

三冊本『紫明抄』

十三日の月はなやかにさしいてたるにあたらよのときこえたり

あたら夜の月と花とをおなしくは心しれらん人にみせはや

『光源氏物語抄』

十二三日の月はなやかにさしいてたるにたゝあたらよのときこえたりと云事

あたらよの月と花とをおなしくはあはれしれらん人にみせはや伊行（心もはれて見るよしもかな奥入）

京大本『紫明抄』

十二三日の月はなやかにさしいてたるにあたらよのときこえたり

あたらよの月と花もをおなしくはあはれしれらん人にみせはや

問云今夜は秋八月也あたらよのといへるに春の哥をひける如何

答云あたらよのといへるかならすしも春季…（以下略）

※東大本『紫明抄』もほぼ同一

この「明石」巻からの項目で、『光源氏物語抄』と三冊本の注釈内容は「あたらよの」の同じ引歌である。『紫明抄』他本には、さらに、この引歌についての問答がある。考えられるのは、『光源氏物語抄』の段階ではこの引歌を『源氏釈』と『奥入』から踏襲しただけであったのに対して、『紫明抄』他本の段階ではこの問答が追加されたということである。そして、三冊本の段階ではおそらく、この問答がまだなかったのだろう。

以上のように、『光源氏物語抄』から三冊本を経て『紫明抄』他本へと至るとみた場合に、素寂説の増減の様相がみてとれるのではないかと思われる。

六、『河海抄』と関わる注釈内容

三冊本『紫明抄』の中には、南北朝期成立の『河海抄』の説と似たような項目が見いだされる。稿者の調査によれば、全一三項目がある。三冊本と『河海抄』との関わりというのは非常に大きな問題と関わる部分なので、今後の課題にするが、ここでは特に注目すべき例を四つあげる。

【資料１４】「葵」巻

三冊本『紫明抄』

秋のあはれまさり行かせの音身にもしみけるなとならはぬ御ひとりねにあかしかね給へる朝ほらけ霧わたれるにきくのけきはめる枝にこきあをにひのかみの文つけて

吹よれは身にもしみける秋かせを色こき物に思ひける哉

※『光源氏物語抄』、京大本『紫明抄』ナシ

※東大本は「若紫」巻から「花散里」巻まで欠落

『河海抄』

風のをと身にもしみけるなと

吹よれは身にもしみける秋風を色なき物とおもひける哉

〈参考―『葵巻古注』〉　※引歌は『源氏物語』本文の行間にある

身にもしみけるかなとならはぬ御ひとりねにあかしかねたまへる

フキクレハミニモシミケル秋風ヲイロナキモノト思ケルカナ

まず【資料１４】は、『光源氏物語抄』や京大本には見出せないものである。東大本系統は「若紫」巻から「花散里」巻まで欠落しているため、確認はできない。引用された引歌は若干異同があるが、三冊本と『河海抄』のいずれも「吹よれは」をあげている。この引歌は三冊本を除き、『源氏釈』や『奥入』など『河海抄』に先行する古注釈にはない。ただし、『葵巻古注』にも、若干異同があるが、似たような引歌が引用されている。先行研究では、このような注記内容が三冊本と『葵巻古注』の親近性があると指摘した理由の一つとされている[13]。しかし、そのようには簡単に言い切れない例もある。

【資料１５】「葵」巻

三冊本『紫明抄』

おととあたらしき年ともいはす昔の事きこえ出給て

今案新き年とはいへとしかすかに。身ふりぬるけふにそ有ける

※『光源氏物語抄』京大本『紫明抄』ナシ

『河海抄』

あたらしき年ともいはすふる物はふりぬる人のなみたなりけり

あたらしき年とはいへとしかすかに我身ふりぬるけふにそ有ける

〈参考―『葵巻古注』〉　※引歌は『源氏物語』本文の行間にある

あたらしきとしともいはすふるものはふりぬる人のなみたなりけり

アタラシキトシトイヘトモカスカノヽワカ身フリヌルモノニソアリケル

【資料１５】の注釈内容も引歌で、『光源氏物語抄』や京大本にはない。三冊本と『河海抄』は同じ歌「新き年とはいへとしかすかにわか身ふりぬるけふにそ有ける」をあげている。重要なのは、三冊本の引歌の上に「今案」があることである。この「今案」は単純に考えると三冊本の編者の案だと思われるが、もし、編者が『紫明抄』の著者、素寂であれば、なぜこの引歌は『光源氏物語抄』や『紫明抄』諸本には見出せないのだろうか。

さらに、もう一つの問題は『源氏物語』の本文にある。三冊本の引用した本文は『河海抄』の本文より少し前のところである。又『葵巻古注』は『河海抄』と同じ本文をもち、その行間に、全く一致しているわけではないが、似たような引歌をあげている。

現時点で、この「今案」の意味は容易に確定しえないのだが、三冊本と『葵巻古注』と『河海抄』とがどのような関係を持っているのかを考える上で重要な箇所だと思う。

もう一つ、「浮舟」巻の例もみておく。この項目も『光源氏物語抄』や『紫明抄』他本にはみえず、三冊本と『河海抄』が似ている引歌をあげている。しかし、『河海抄』の引用する歌は『古今和歌集』の五四六番の歌であるが、三冊本の引歌にみられる異同は、出典が不明である。

【資料１６】「浮舟」巻

三冊本『紫明抄』

あやしかりし夕暮の

いつとても恋しからすはなけれともあやしかりける夕暮の空

※『光源氏物語抄』、東大本、京大本『紫明抄』ナシ

『河海抄』

あやしかりし夕くれの

いつとても恋しからすはあらねとも秋の夕はあやしかりけり

つづいて、【資料１７】であげる三冊本と『河海抄』の例は、今までの例と違い、注記内容の表し方がかなり異なっている。

【資料１７】「真木柱」巻

三冊本『紫明抄』

かほにみへつゝなとの給　夕されは野へに鳴てふかほ鳥の　かほにみえつゝ忘られなくに

おもはすにゐてのなかみちへたつともいはてそ思ふ山吹の花

いはぬまをつゝみしほとに口なしの色にやみえし山咲の花

『光源氏物語抄』

いはてそこふるやまふきのはなかほにみえつゝなとの給ト云事

六帖奥いはぬまをつゝみし程にくちなしの色にやみえし山吹の花定家

京大本『紫明抄』

かほに見えつゝなとの給

いはぬまをつゝみしほとにくちなしのいろにや見えし山ふきの花

※東大本『紫明抄』もほぼ同一

『河海抄』

思はすにゐての中道へたつともいはてそこふる山吹の花源氏

山吹をやとにうへてはみることに思はやます恋こそまされ万十

あちきなく思ひこそやれつれ〳〵と独やゐての山吹の花（以下略）

かほにみえつゝなとの給も

いはぬまをつゝみしほとにくちなしの色にやみえし山吹の花（紫明抄）（万葉六帖）

水原抄云非指証哥心歟目のまへの山吹（の）花かのかほにみえて思よそへられたる心歟　案之人丸集（云）

夕されは野へに鳴てふかほとりのかほにみえつゝわすられなくに

『光源氏物語抄』、三冊本、『紫明抄』他本はいずれも同じ引歌「いはぬまを」をあげている。しかし、三冊本には『源氏物語』本文と引歌の行間に「夕されは」と「おもはすに」の二首の歌が、小さい文字で書かれている。「おもはすに」の歌は引歌ではなく、この巻にある光源氏の詠んだ歌である。『河海抄』では、「おもはすに」の歌はこの項目より一つ前の項目で、『紫明抄』他本には「おもはすに」の項目はない。さらに、【資料１７】の『河海抄』によると、『紫明抄』からは「いはぬまを」の引歌が引用され、そして、『水原抄』の説があり、次に「案之人丸集」がある。最後に三冊本と同じ「夕されは」の引歌が引用されている。

『河海抄』の人丸集の前の「案之」が誰の説なのかについて考えてみると、『河海抄』の中に見える『水原抄』の説は「案之」や「今案」が添えられた項目が多くみられるので、これらの注釈態度によって、稿者はこの「案之」は四辻善成の説だと考える。三冊本におけるこの項目の引歌は【資料１４】から【資料１６】と違って、傍記、あるいは割り注形式で書かれている点が重要である。特に「夕されは」の割り注は後に添えられた可能性が高い。さらに『河海抄』の「案之」から判断すると、この引歌は四辻善成の説と考えられることから、【資料１６】までの例と違い、この引歌は単なる偶然の一致などではなく、『河海抄』から引用された可能性が高いのである。

このように六節では、三冊本と『河海抄』の一致がみとめられる注釈内容を見てきた。成立年代が八〇年も離れている『河海抄』の説が三冊本『紫明抄』に入り込んでいる理由は二つ考えられる。一つ目は、『河海抄』と三冊本の祖本がたまたま同じ出典から同じ説を引用したというもので、二つ目は、後の時代の人が三冊本に『河海抄』の説を書き入れたということである。この件についての詳細な検討は今後の課題とするが、【資料１７】のような例があることから、ここでは二つ目の可能性が高いとみておく。

七、『花鳥余情』と関わる注釈内容

三冊本の中には、室町期成立の『花鳥余情』の説さえもいくつかみられる。ただし、注意したいのは、『花鳥余情』の説は、そのほとんどが小さい文字で、割り注や頭注として書かれるという表記の特徴を持っている点である。一番目立つのは「賢木」巻から「薄雲」巻までで（ただし「花散里」巻を除く）、巻の名前の下に割り注で、その巻名の由来と光源氏の年齢について、簡潔に書かれている点である。【資料１８】と【資料１９】は「明石」巻と「薄雲」巻のその例である。

【資料１８】「明石」巻

三冊本『紫明抄』

以歌並詞為巻名源氏君廿六才ノ三月十三日明石浦侍給廿七才ノ七月迄給

『花鳥余情』

以歌並詞為巻名源氏廿六歳の三月十三日にすまよりあかしに浦つたひし給ふ廿七歳の七月帰京の事まて二年の事見えたり

【資料１９】「薄雲」巻

三冊本『紫明抄』

以歌為巻名又詞に雲のうすくわたるかにひ色なるをとあり源しの君卅歳の冬より三十一の秋までの事也

『花鳥余情』

以歌為巻名又詞云雲のうすくわたれるかにひ色なるをとありこと葉をもとりて名とせりともいふへきにや源氏卅歳冬より卅一歳の秋までの事みえたり

三冊本では、巻名の下以外にも『花鳥余情』の説の割り注や頭注がいくつか見られる。基本的に『花鳥余情』からの注釈内容を小さい文字で書いているということになるのだが、

「東屋」巻の一項目だけは『花鳥余情』の説が普通の大きさで書かれている。

【資料２０】「東屋」巻

三冊本『紫明抄』

あたこのひしりたに時にしたかひ出すやはありける

柿本紀僧正あたこ高雄山に入十二年不出時にさかの帝御時内供奉十禅師に祈らる

と云々

※東大本『紫明抄』京大本『紫明抄』ナシ

『光源氏物語抄』

あたこのひしりたに時にしたかひてはいてすやはありけるト云事西円

（※ここに一行分の空白アリ）

『花鳥余情』

あたこのひしりたに時にしたかひてはいてすやはありける

柿下の紀僧正真済あたこ山たかおのみねに入て十二年山を出すそのゝちさかの帝その苦行を聞給て内供奉十禅師に補せらるその事をいへるにや

三冊本『紫明抄』と『花鳥余情』説とが、およそ一致している。このように『花鳥余情』とほぼ一致する注記のうち、ここだけが割り注形式ではなく、他の項目と同じ大きさで書かれている。注目すべきは、『光源氏物語抄』の注記部分が空白となっている点であろう。考えられるのは、三冊本の祖本においてもこの項目の注記の部分が『光源氏物語抄』と同じく空白になっており、後代の人がここに『花鳥余情』の説を書き入れたということではないかと思う。

八、おわりに

以上のように、三冊本『紫明抄』は分量が少ないにもかかわらず、独自の注釈内容が多くあるので、今まで以上に注目すべきだと思われる。また、他の『紫明抄』諸本と比べてみると、引用された『源氏物語』の本文の相違、それに編者の作成途上のコメントや、親行本および『水原抄』に関わる異本注記の存在、というような特徴がきわだってみえる。

そうした三冊本の独自性というのは、他の『源氏物語』古注釈との関わりについて詳細に検討することによってより正確におさえられるであろう。本章では、『水原抄』『光源氏物語抄』といった、『紫明抄』に先立つ注釈との関係、さらに後に成立する『河海抄』『花鳥余情』との関係をとらえてみた。

三冊本のすべての注記項目の中で『水原抄』説をあげる項目はわずか一つのみであり、三冊本と深い関係があるとは言いにくいが、当該本に関する重要な情報の一つである。さらに、『光源氏物語抄』と『紫明抄』他本との間に三冊本の祖本の成立時期を想定することにより、素寂による注釈の増減の過程が見えやすくなると考えられた。

一方、三冊本は『河海抄』『花鳥余情』のような後代の代表的注釈書の説と一致する注釈内容をも有している。三冊本と『河海抄』との間に一致がみられる点については、まだ検討されるべき余地を多く残しており、簡単に結論づけることができないが、『花鳥余情』の場合は後に書き入れられたとみるのが妥当であろう。

内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』は、同じ『紫明抄』とはいっても他本とはまるで異なる独自の道をたどってきたことが刻印されている注釈書である。当該本に関しての問題はまだいくつかあるのだが、ひとまず本章では、こうしたユニークな注釈書の実態について、詳細な調査・検討にもとづきまとめた次第である。

【注】

（1）田坂憲二「内閣文庫蔵三冊本（内丙本）『紫明抄』について」（『源氏物語享受史論考』、風間書房、二〇〇九年、初出一九九四年）は、『紫明抄』の伝本については、

今日では、京都大学本系と内閣文庫本（十冊本）系に二大別されるのが一般的である」とした上で、東大本、内閣文庫十冊本などの系統を「内閣文庫本系統」と呼ぶが、岩坪健「『紫明抄』の成立過程―『異本紫明抄』との関係―」（『源氏物語の享受―注釈・梗概・絵画・華道』和泉書院、二〇一三年、初出一九九九年）では、同じ系統を「東大本系統」と呼んでいる。

（2）田坂憲二編『紫明抄』（おうふう、二〇一四年）の「解題」、その第三章「『紫明抄』の伝本について」の第一節「『紫明抄』の伝本系統」による。

（3）田坂憲二「内閣文庫蔵三冊本（内丙本）『紫明抄』追考―手習巻を中心に―」（日向一雅編『源氏物語注釈史の世界』青簡舎、二〇一四年）の「おわりに」では「内丙本（稿者注：三冊本『紫明抄』のこと）は省略本でありながらも、他の『紫明抄』諸本のどの本も持たない項目を立項することがある」と述べる。

（4）日本古典文学大辞典編集委員会編『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八三年）「紫明抄」の項（山本利達執筆）は、「三冊本は内閣文庫本のみで、同じ本文系統の略本である」とする。

（5）田坂憲二「『水原抄』から『紫明抄』へ」（『源氏物語享受史論考』風間書房、二〇〇九年、初出一九九四年）

（6）堤康夫氏の論（『源氏物語注釈史の基礎的研究』おうふう、一九九四年）では、『異本紫明抄』（稿者注：『光源氏物語抄』）は『紫明抄』の一異本ではありえず、むしろ『紫明抄』の原型・母胎となった注釈書であると考えられる」という説を提示しており、これがほぼ定説となっている。

（7）田坂憲二氏、注（1）論文。

（8）田坂憲二氏、注（1）論文によると、三冊本『紫明抄』で他の『紫明抄』諸本より項目数が多い巻は「紅葉賀」巻、「花宴」巻、「葵」巻、「賢木」巻である。また、三冊本で他の『紫明抄』諸本と同じ項目数を持つ巻は「末摘花」巻、「絵合」巻、「篝火」巻、「行幸」巻、「藤袴」巻、「真木柱」巻、「藤裏葉」巻、「柏木」巻、「鈴虫」巻である。

（9）岩坪健氏、注（1）論文。

（１０）田坂憲二氏、注（３）論文に「内丙本が逸文と思われる文章を引用していることも注目される」とある。

（１１）田坂憲二氏、注（１）論文。

（１２）田坂憲二氏、注（１）論文に「書写年代は近世初期頃か」とある。稿者も三冊本の実物を調査し、この見解に賛同する。

（１３）田坂憲二氏、注（５）論文。

第四章　内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の位置

――『光源氏物語抄』および『紫明抄』諸本との関係を中心に――

一、はじめに

第三章で考察したように、内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』は特徴が多くあり、鎌倉時代の『源氏物語』古注釈研究にとって大変重要な資料である。この三冊本『紫明抄』を位置づけるためには、『紫明抄』に先行する『光源氏物語抄』、そして『紫明抄』の完本である京大本の内容と比較してみなければならない。従って、本章では、三冊本と『光源氏物語抄』および京大本『紫明抄』との内容の比較から、それぞれの関係を検討した上で、三冊本の位置を考察する。

なお、本章で取り上げる内閣文庫蔵三冊本との無用の混乱を避けるため、第三章と同様に、内閣文庫十冊本系統の代表としては、本文の一致度が高い東大本『紫明抄』（以下「東大本」と呼ぶ）をあげることとする。

二、三冊本『紫明抄』と『光源氏物語抄』・京大本『紫明抄』との関係

まず、三冊本の内容が、どのように『光源氏物語抄』および京大本『紫明抄』の内容と一致しているのかを確認していく。

まず項目数であるが、完本である京大本は全二五二四項目あるのに対し、三冊本の項目数は全一九一一項目である。三冊本の分量自体は京大本の半分にも及ばないが、項目数は六〇〇項目余の差異である。三冊本の内容を、『光源氏物語抄』および京大本『紫明抄』との関係で整理すると、A、B、C、Dの四つに分けられる（図2参照）。

A、『光源氏物語抄』、京大本、三冊本がほぼ一致している内容。このグループが一番多く、全一五七七項目もあり、全体の八割を超える。

B、『光源氏物語抄』と三冊本だけが一致している内容。全四項目ある。[1] このグループの項目数は非常に少ないが、他の『紫明抄』諸本には全くみえず、『光源氏物語抄』に一致するため、三冊本の位置づけにあたっては大変重要である。Bについては本章の三節で詳細に考察する。

C、京大本と三冊本がほぼ一致し、『光源氏物語抄』には見られない内容。全二六〇項目ある。このグループは三冊本全体の中で約一割強である。

D、三冊本独自の項目。全六九項目もある。このDについては、さらに次のように整理できる。

①『源氏物語』の本文だけがあり、注記がない　三三項目
②『水原抄』からの引用と示されている　一項目
③『河海抄』の注記内容とほぼ一致する　一三項目
④特定し得ない項目　二二項目

右のようなDの六九項目のうち、①の三三項目は『源氏物語』本文のみがあげられ、注記内容がないものである。また④の、特定し得ないもの、全二二項目というのは、三冊本

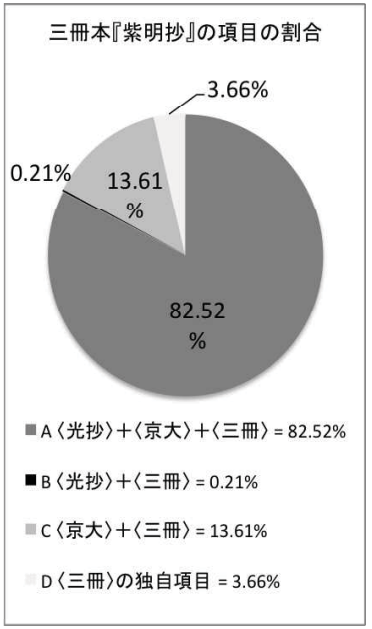

図２：三冊本『紫明抄』の項目の割合

の独自の内容で、『花鳥余情』の成立のころまでの主要古注釈書類にみえないものである。

三冊本には興味深い点が多くあるのだが、実は重要なのは独自の注記内容だけではない。他本と同じ注釈内容であっても、細かい点に異同があったり、さらに他の『紫明抄』諸本より詳しい内容が含まれていたりするところも検討すべき点である。

第三章で確認したごとく、三冊本に関するすべての先行研究は、この本が抄出本または略本と推定してきた。その大きな理由は三冊本の分量が東大本や京大本より大幅に少ないからであろう。しかし、先述のとおり、三冊本でも巻によっては『紫明抄』諸本と項目数が変わらなかったり、かえって多かったりする。三冊本は単なる抄出本、または略本と言いうるのだろうか。次節でその鍵となる三冊本と『光源氏物語抄』との関係を具体的に検討したい。

三、三冊本『紫明抄』と『光源氏物語抄』との比較

序章で述べたように、長らく『異本紫明抄』とも呼称されてきた『光源氏物語抄』は、『紫明抄』に先行する『源氏物語』古注釈であり、素寂の説が多く含まれている。『光源氏物語抄』第一冊目奥書に「「建長四年十月廿八日見合伊行定家等抄物并談儀聞書等書写了」とあることから、第一次集成は建長四年（一二五二年）ごろであり、三冊本『紫明抄』附載の書状によって知られる永仁二年（一二九四年）の『紫明抄』の成立より四〇年ほどさかのぼる。

この節においては、三冊本と『光源氏物語抄』にのみ見える注（後掲の【資料1】【資料5】【資料7】）、ならびに『紫明抄』諸本にも同じ項目があるものの三冊本とは注記内容に相違があり、むしろ『光源氏物語抄』の注記内容に一致する注（後掲の【資料2】【資料3】【資料4】【資料6】）をとりあげる。

【資料1】漢字・漢語をあげる例

①「桐壺」巻

三冊本『紫明抄』

いとあつしう 𠮟 劣 廷 霊運

『光源氏物語抄』

いと（ト）云事　最（サイ）　字訓也　宗円

あつしうなりゆき物心ほそき程にさとかちなるを

劣（アツシ）也　あやうき心也　伊（日本記）弉諾尊神功既畢

霊運（アツシレタマウ）当遷（教隆説）　あつしう　劣也　素寂説

東大本『紫明抄』

いとあつしう　厄也　劣也

※京大本『紫明抄』もほぼ同一

②「桐壺」巻

三冊本『紫明抄』

いたちおほしいたつき　居起也　勞也　煩悩也

『光源氏物語抄』

ゐたちおほしいたつきと云事

人をいたはりつきてあらき風にもあてしとするを云

居起也　勞儀或。　所々　饗　内蔵寮

穀倉院殿東也　御椅子　冠者御座　煩悩（イタツキ）也

東大本『紫明抄』

ゐたちおほしいたへき　居起也　勞也

※京大本『紫明抄』もほぼ同一

③「若紫」巻

三冊本『紫明抄』

ゆくるもなく　不意也

※京大本『紫明抄』ナシ。

※東大本『紫明抄』は「若紫」巻から「花散里」巻まで欠落

『光源氏物語抄』

ゆくりもなくと云事　行ゑなくと云心也　不意（ユクリナク）　日本紀

まず、①は「桐壺」巻の冒頭近くに関する注記で、「いと」にあたる漢字「最」、と「あつしう」にあたる漢語「霊運」は、『光源氏物語抄』と三冊本に共通し、他の『紫明抄』諸本に見られない。つづく②と③も同様の例である。特に注目すべきは①で、『光源氏物語抄』と三冊本に共通しているのが「宗円」「教隆」の注であり、素寂の説ではないことである。

【資料２】「帚木」巻

〈尾州家本『源氏物語』の当該箇所〉

三史五經のみち〳〵しきかたをあきらかにさとりたらんこそ

三冊本『紫明抄』

三史ハ　史記　漢書　後漢書也

五経ハ　毛詩　左傳　周易　尚書　礼記也

三道ハ　紀傳　明経　明法也

『光源氏物語抄』

三史五経三道みち〳〵しきかたをあきらかにさとりあかさんこそト云事

三史五経三道事

史記　漢書　後漢書　是ヲ三史ト云

毛詩　礼記　左傳　周易　尚書　是ヲ五経ト云

紀傳　明経　明法是ヲ三道ト云　奥伊行

或人云三道ト云ハ笇道（笇本ノマヽ）紫　抑此物語者さんしこきやう三道と云に付て勘之歟如當本者三道無之仍三道了見無由歟三道とかける本多也不尽

三史五経三道にてあるへくは古人明法博士也又は管道（笇歟）博士なりとも申但天文暦蓋此三博士歟其故ハ賀茂保憲三道博士也天下第一才人ナルカ見晴明云吾子息之中には眼カシコ

キモノナシ汝ハ眼賢シトテ天文之一道ヲハ傳授シケルトナン保保憲ハ保胤兄也保憲ヲ時人三道博士云々

東大本『紫明抄』

三史　史記　漢書　後漢書

五經　毛詩　礼記　左傳　周易　尚書

※京大本『紫明抄』もほぼ同一

【資料２】は「帚木」巻の項目である。ここでは、三冊本の本文ならびに注記内容が『紫明抄』諸本と違っており、『紫明抄』に先行する『源氏釈』、『奥入』、『光源氏物語抄』と一致する点がある。具体的に説明すると、まず、尾州家本『源氏物語』の本文をまず掲出してみたが、『光源氏物語抄』の本文は「三史五経三道みちみちしきかたを」云々というように、「三道」という言葉が入る。『源氏釈』も「三史五経三道」となっている(2)。『奥入』は『源氏物語』の本文がないが、注釈には「三道　紀傳　明経　明法」がある。それに対して『紫明抄』諸本の所引本文には「三道」がない。ところが、三冊本の場合、「三道ハ紀傳　明経　明法也」と「三道」を本文として注を付す。他の『紫明抄』とは異なる注を付していることが知られよう。

【資料３】「夕霧」巻

三冊本『紫明抄』

無言　大（ママ）子とか小法師はらのかなしき物かたりにするむかしのたとひのやうに

波羅奈王に太子其名魄客端正生而十三年不言人不聞聲諸臣波羅門道士等誹請（ママ）地下作城欲埋之時大臣　状（ママ）其車前重悲此事太子我時不言生而欲埋将言怖入獄自全身不言欲救魂鬼苦謗我不言有皆生聾已于時國王夫人行退太子云云曰我者為國王以正道雖治國有所過墮地獄六万餘歳苦難忍怖地獄故巻舌不言遂請出家父母聞之許已入深山求道命終生都率天太子者釈迦如来

『光源氏物語抄』

無言太子とかこほうしはらのかなしき物語にする昔のたとひのやうにト云事

波羅奈王ノ之太子其ノ名休魄容端正生レテ而十三年不レ言人不レ聞レ聾ヲ諸臣婆羅門道士卜誹謗地下ニ作レ城ヲ欲ス埋之ヲ時大臣伏其ノ車ノ前ニ重テ悲ニ此事ヲ太子云ク我レ将ニ不レ言生而欲埋マン将ニ言イハントスレハヲソル怖ニ入ンコトヲ地獄ニ自ラ全身ヲ不レ言モノイハス欲ス救スクフテ魂ヲ鬼脱ニ苦ヲ謗我カ不レ言ヲ者皆ナ欲生ニ聾盲ニ于時國王者（ママ）人行テ迎太子ヲ々々曰我昔先身為國王ニ以正道ヲ雖レモ治國ヲ有所ロ過アヤマツテオチテ堕地獄ニ六万余歳苦難レ忍ヒ我レ怖ニ地獄ヲ故ニ巻レ舌ヲ不レ言遂請出家ヲ父母聞レ之許レ之ヲ入ニ深山ニ求レ道ヲ命終テ生ニ兜率天太子釈迦如来也　奥定家尺

東大本『紫明抄』

無言太子とかこほうし（小法師原）はらのかなしきものかたりにするむかしのたとひのやうに

波羅奈王太子其名伏魄、客端正生而十三年不言、諸臣謗、地下候（作イ）城、欲理（埋イ）之時、太　子云、言當罪、不言當咎、今尺迦如来也

※京大本『紫明抄』もほぼ同一

『光源氏物語抄』、三冊本、京大本、東大本のこの項目は、いずれも同じ無言太子のことであるものの、『光源氏物語抄』と三冊本の注記内容はほぼ同じで、東大本や京大本の内容はかなり短くなっている。この例からは、三冊本と『光源氏物語抄』の近さを確認できるだけではなく、三冊本が他の『紫明抄』諸本からの抄出ではないということも明らかになるだろう。(3)

【資料４】「総角」巻

〈尾州家本『源氏物語』の当該箇所〉

むすひあけたるたゝりのすたれのつま木丁のほころひよりすきて見えけれはその事とこころえてわかなみたをはたまにぬかなんとうちすむし給へるいせのこもかうこそはありけめとおかしうきこゆ

三冊本『紫明抄』

伊勢家集云七条后崩御の時つねになやましくせさせ給けるをつゐに六月よかくれ給にけるあさましくいとしくかなしくてつかうまつりし人さなからみなよるひるなきかなしひこひたてまつるにのちの御わさはかりにやう〳〵なりぬ雨のふるにやうしといひし人しもきなむこもりゐたりけるうへの人あつまりて御わさのくみなしけるにしもなる人いまよりはてたまうつ也たゝいまなにわさをかし給こゝには雨をなむみ出してなかめ侍といひあけたりけれはうへのをもとたちの返しには つ（ママ） とはよりはてゝいまはねをなむよりあはせてなき侍といひをこせたれはしもなる人伊勢也

『光源氏物語抄』

伊勢の子はなにの子と云習なり　素寂

つねになやましくせさせ給ひけるをつゐに六月かくれ給にけるあさましくいみしくかなしくてつかうまつりし人さなからあつまりて夜るひるなきかなしひ恋たてまつるに後の御わさのおりにやう〳〵なりぬあめのふる日こゝろうしといひし人しもなんこもりゐたりけるうへの人あつまりて御わさのくみをなむしけるしもなる人いとはよりはて給へるなり只今何わさをかし給こゝにはあめをなんみいたしてなかめ侍るといひあけたりけれはうへのをもとたちの返しにはいとはよりはてゝ今はねなんよりあはせてなき侍るといひをこせたれはしもなる人

伊勢集より合てなくなる聲をいとにして我涙をは玉にぬかなむ難義奥

東大本『紫明抄』

伊勢家集云、七条后崩御時、つねになやましくせさせ給けるを、つゐに六月にかくれ給にける、あさましくいみしくかなしくて、つかうまつりし人さなからあつまりて、よるひるなきかなしひこひたてまつるに、のちの御わさのおりにやう〳〵なりぬ、あめのふる日、心うしといひし人しもきなんこもりゐたりける、人あつまりて、御わさのくみをなんしける、しもなる人、いまはよりはて給うつなり、たゝいまなにわさをかし給ふ、こゝにはいとはよりはてゝ、いまはねをなんよりあはせてなき侍、といひ

をこせたれは、しもなる人はいせ也

※京大本『紫明抄』もほぼ同一

【資料４】は「総角」巻からで、ここに掲出される『源氏物語』本文は、「むすひあけたるたたりの」云々の長い引用の最後に、「いせのこもかくこそはありけめとおかしうきこゆ」とある。注記内容は『伊勢集』からの引用だが、その『伊勢集』本文に興味深い異同が見られる。

三冊本の注記で枠囲みにした部分が、東大本、京大本にはなく、「ここにはいとはよりはてて」となっており、「には」が続くことによる目移りで一行落としたと考えられる。この点からみても、三冊本が現存している『紫明抄』諸本のいずれかを転写したものではないことは明らかであり、さらに踏み込んでいえば、三冊本が東大本や京大本の系統からの抄出本ではない可能性が高いのではないか。(4)

【資料５】「蜻蛉」巻

三冊本『紫明抄』

こけのおましにて　　苔御座也

『光源氏物語抄』

いとしけき木のしたにこけををましにてと云事

こけのむしろなり　同　　（稿者注：前の項目は素寂の説）

東大本『紫明抄』

いとしけき木のしたにこけをおましにて

（稿者注：本文だけがあげられて注釈内容がない）

※京大本『紫明抄』もほぼ同一

【資料５】も、三冊本と『光源氏物語抄』とが一致し、他の『紫明抄』諸本とは異なっ

ている。『光源氏物語抄』では「こけのむしろなり」と注がある。三冊本は「苔御座也」と表記は異なるが、『光源氏物語抄』と一致するとみてよかろう。一方の東大本と京大本は本文だけの空項目である。

【資料6】「宿木」巻

〈尾州家本『源氏物語』の当該箇所〉

人めしてたゝいま殿上にはたれ〳〵かとゝはせ給になかつかさのみこかむつけのみこ中納言源あそんなとさふらふとそうす

三冊本『紫明抄』

親王（某官ノミコ）　無官（其名ハミコ）　大臣（おほいまうち君左のまうち君右のまうちきみ）

大納言以上（某官姓朝臣有奥官人其官姓朝臣四位参議名朝臣四位同五位ハ名）殿上六位ハ地下 六位加姓也

太上天皇…（下略）

『光源氏物語抄』

□（親カ）王をはその官の御子無官をはその名の御子

大臣をはおほい（おほ奥き奥）まうちきみひたりのおほひ

まうち君右のおほいまうち君大納言已下三位

以下（ママ）はその官（難）姓朝臣（而有兼奥）官（難奥）ある人ハその

兼奥左衛門督　官（性ママ）　難官字姓字也　朝臣（ヲ申奥）四位参議ハ名朝臣（四位同上三位は名）

自余の四位かみに同五位ハ名（殿上ハ同　五位奥）殿上の六位同五位

（難無此字）地下の六位（ママ）ハ加姓ヲ　太上天皇…（下略）

東大本『紫明抄』

於御前、奏人々名事

親王、其官のみこ、無官、其名のみこ、

大臣　左のまうちきみ、右のまうちきみ、おほいまうちきみ、大納言以上、其官姓朝臣、有兼官人其官姓朝臣、四位参議は名朝臣、四位同上、五位は名、太上天皇…（下略）

※京大本『紫明抄』もほぼ同一

【資料６】は、今上帝が「たゝいま殿上にはたれたれか」と尋ねたのに対して、「中務のみこ上野のみこ中納言源朝臣」という返事がある場面である。注記内容は宮廷の貴族達の呼び方の説明である。『光源氏物語抄』の注記の後半には、枠で囲んだごとく、「殿上の六位同五位地下の六位は加姓」とあり、太上天皇についての内容が続く。三冊本もほぼ同じだが、東大本と京大本は「四位同上、五位は名」のあと、すぐに「太上天皇」の説明が続く。つまり、「殿上の六位」云々の部分がない。この注記内容は、「殿上の六位」も含めて、すでに『奥入』にもあるが、東大本や京大本には「殿上の六位」云々が欠けている。この項目でもまた、『光源氏物語抄』と三冊本に共通している内容が、他の『紫明抄』諸本にないのである。

【資料７】「浮舟」巻

三冊本『紫明抄』

ありやなしやときかぬまや見えたてまつらんもはつかし

心ありてとふにはあらす

※東大本『紫明抄』、京大本『紫明抄』ナシ

『光源氏物語抄』

ありやなしやをきかぬまはト云事

拾遺心有てとふにはあらす世中ニありやなしやのきかまほしきそ西円

【資料７】は、「浮舟」巻の引歌に関する注記である。【資料７】の『源氏物語』の本文は「ありやなしやをきかぬまは」とあり、『光源氏物語抄』では西円の説として『拾遺

集』の歌「心有てとふにはあらす世中にありやなしやのきかまほしきそ」をあげている。三冊本には「心ありてとふにはあらす」とあるが、三冊本では歌の二句までを記し、以下を略すことが珍しくない。この引歌も、『光源氏物語抄』と一致し、さらに、素寂の説ではなく「西円」の注であること、そして他の『紫明抄』諸本にはこの引歌の注記がみられないことが注目に値しよう。[5]

四、三冊本『紫明抄』の位置

以上の考察を踏まえた上で、三冊本の位置づけを整理したい。

①本論文第三章の三節のCで三冊本『紫明抄』には散逸した「水原抄」の記載があり、その祖本はかなり古いと推察された。さらに、三冊本の末尾には、素寂の書状が添えられている。この書状だけが『紫明抄』の成立過程を伝えてくれる。つまり、三冊本の祖本は素寂自身の近辺からしか出てこない情報を含む本であるといえ、その素性の良さを示唆しているだろう。さらに、田坂氏の先行研究[6]においても、三冊本に、鎌倉時代成立の『葵巻古注』の独自の内容と一致する部分があることが指摘されていた。

②三冊本には本文だけがあげられて、注記のない空項目がいくつかみられる。さらに、本論文第三章三節のBで指摘したように、注記があっても「未勘」、「可尋」、「他本見可」、「前勘」、「後勘」など、作成途上であることを示すことわり書きが少なからずみられる。これらの点からも、三冊本は素寂の作成中の『紫明抄』と考えるのが妥当ではないだろうか。このような未完成のものをそのまま将軍に献上するとは考えにくい。[7]

③三冊本『紫明抄』には、【資料1】の漢字と漢語、そして【資料5】と【資料7】の注記内容のように、『紫明抄』諸本にみえない注記で、『光源氏物語抄』と一致するものがある。さらに、それらの注記内容が素寂自身の説ではないこと、しかも『光源氏物語抄』はほとんど流布した形跡がみとめられないことから、三冊本では『光源氏物語抄』から引用した説を載せていると考えられる。そうすると、三冊本は『光源氏物語抄』より前の成立[8]だとは考えられない。

④【資料2】【資料3】【資料4】【資料6】など、三冊本、東大本、京大本ともに同じも

のをあげているにもかかわらず、三冊本は『光源氏物語抄』とほぼ一致し、東大本と京大本は非常に短くなったり、欠脱したりしている。よって三冊本は現存している『紫明抄』諸本のいずれかを転写したものではないことが明らかである。

五、終わりに

最後に、三冊本の性格と成立時期についてまとめておく。

三冊本に関するこれまでのすべての先行研究によって、三冊本は、抄出本、または略本だと推定されてきたが、本章で述べてきたように、三冊本『紫明抄』は他の『紫明抄』に先行する注釈、つまり草稿段階のものと見てよいのではないだろうか。そうであるとするならば、『光源氏物語抄』の第一次集成と素寂が将軍久明親王に献上した『紫明抄』の成立の間に、三冊本『紫明抄』の祖本が成立しているという想定が妥当であろう。

【注】

（1）本章で取り上げる資料の中では【資料1】の③、【資料3】、【資料5】、【資料7】が『光源氏物語抄』と三冊本『紫明抄』でしかみられない内容である。他の資料は一部しか一致していないので、その注記内容は『光源氏物語抄』と三冊本だけにみえるといえないのである。

（2）時雨亭文庫本『源氏釈』の本文は「式部丞かすんになりてはかせのむすめにおひて物かたりするにおとこ〳〵しきことはつかひともしけれは三史五経三道みち〳〵のかたをあきらかにさとりあかさんこそとあるは」である。

（3）ちなみに、『奥入』にもこの注釈内容がある。少し異同があるのだが、ほぼ、『光源氏物語抄』と三冊本とほぼ同一である。

（4）なお、厳密に考えれば、京大本・東大本などの上位本文で脱落のなかったものから三冊本（の祖本）が抄出された可能性は否定しきれないだろう。ただし、現存する『紫明抄』諸本でそのように脱落のないものは三冊本以外に確認できないのであり、三冊本が抄出本・略本ではない可能性の方が高いと考える。

（5）『源氏物語』古注釈において、この箇所に対し『拾遺集』の歌を挙げているのは、管見の範囲では、『光源氏物語抄』と三冊本『紫明抄』を除くと、江戸時代の『源氏物語引歌』のみである。この『源氏物語引歌』は、伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）によると、著者未詳で、一巻一冊、承応三年八月以前の成立とされる。ちなみに、『源氏物語引歌』に挙げられている他の引歌の指摘と三冊本を比較したところ、引用された歌や歌の本文についてはほとんど一致しない。したがって、『源氏物語引歌』は三冊本『紫明抄』と影響関係にはない。

（6）田坂憲二「『水原抄』から『紫明抄』へ」（『源氏物語享受史論考』風間書房、二〇〇九年、初出一九九四年）

（7）それゆえ、「献上本は作者自ら抜き書きした三冊本であったかもしれない」という先行論、岩坪健「『紫明抄』の成立過程―『異本紫明抄』との関係―」（『源氏物語の享受―注釈・梗概・絵画・華道』和泉書院、二〇一三年、初出一九九九年）は成り立たないと考える。

（8）田坂憲二「内閣文庫蔵三冊本（内丙本）『紫明抄』について」（『源氏物語享受史論考』、風間書房、二〇〇九年一、初出一九九四年）

第三部　東山御文庫蔵『七毫源氏』の研究

第五章　東山御文庫蔵『七毫源氏』の特徴

一、はじめに

よく知られているように河内本系『源氏物語』古写本は少ない。そのうち、名古屋市蓬左文庫蔵尾州家河内本『源氏物語』や国立歴史民俗博物館蔵高松宮家旧蔵『源氏物語』などは、影印も刊行されており、研究も積み重ねられている。一方、東山御文庫蔵『源氏物語』の中で、南北朝期書写とみなされている、いわゆる『七毫源氏』は、影印が刊行されていないこともあり、名前は知られているが、研究が進んでいるとは言い難い。

『七毫源氏』は七人の伝称筆者の手によることから「七毫」と名付けられてきた[1]。当該本は東山御文庫蔵にて勅封されており、実見できない。従って、現時点では影印から推察するしかないのだが、従来言われている書写年代と伝称筆者に関しては、疑問が存する。

また、『七毫源氏』は、河内本本文の研究のみではなく、余白、特に頭注に注釈が書き込まれているため、『源氏物語』古注釈の研究にとっても、重要な写本である。余白に記される注釈には、現存している古注釈にない独自の注記も多い。にもかかわらず、当該本はあくまでも河内本系統の古写本として認知されてきたため、『七毫源氏』が有している注釈の研究は非常に少ない。本章ではまず、『七毫源氏』がどのような写本であるのかについての、基本情報をまとめる。

二、『七毫源氏』について

まず、池田亀鑑氏による『七毫源氏』の解説は次の通りである[2]。

〔冊数〕四十四帖。桐壺、花宴、朝顔、初音、常夏、藤袴、若菜上、柏木、鈴虫、匂宮の十帖欠。〔体裁〕縦九寸一分、横六寸八分の楮紙袋綴。〔筆者〕後醍醐天皇、二条家為明卿、尊氏将軍、浄弁、慶雲、兼好、頓阿の七人の筆というところから『七毫源氏』の名がある。〔内容〕本文系統は河内本。朱墨の書き入れ、付箋による校合があり、書き入れとしては注の性質を帯びるものが主である。各冊の終りに「教弘」の朱印がある。

池田氏の述べる通り、現存する『七毫源氏』は『源氏物語』五四巻の完本ではない。各冊の終わりに大内教弘の朱印があるというのは誤りで、「教弘」の朱印のない巻もある。当該本にみられる大内教弘の朱印は「教弘」印及び「多々良教弘」印の二種ある。「多々良教弘」印は「横笛」「幻」巻のみで、この二巻には「教弘」印は見られない。一方、「教弘」印も「多々良教弘」印もない巻は「帚木」「若紫」「花散里」「蓬生」「胡蝶」「竹河」「浮舟」「宿木」巻の八帖である。それ以外の三十四帖には「教弘」印がある。大内教弘の朱印が二種類ともない巻については、元々朱印が押されなかった可能性と、落丁した可能性が考えられよう。

図３：「教弘」朱印

図４：
「多々良教弘」朱印

大内家は「西の京と讃えられた山口に本拠を置く大守護大名大内氏」[3]で、そのうち、大内家初の勅撰作者（『新後拾遺和歌集』）である義弘（一三五六年生～一四〇〇年没）を継いだ盛見の活動について、佐々木氏は次のように述べる。

応永一八年（一四一一）に耕雲の古今集講釈の聞書を記し（古今集耕雲聞書）、同二十二年にはその耕雲より『耕雲千首』を贈られている。また同二十六年には家臣の平井相助より、四辻善成の源氏物語講釈の聞書である『ちどり』（千鳥抄）を献じられたことも知られる（ノートルダム清心女子大学蔵本等識語）

ここで重要なのは耕雲との関係である。なぜならば、『七毫源氏』の四四巻のうち、一三巻の巻末に、耕雲本にみられる耕雲の詠んだ和歌が記載される。耕雲の和歌については、五節で述べるが、大内家と耕雲の交友関係が、『七毫源氏』に耕雲の歌が記載される理由に関わるのかもしれない。『七毫源氏』の一三巻の巻末に耕雲の和歌があることから、この本も耕雲本の一種類ではないかとも考えられるが、『七毫源氏』には耕雲の奥書がないことから、さらに調査する必要があろう。

大内家の大内持世を継いだのが『七毫源氏』に朱印が見える教弘である（稿者注：ここで取り上げた大内氏歴代当主は以下の通りである。義弘―盛見―持世―教弘―政弘である）大内教弘の生年は応永二七年（一四二〇年）、没年は寛正六年（一四六五年）であり、『源氏物語』古注釈史にあてはめてみると、『河海抄』の成立（一三六二年）の後、『花鳥余情』の成立（一四七二年）の前を生きた人である。少なくとも、『花鳥余情』の成立の前に、当該本の押印された帖が存在していたのは間違いない。

『七毫源氏』は一巻一冊で、巻頭にその巻の内容を項目にした目録がある。[4] 一面行数は、通常八行であるが、「篝火」巻と「野分」巻（図6、7参照）の二巻のみ九行となっている。当該二巻は「教弘」印があるものの、取り合わせ本である可能性も考えられよう。

図５：『七毫源氏』「須磨」巻

当該本の『源氏物語』本文は一面八行が通常である。　注釈はごく少数の例外を除いて、墨で書かれている。　一方、引歌は朱で書かれる。さらに、作中和歌の

上にその歌を詠んだ登場人物名が記されている。

図６：「篝火」巻の本文（一面九行）

図７：「野分」巻の本文（一面九行）

『七毫源氏』の表紙は後補である。図８「空蝉」巻でみられるように、表紙見返しと、本文部分とではシミや虫損部分が合わないので、表紙が後補であるとわかる。[5] さらに、前表紙見返しには、その巻の筆者を鑑定する極札が貼られる。極札については、六節で考察するが、表紙の新しさからみると、当該本は江戸時代に入ってから、表紙を新しくつけられたかと考えられよう。その際、当該本の全体が調整され、上下も切られ、しかも、当該本が綴じ直された形跡がある。

図９は「行幸」巻の冒頭で、画像の右上に極札がある。さらに、図１０と図１１のように、頭部と下部の注釈が約一文字分程度カットされている箇所も、当該本の全体によくみられる。最後に、図１２と図１３でみられるように、本ののどが非常に狭くなり、読みにくいところもよくみられる。これらのことによって、当該本は新しく綴じ直され、上下が裁たれていることが知られる。

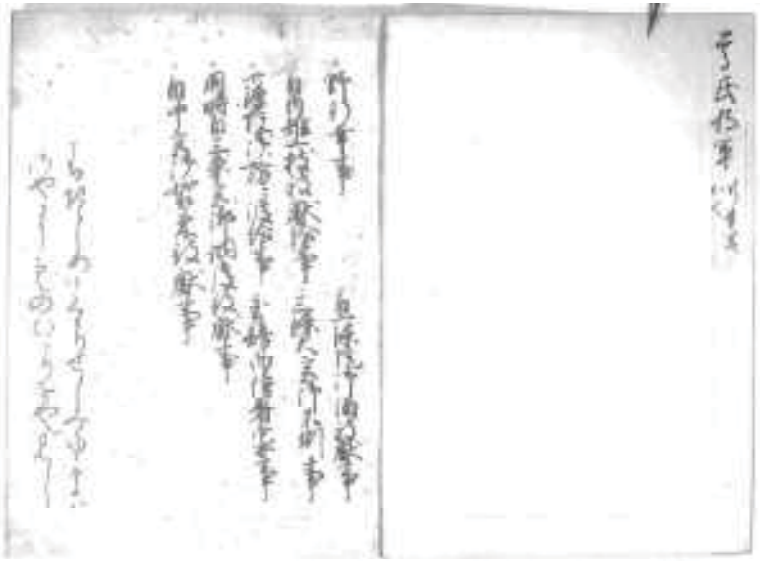

図９：「行幸」巻

右上に極札がある。

図８：「空蝉」巻の末尾、「教弘」朱印。[6] この画像でみられるように、『七毫源氏』の見返しはとても新しく、右側のシミや虫食いと合わない。『七毫源氏』の表紙と見返しは江戸時代に入ってから作られたかと思われる。

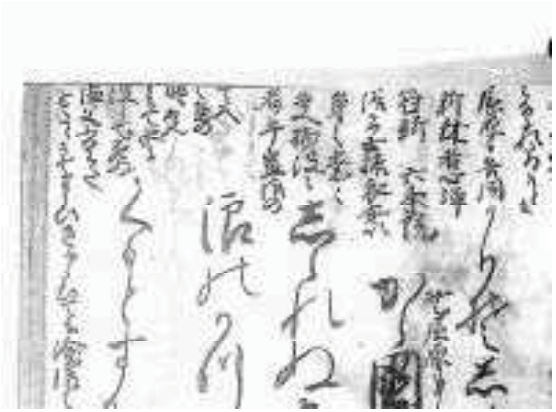

図１０：「須磨」巻

上部が一文字分程度切られている。

図１２：「賢木」巻

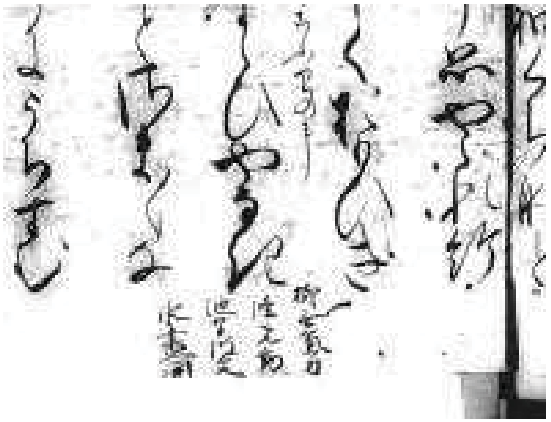

図１１：「賢木」巻

下部が一文字分程度切られている。

図１３　：「若菜下」巻

三、基本の構造

『七毫源氏』の各巻の構造は例外もあるものの、基本的には次に示すように①巻頭目録、②『源氏物語』の本文、そして③大内教弘の朱印の順である。①と②の間にA、本文の前にある巻名に関わる作中和歌があるのは、一四巻である。さらに②と③の間に、B、耕雲の和歌がある巻は一三巻である。

『七毫源氏』各巻の構造

①、巻頭目録

A、本文の前にある作中和歌（全一四巻）＊「帚木」巻と「空蝉」巻だけは巻末に書かれている。

②、『源氏物語』の本文

B、耕雲の和歌（全一三巻）

③、大内教弘の朱印（朱印がない巻は全一〇巻）

稿者の調査によると、現存している四四巻のうち、『七毫源氏』の本来の姿が最も完全に残されているのは「葵」巻ではないかと考えられる。

このうち『七毫源氏』「葵」巻には①～③、そしてAとBが全部揃っているだけではなく、「あふひ」と書かれている内題がある（図１４参照）。このような内題があるのは「葵」巻のみである。内題と、「葵」巻中の「あふひ」という文字列を比較してみると、非常に近い。例えば、図１４の内題を、図１８と図１９の作中にみえる源典侍と源氏の贈答歌にある「あふひ」と比較してみると、筆跡が非常に近いので、この内題は本文を写した人物が書いた可能性が高いと推測する。

図１６：「葵」巻の巻頭目録（続き）と本文の冒頭

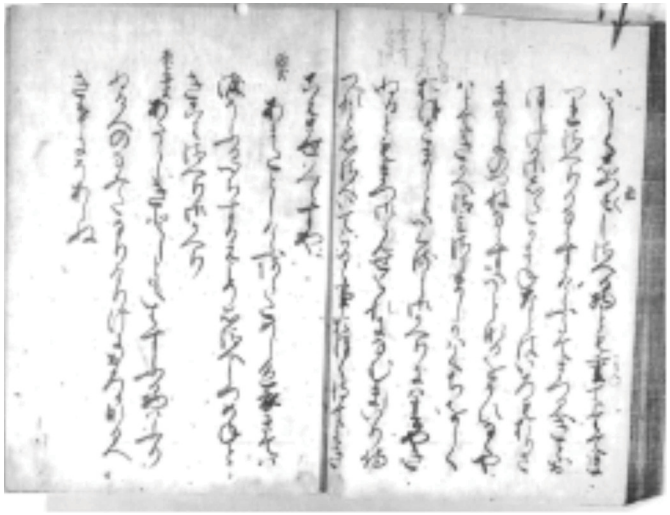

図１７：「葵」巻、本文の末尾

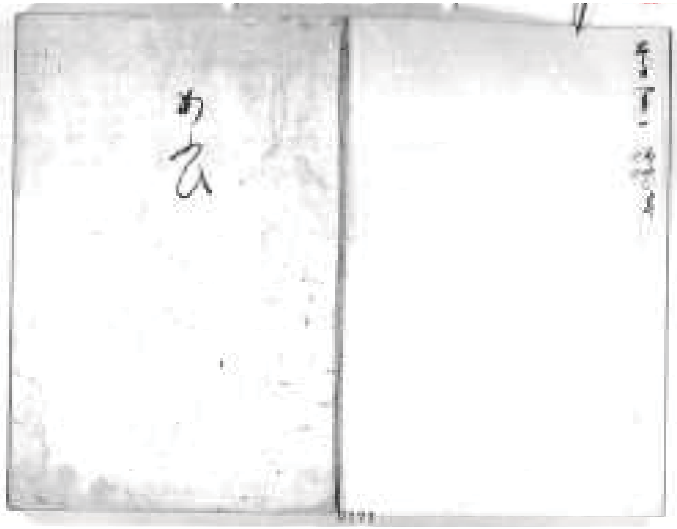

図１４：「葵」巻の巻名（墨付き一丁表）

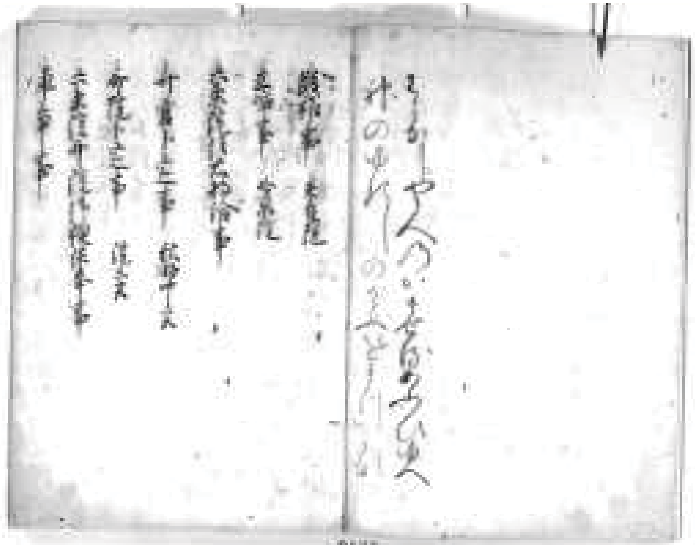

図１５：「葵」巻の作中和歌（右）、巻頭目録（左）

図１８：「葵」巻、源典侍の和歌

図１９：「葵」巻、源氏の和歌

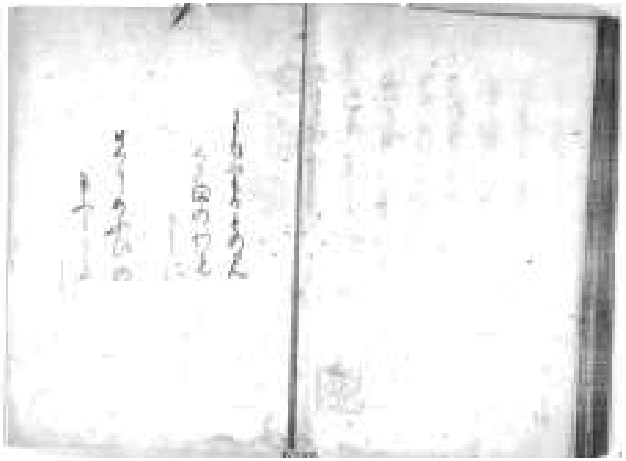

図２０：「葵」巻の末尾、教弘の印と耕雲の和歌

図２１：「蓬生」巻、引歌の注記

四、本文中にみえる注釈

次に、『七毫源氏』の本文中にどのような注釈が引用されているのかを簡単に見ていく。当該本の注釈は、巻頭や巻末を除くと、おおむね次のように記される。

・注釈（引歌を含む）はほとんど行間に書かれることがなく、本文周りの余白、特に上部に書かれることが多い。

・行間には漢字の当て字や本文区分などの短い内容が多い。

・引歌は朱で記され、その大半が上部に書かれている。[7]

・注釈内容の始まりの位置は、長い注記を除くと、できるだけ対応する本文の真上にくるようになっている。

・登場人物を説明する系図もみられる。例えば、作中和歌の上に、その和歌を詠んだ登場人物名があるのだが、登場回数の少ない人物であれば、その人物に関わる系図が書かれている場合もある。

今回の調査は白黒のマイクロフィルムを用いたが、引歌の注記は朱で書かれるため、マイクロフィルムでは薄く、読みにくい。従って、本章では引歌を取り上げないこととし、検討の対象を墨で記された注釈に限定する。

『七毫源氏』は、伝称筆者が七人宛てられることからわかるように、巻によって筆が異なる。『七毫源氏』に書き入れられた注記は、書かれる位置で分類すると、傍注、作中和歌の上部に記された引歌、頭注、それ以外の四種に分けられる。これらの注記は、『源氏物語』本文とは別筆であるが、[8]注記はひとまず一筆であろうと判断される。ちなみに、『七毫源氏』の頭注と朱で書かれる引歌をみると、図２１にみられるように、本文上部の墨で記され、内容がつながっている二つの注釈の間に朱で書かれている引歌の注記がある。しかも、このような例は一カ所だけではない。このような記し方から、『七毫源氏』の引歌は頭注より先に書かれたことが知られる。

『七毫源氏』に引用される注釈は基本的にその出典名が示されていないが、一部、出典名が記される。その出典は、『伊行尺』、『奥入』、『正和集』、『水原抄』、『河海抄』、『百詠注』などである。しかし、実際に注釈内容を比較検討してみると、当該本の全体にわたり、

注釈書名を示さずに先行する注釈書から引用している場合が少なくない。稿者が確認できたのは、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『原中最秘抄』、『仙源抄』である。つまり、『七毫源氏』は南北朝時代あたりまでの主要な『源氏物語』古注釈書の大半を引用していることになる。なお、一番多く引用されるのは『河海抄』である。

一方、『七毫源氏』に書かれる注釈のうち、出典を確認できないものも少なからずある。それらは、現時点では『七毫源氏』のみにみられる独自の注釈といえる。このうち『花鳥余情』以降の注釈内容と一致する注釈は一つもない[9]。注記の書き入れの時期は不明だが、注記に『花鳥余情』以降の注がみられないこと、『正和集』や『水原抄』など、早くに散逸した書物が引用されること、及び出典として確認できる書物の成立年などから、『七毫源氏』書写後、比較的早い段階で注記が書き込まれたと考えられる[10]。

このように、『七毫源氏』においては、引かれている注釈書が豊富で、散逸した『水原抄』の引用もあり、さらに、出典を確認できない独自の内容も多くあるので、それらの中には、これまでと異なる解釈や散逸した古注釈の注記が含まれている可能性もあろう。とりわけ大事なのは、『七毫源氏』が、『源氏物語』の写本への書き込みという形で、多くの注釈書が利用されていた様子を窺わせる資料でもあるという点で、中世、特に室町前期までの『源氏物語』古注釈の展開の実態を解明するための多くの情報を与えてくれる可能性を有する。

五、巻頭と巻末の和歌

本章の三節、「基本の構造」で述べたように、当該本にはA、源氏本文の前に記された作中和歌と、またB、巻末に記された耕雲の和歌がある巻がある。Aの作中和歌は『源氏物語』作中にある和歌で、基本的に物語本文より前に位置しているのだが、（稿者注：△印のある）「帚木」巻と「空蝉」巻のみ、本文の末尾に書かれている。

このAの作中和歌を記している巻と和歌を以下に列挙してみる。

△「帚木」巻　　ははき木のこゝろをしらてそのはらの道にあやなくまよひぬるかな

△「空蝉」巻　　うつせみの身をかへてける木のもとになを人からのなつかしきかな

「夕顔」巻　心あてにそれかとそみるしら露のひかりそへたるゆふかほの花
「葵」巻　はかなしや人のかさせるあふひゆへ神のゆるしのけふをまつかな
「松風」巻　身をかへてひとりかへりしふるさとにきゝしにたる松風そふく
「薄雲」巻　いり日さす峯にたなひくうすくもはものおもふ袖に色やまかへる
「少女」巻　おとめ子も神さひぬらんあまつ袖ふるきよのともよはひへぬれは
「玉鬘」巻　こひわたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちをたつねきぬらん
「篝火」巻　かゝりひにたちそふ恋のけふりこそ世にはたえせぬほのをなりけれ
「行幸」巻　うちきらしあまくもりせしみゆきにはさやかに空のひかりをやみし
「若菜下」巻　もろかつらおち葉をなにひろひけむ名はむつましきかさしなれとも
「横笛」巻　横笛のしらへはことにかわらぬをむなしくなりしねこそつきせね
「御法」巻　たえぬへきみのりなからもたのまるゝよゝにとちきる中のちきりに
「幻」巻　おほ空をかよふまほろし夢にたにみえこぬ玉のゆくりてたつねよ

一方、耕雲本『源氏物語』は室町時代中期に耕雲（花山院長親）が将軍足利義持の命によって作成したものである。耕雲本には、各巻の巻末に耕雲自身が詠んだ和歌を記載するという特徴がある[11]。代表的なものとしては例えば、高松宮本『源氏物語』や伝冷泉為清本などがある。『七毫源氏』にも、B、巻末に記された耕雲の和歌があるので、当該本が耕雲本の一種類ではないかとも考えられるが、耕雲の歌の記載は全巻にあるわけではなく、一三巻にとどまっている。また、耕雲奥書もないので、『七毫源氏』を耕雲本と速断することはできない。

「空蝉」巻　かすならぬ身をうつせみのから衣うすきになしてなにうらみけん
「夕顔」巻　をく露のはかなくきえし夕かほはけにくちおしの花のちきりや
「葵」巻　うかりけるものみくるまのわれからにめくりあふひのけふもうらめし
「玉鬘」巻　夕かほのなこりの露のたまかつらいかなるすちにまたみたれけむ
「蛍」巻　われも又おもひにもえてかこつかなおもかけみせし夜半の蛍を
「篝火」巻　ひかりなきむねのほのをのしられねはもゆとやみけるこそのかゝり火
「野分」巻　のわきせし秋のまかきの花のかほわれもしほれてものおもへとや

「真木柱」巻　まきはしらたちはなれても身にそふは人にゆつらぬなみたなりけり
「横笛」巻　つたへきてしらへかはらぬよこ笛にむかしをしのふねをやそへけん
「紅梅」巻　くれなゐの梅さく窓はこゝろせよひまもとむなりよその春風
「早蕨」巻　おりふしのうつるをみてもかなしきはわすれかたみにつめるさわらひ
「蜻蛉」巻　かけろふのあるかなきかの身をしらは人のうき世をさのみなけかし
「夢浮橋」巻　有無の二にわたるみちたえてみしは昨日の夢のうき橋
一名のりの師
色にそむこゝろのぬしをたつねみよのりのしるへはほかにやはある

このように、『七毫源氏』は耕雲の和歌を記す巻が一三巻あるものの、他の三一巻は耕雲の和歌がない。『七毫源氏』は耕雲本の一種類であるのか否か、あるいは落丁のせいで耕雲の和歌がなくなったのかといった問題は、当該本の詳細な調査を行わなければ明確にしがたい。これは今後の課題である。

六、伝称筆者と鑑定

先述したように、『七毫源氏』は七名の伝称筆者の手によるとして、「七毫源氏」と名付けられた。筆者目録によると、後醍醐天皇、為明卿、尊氏将軍、浄弁、慶雲、兼好法師、頓阿法師の順で書かれている。この七名の伝称筆者は鎌倉末期から南北朝時代までに活躍していた人物である。但し、この七名はあくまでも伝称筆者である。ちなみに、現存している後醍醐天皇、ならびに足利尊氏の筆跡と比較したが、別筆かと判断される。図２２～図２８は『七毫源氏』の各伝称筆者の極札である。

以下、『七毫源氏』の伝称筆者ごとにどの巻を担当しているとされているのかを整理してみる。

・後醍醐天皇の筆とされる巻

夕霧、総角、宿木

図２２：「総角」巻の極札、後醍醐天皇

・二条為明の筆とされる巻

帚木、紅葉賀、少女、手習

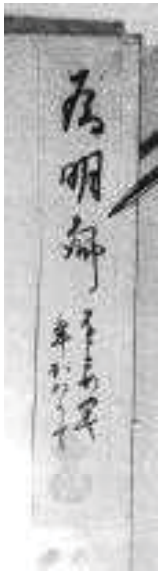

図２３：「少女」巻の極札、為明卿

・足利尊氏の筆とされる巻

若紫、明石、澪標、玉鬘、胡蝶、蛍、篝火、野分、行幸、真木柱、東屋、浮舟

図２４：「胡蝶」巻の極札、尊氏将軍

・浄弁の筆とされる巻

花散里、紅梅、蓬生、橋姫、椎本

図２５：「蓬生」巻の極札、浄弁

・慶雲の筆とされる巻

空蝉、夕顔、葵、梅枝、藤裏葉、横笛、御法、竹河、蜻蛉

図２６：「梅枝」巻の極札、慶雲

・兼好の筆とされる巻

薄雲、若菜下

図２７：「薄雲」巻の極札、兼好法師

・頓阿の筆とされる巻

末摘花、賢木、須磨、関屋、絵合、松風、幻、早蕨、夢浮橋

図２８：「賢木」巻の極札、頓阿法師

佐々木氏[12]は古典籍の鑑定と「極」について、次のように述べている。

鑑定することを「極める」と言い、古筆見たちが鑑定結果を記した紙のことを「極書」あるいは単に「極」と称する。最も単純な形式は、小さな紙に筆者の名のみを記して、鑑定者の印を捺したものである。極書はこの印が保証の役割を果たしているのであり、古筆本家や別家では代々同じ形のものを用い続けている。

さらに、氏の論文では江戸時代の鑑定の極札の一般的な書式をあげている。

極札の一般的な書式

【表】「鑑定した筆者　切の書き出し　　（鑑定印）」

【裏】「　　形態　（割印）　　干支・月（名印）」

『七毫源氏』の極札は各巻の表紙の見返しにある。極札が一般的な書式であれば、札の裏にはより多くの情報があるのではないかと推測する。『七毫源氏』の極札の形式は大文字で鑑定した筆者名があり、その下に小文字で『源氏物語』の巻名とその巻の冒頭の本文が記されている。

このように『七毫源氏』の極札の書式は江戸時代の一般的なものであり、表紙の新しさと綴じ直された形跡がみられる点などから考えると、『七毫源氏』は江戸時代に鑑定されたものと推測される。

江戸時代の一般的な鑑定結果に関しては、佐々木氏[13]が次のように述べる。

古筆見たちは鑑定結果をどうしても出さなければならなかったので、確証がない場合には、書風やその推定年代から適当な人名をひねり出していたものと思われる。勢い無名な人物よりも、有名人の名を付けることになるのは言うまでもない。古筆手鑑はまさに歴史上著明な人物のオンパレードとなるのである。したがって現代の目から見れば、鑑定結果は殆ど信用できないのだが、それでも感心させられるのは、

その本なり切なりが書かれた時代と、推定された筆者が活躍した時代が一致する率がかなり高いところである。

『七毫源氏』の場合も伝称筆者は歴史上重要な人物ばかりであり、この鑑定結果はかなり疑問が残るが、一つ検討すべきこととしては、確実な情報である大内教弘の朱印のことがある。この朱印について、伝称筆者の活躍した年代と合わせて考えるべきである。

『七毫源氏』には巻子の筆者目録も存在する。図２９から図３２まではその巻子本である。この巻子本に書かれる『源氏物語』の巻名は四四巻しかない。従って、筆者目録が記された時期には、すでに現在のように四四巻であったことが知られる。画像から察せられるこの巻物の新しさ、そして、極札の筆跡と一致することからも、『七毫源氏』は江戸時代以降に鑑定されたと推定できる。『七毫源氏』は、江戸時代に表紙が後補され、その際に、綴じ直され、上下が裁たれると共に鑑定された可能性もあるのではないだろうか。

最後に、『七毫源氏』に付された解説の折紙[14]にも言及する。この折紙はいつの時代に書かれたか、画像からは判断できないのだが、虫食いなどが非常に少なく、とてもきれいな状態なので、この折紙自体はそれほど古いものではないと考えられる。この折紙の内容は（図３３参照）まず、『源氏物語』の青表紙本や河内本について説明し、次に「耕雲軒河内本を信す西三条実隆公之明星抄に云耕雲本は河内本にもあらす青表紙にもあらす各別の本也」と、『明星抄』の説を示され、耕雲本は青表紙本でも河内本でもない、別の系統の『源氏物語』本文であることを指摘する。さらに、『七毫源氏』については「耕雲本源氏物語五十四巻之内十巻欠　筆者者一帝六人各筆　七毫源氏と云　朱墨之書入　耕雲軒自筆」とある。最後に、「尹大納言師賢卿孫　南朝臣右大将長親卿　法名明魏法師　耕雲軒と号　仙源抄作者也」とあり、耕雲がどういう人物なのかについての説明がある。内容的にはかなり疑問があるのだが、この折紙において『七毫源氏』が耕雲本であり、朱と墨の書き入れは耕雲自身によるものだと鑑定されている点、興味深い。

七、終わりに

東山御文庫蔵『七毫源氏』は従来、『源氏物語』の古写本として扱われており、影印も刊行されておらず、研究があまり進められてこなかった。しかし、当該本に書き込まれた

多くの注釈の内容をみてみると、現存している古注釈の中に一致しない内容もあり、中世の『源氏物語』古注釈の研究にとって、とても重要である。本章では、『七毫源氏』はどういう写本なのかということを明らかにしてみた。

現存しているのは『源氏物語』五四巻の内、四四巻のみである。当該本の書き入れは基本的に墨で書かれているが、引歌と非常に少数の注釈だけが朱で書かれていることを確認した。

当該本の由来に関する情報を確実に提供してくれるのは、四四巻の内、三四巻の巻末にみられる「教弘」または「多々良教弘」の朱印である。大内教弘の生没年から考えると、『花鳥余情』の成立以前に、この本自体が既に存在していたことがわかる。

『源氏物語』本文の前に作中和歌がみられるのが一四巻、巻末に耕雲の和歌を記しているのが一三巻であることなども確認した。

『七毫源氏』の源氏本文と注釈は別筆かと判断された。さらに、注記に『花鳥余情』以降の注がみられないこと、散逸した『正和集』や『水原抄』などの引用がみられること、及び出典として確認できる書物の成立年などから、『七毫源氏』の書写後、比較的早い段階で注記が書き込まれたものと考えられる。

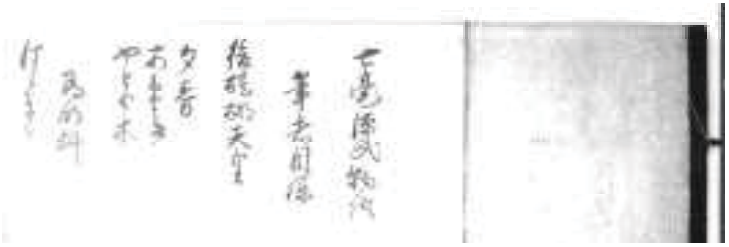

図２９：『七毫源氏』の筆者目録

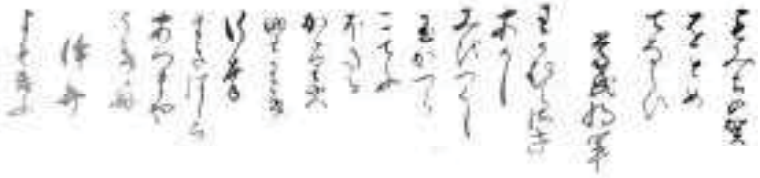

図３０：『七毫源氏』の筆者目録（続き）

図３１：『七毫源氏』の筆者目録（続き）

図３２：『七毫源氏』の筆者目録（続き）

図３３：『七毫源氏』の解説折紙

【注】

（1）例えば、池田亀鑑編『源氏物語事典』下巻（東京堂一九六〇年）においては「東山御文庫蔵七毫源氏」という項目名が立てられている（一四三頁）

（2）池田亀鑑氏、注（1）書。

（3）佐々木孝浩「蔵書家大内政弘をめぐって」（佐藤道生編『名だたる蔵書家、隠れた蔵書家』慶応義塾大学出版会、二〇一〇年）

（4）『七毫源氏』の巻頭目録の研究としては、渋谷栄一「河内本『源氏物語』の巻頭目録と書入注記をめぐって――河内方注釈書の生成と読みの世界について――」（日向一雅編『源氏物語 注釈史の世界』青簡舎、二〇一四年）、および豊島秀範「吉川家本（毛利家伝来『源氏物語』）の目録と巻末注記―七毫源氏との比較」（『源氏物語本文の再検討と新提言』國學院大學文学部日本文学科、二〇〇八年）がある。

（5）毎日新聞社「至宝」委員会事務局編『東山御文庫御物 皇室の至宝』三巻（毎日新聞社、一九九九年）に『七毫源氏』のカラー影印が五頁掲載されているので、確認ができる。

（6）毎日新聞社「至宝」委員会事務局、注（5）書から引用した画像。

（7）毎日新聞社「至宝」委員会事務局、注（5）書のカラー影印で確認した。

（8）注記と本文が別筆であることは、稲賀敬二「東山文庫本『七毫源氏』所載の注釈資料――十四世紀中葉の源氏研究の周辺」（『源氏物語の研究 物語流通機構論』笠間書院一九九三年、初出一九七三年）において、次のように示唆されている。

仙源抄（一三八一成）の頃になると、最秘抄も一つの権威を確立し始めるが、七毫源氏の引用注は、河海抄、正和集の書名を明示してあげるけれども、最秘抄についてはひとこともふれない。この事は本文書写者と伝えられる…〈伝称筆者名、略〉…十三世紀から十四世紀前半の人々が、そのまま注の筆者ではないとしても、七毫源氏の注自体がやはり貞治年間、十四世紀中葉と去ること遠からぬ頃に記されたと見る根拠となしえよう。

（9）『七毫源氏』を蔵していた大内家は一条兼良自らが『花鳥余情』を与えるほど（佐々木孝浩氏、注（3）論文）、兼良と親しい関係を持っていたので、もし、『七毫源氏』に注釈が書き入れられる際に、『花鳥余情』が存在していたならば、『花鳥

余情』の説も取り上げられる可能性が高そうである。

（１０）この点は根拠が異なるものの、結論は稲賀氏、注（８）論文と一致する。

（１１）池田亀鑑編『源氏物語大成』研究・資料篇（中央公論社、一九五六年）の第七章「耕雲本の成立とその特質」では、耕雲本『源氏物語』で本文の末尾に耕雲の和歌が存在しないのは「帚木」巻と「若菜下」巻である。両巻とも耕雲本では耕雲の和歌の代わりに「本云此巻無耕雲之歌」と記されている。

（１２）佐々木孝浩「江戸時代の筆跡鑑定書」（『古文書の諸相』慶應義塾大学文学部、二〇〇八年）

（１３）佐々木孝浩氏、注（１２）論文。

（１４）『七毫源氏』の解説折紙の翻刻は、注（５）の『東山御文庫御物　皇室の至宝』にある。

第六章　東山御文庫蔵『七毫源氏』と鎌倉時代の『源氏物語』古注釈

一、はじめに

鎌倉時代『源氏物語』古注釈の研究には、現存している資料が少ないという大きな難点がある。また、現存する注釈書でも『光源氏物語抄』、『葵巻古注』、伝浄弁筆『源氏物語古注』などは、編者不詳である上に、伝本が一本か二本しかない。このような状況であるがゆえに、今まで充分に検討されてこなかった資料から、新たな情報を見いだすことには意義があろう。

『七毫源氏』には本文周りの余白、特に上部に注釈が多く書かれており、現存古注釈にない独自の内容も多数記されているが、この注釈を最初に論文でとりあげたのは稲賀敬二氏で、「絵合」巻の巻末にみられる「河海抄裏書」の逸文、また『正和集』なる散逸したとおぼしい文献から引用された注記などがとりあげられているが、検討された対象は、さまざまな注釈のうちのわずかな部分に限られている。(1)

『七毫源氏』は、さらなる検討を要する注釈に充ちているのだが、本章において注目しようとしているのは主に二点である。まず、『七毫源氏』の注釈に、他の注釈書にはみられない散逸書『水原抄』の逸文が含まれる点である。さらにもう一つの留意したい点は、他の『源氏物語』古注釈に一切みられない注釈のうち、特に、注釈年代を推定できる人物名が付された注記である。それらの注記は、鎌倉時代から現在に至るまでいわば埋もれてしまっていた注記であると考えられよう。これら二点について検討することで、鎌倉時代の『源氏物語』注釈に新たな光が当てられるのではないかと考えている。

一方、『七毫源氏』の注釈はいつ書き入れられたのか。それは不明だが、影印から推察する限り、注釈の筆跡は四四帖に渡っておそらく同筆である。注記内容に関しては、稿者が『七毫源氏』の注釈を一通り検討したところ、未だに『花鳥余情』の説は一つも見出せていないのだが、『七毫源氏』を蔵していた大内家は一条兼良自らが『花鳥余情』を与えるほど、[2] 兼良と親しい関係を持っていたので、もし、『七毫源氏』に注釈が書き入れられる際に、『花鳥余情』が存在していたならば、『花鳥余情』の説も取り上げられる可能性が高そうである。このような事情と大内教弘の生没年とを勘案すると、『七毫源氏』の注釈は『七毫源氏』が書写された後、比較的間もない時期、おそらくは教弘の生きていた時代かその没年から遠からぬ時期に書き入れられた可能性が高いと考えられよう。

以下、二節ではまず『七毫源氏』の注釈のうち、出典名を明記しているものを確認し、続く三節では、注釈書名が示されないものの現存する注釈書と内容が一致している注記について確認する。それらをふまえ、四節では『七毫源氏』の注釈と『水原抄』の逸文とを比較し、注釈を書き入れた人物が『水原抄』から引用した可能性について考える。最後に、五節では鎌倉時代の人物名が付された独自の注記について検討してみる。

二、注釈にみえる古注釈の書名

『七毫源氏』に書き記された注釈は、基本的には、その注記をどこから引用したか明記しない。しかし、中にわずかながら、出典名がみえるものもある。稿者が確認できた注釈書名は『伊行釈』、『奥入』、『水原抄』、『河海抄』である。【資料１】～【資料４】はその例である。それぞれ、『七毫源氏』の注釈のあとに、引用元と判断される注釈書に該当する本文がある場合にはその本文を掲出する。また、『源氏物語』の本文は各見出しの「」内に示す。

【資料１】『伊行釈』「末摘花」巻、「みつのともにていまひとくさやうたてあらむ」

『七毫源氏』

琴詩酒　琴詩酒友皆拠我雪月花時尤憶君伊行尺
三友

『源氏釈』

琴詩酒　琴詩酒友皆拠我雪月花時尤憶君
三友

【資料２】『奥入』「紅葉賀」巻、「ほそろくせりといふもの」

『七毫源氏』

保曽呂倶世利右の楽也
奥入云楽名栢笛右楽也　保曽呂久世利長保楽破　急をは賀利也須勘文

『奥入』

保曽呂倶世利　楽名栢笛右楽也

【資料１】と【資料２】にみられるように、それぞれ『伊行尺』と『奥入』の出典名がある。但し、この時代の古注釈の大半は『源氏釈』と『奥入』を引用するため、注釈を書き入れた人物が実際に『源氏釈』と『奥入』から直接引用したかどうかは判断しにくい。なお、「勘文」については現存の注釈に一切見出せないので不明である。

【資料３】『水原抄』「明石」巻、「人の御門にも夢をしむして…」(3)

『七毫源氏』

殷武帝位ニついて三年夢に傳説を見てさめて其形を求に傳巖の野に得たり武丁政を任て殷国大興尚書　水原云黄帝風何と云臣をえんとて大風の塵を吹払と夢にみる又殷の湯賢人を求しかは伊尹と云人鼎俎をゝひて夢のうちにきたり同高宗夢の中ニ傳説を得たるためし等

【資料３】の『水原抄』説は、他の『源氏物語』注釈書には見出すことのできない注記、すなわち『七毫源氏』だけが引用している注記である。即断はできないが、このような項目があることから、『七毫源氏』の注釈を書き入れた人物は『水原抄』を直接参照した可能性が考えられなくはないのである。この点についてはのちの四節で検討を深めてゆくこ

ととする。

【資料４】『河海抄』「幻」巻、「おほしたつほとにふきやうにはへらんや」

『七毫源氏』

河海抄云是をこのころにの字をかみによみつけて不亨に侍らんやとよみて上にしたかはさる心也或又物狂なと云義侍し程に委記付侍也

『河海抄』

鈍ニフシ遅鈍心山

六条院世をそむくへきよしをの給に…〈中略〉…これをこの比にの字をかみによみつけて不亨に侍らんやとよみて上にしたかはさる心也或又物狂なといふ義侍しほとに委しるしつけ侍也

【資料１】から【資料４】まで確認してきたように、『七毫源氏』には『源氏釈』、『奥入』、『水原抄』、『河海抄』からの出典を明記した注記がある。一方、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『仙源抄』、『原中最秘抄』の名前はみえない。しかし、次節で検討するように、たとえ名前がみえなくても、『七毫源氏』の注釈を書き入れた人物はこれらの注釈書を全く使用していないというわけではなさそうである。

三、出典名を示さずに引用する注釈の例

これまでの稿者の調査によると、『七毫源氏』の注釈に出典名が明記されなくても、それが現存する注釈書の注記であると確認できた項目がいくつかある。但し、内容が一致しても、省略されたり、文脈が変えられたりしているものもあるので、ある注釈書から引用したと安易に結論づけるのは危険である。以下に掲出する【資料５】から【資料１０】は、それぞれ『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『仙源抄』、『原中最秘抄』から引用された可能性があると考えられるものである。それぞれ、まずは『七毫源氏』の注記を掲げ、次に引用元と考えられる注釈書の注記を挙げる。また必要に応じて他の注釈書における同様の注記の

有無についても＊で示しておく。

A、『光源氏物語抄』

【資料５】「須磨」巻、「おほやけにかしこまる人は…」

『七毫源氏』

配流人具妻妾無例事

『光源氏物語抄』

配流人具妻妾無例事歟

＊『紫明抄』『河海抄』ともにナシ

【資料５】の注釈内容は『光源氏物語抄』独自といえるものである。なお、『光源氏物語抄』でもここに注記者名はない。『七毫源氏』では、この例と同様に、『光源氏物語抄』のみに見られると思われてきた注記からの引用らしいものがほかにもみられる。

B、『紫明抄』

【資料６】「帚木」巻、「ひかるけんしなのみこと〳〵しう」

『七毫源氏』

敦慶親王号玉光宮亭院御第四御子延喜御事也

『紫明抄』

敦慶親王亭院第四子、母同延喜、二品式部卿、延長八年二月廿八日薨号光玉宮、好色人也

＊『光源氏物語抄』『河海抄』別の内容

【資料６】は、実際に『紫明抄』から引用したかどうかが判断しにくいのだが、『紫明抄』の注記の一部とほぼ一致する文言が『七毫源氏』にみえる例である。先述したように、『七毫源氏』には『光源氏物語抄』と一致する内容がたびたびみられるのだが、一方で『紫明抄』の独自の注釈と一致するものは非常に少ない。『七毫源氏』において素寂説と一致する

注記があるとしても、そのほとんどの内容は『光源氏物語抄』にもある。注釈史上では『紫明抄』の方が『光源氏物語抄』よりも格段に有名であることはいうまでもないだろう。だが、そもそも『光源氏物語抄』に見られない『紫明抄』の注記はさほど多くはない。にもかかわらず【資料６】のように、『光源氏物語抄』とは一致せず、『紫明抄』との一致度が高い注記も『七毫源氏』の中にわずかながら見出されることには留意しておく必要があろう。この書き入れをした人物が『紫明抄』をも参看した可能性は容易に否定しがたいということになろうか。なお慎重な考証を必要とするだろう。

C、『仙源抄』

【資料７】「夕顔」巻、「下人」

『七毫源氏』

定家卿説しもひととよむへし

『仙源抄』

定家説しも人とよむへし云々私云こゝにては下人とよむへくや

【資料８】「夕顔」巻、「きなるすゝしのひとへ」

『七毫源氏』

女郎花のひとへなり云々秋用之歟然而以略儀着如何

『仙源抄』

をみなへしのひとへなり

【資料９】「玉鬘」巻、「あふよりて」

『七毫源氏』

むかしひたりと云心也云々　行能卿説云昔によりたると云心歟あうはあなた也あなたとは昔と可意得候歟如何

『仙源抄』

昔によりたるなりあふとはあなたといふ也行能説也愚案此説尚不審

【資料７】から【資料９】までは、『仙源抄』の独自の注記内容と一致する箇所である。但し、これらも引用された内容が省略されたり、文脈が変えられたりしている。実際に『仙源抄』から引用したのかどうかは不明である。特に、【資料７】と【資料９】のように藤原定家や藤原行能の名前がある注記には留意が必要であろう。この二人は『仙源抄』成立の時代（一三八一年頃）にはとうに亡くなっているので、『仙源抄』も何らかの文献から引用したものとおぼしい。従って、これらの注釈の場合は、『仙源抄』からの引用、『仙源抄』が依拠した出典からの引用、あるいは全く別の文献からの引用という、さまざまな可能性がありうる。

Ｄ、『原中最秘抄』

【資料１０】「紅葉賀」巻、「いりあやのほとそゝろさむくこの世の物ともみえす」

『七毫源氏』

或説云青海波の入舞を入綾と云也或説云いりあやの事は必青海波に不可限歟

『原中最秘抄』

…或説云青海波の入舞綾と云々私云入綾事必青海波曲に下可限歟…

【資料１０】のこの注記内容は『原中最秘抄』から引用された可能性が高いと考えられる。興味深いのは波線の部分、『原中最秘抄』では「私云」だが、『七毫源氏』では「或説」となっている。『七毫源氏』自体にも「私云」と書いてある注記がたびたびある。この「私」の正体は不明だが、この『原中最秘抄』の注釈を書き入れる際、注釈の「私云」を「或説」に変更したと考えられる。

このように、『七毫源氏』はさまざまに豊富な中世の『源氏物語』古注釈を参照し、適宜引用していると考えられる。その中でもＤのように注釈本文が高い一致度を示す場合と、Ｃのように内容上の一致は認められても一致の度合が高くない場合とがある。前者につい

ては直接引用している可能性も考えられるだろうが、出典を明記しない形が基本なので、依拠した文献が現存する古注釈書とは限らないという点に留意しておく必要がある。

四、『水原抄』の逸文

つづいて、本章の二節、【資料３】でもとりあげた『水原抄』と『七毫源氏』との関わりについて検討してみたい。

先の【資料３】では、他の『源氏物語』注釈書には見出すことのできない『水原抄』の注記が引かれていた。『七毫源氏』は実際に『水原抄』にあたって引用したのだろうか。『水原抄』自体は散逸して久しいため、この問題は結論を出しにくいのだが、『水原抄』の逸文と『七毫源氏』の注記とを比較してみれば、何か手掛かりがつかめるかも知れないと考え、稿者は他の古注釈書にみえる『水原抄』逸文や、「光行説」「親行説」の逸文など、約一〇〇項目を『七毫源氏』と比較してみた。その結果、『七毫源氏』の同じ本文箇所に何らかの注釈がついているといえるものでさえ、わずか六箇所しか見いだされなかった。さらに、それらの注記内容を見ると、『水原抄』の逸文と完全に一致するものは一つもないのである。にもかかわらず、これら六例の注記内容のうち、興味深い問題を孕んでいるものが二項目ある。その二項目について、以下で検討してみよう。

【資料１１】「夕顔」巻、「きりかけたつもの」

『七毫源氏』

正和詞私云不通（普）のきりかけの事歟秘事あるへしともおほえ侍らす

『紫明抄』

菅三品云公良かほかはきりかけたつ物といふ事しれる人なしとなん申されける…

『河海抄』

紫明抄に公良三位か説なとゝて秘事けにいひたれとも強（アナカチ）不レ然歟大嘗会のしとみやといふ物也いま陣座の前に立之

『仙源抄』

紫明菅三品公良云此事我ならてしる人なし云々水原あなかち秘事にあらすしとみやといふ物也大嘗会之時多用之陣座のまへにつねにたつる物也

【資料１１】で重要な点は、『仙源抄』の中に『水原抄』から引用した部分を含むだけではなく、ここは『水原抄』と『正和集』の内容を比較することができる唯一の注記だという点である。『正和集』がどのようなものかは不明だが、稲賀氏の仮説によれば、『正和集』は聖覚の作であり、聖覚が『原中最秘抄』に奥書、跋文を加えた正和二年（一三一三年）八月とは、実は『正和集』の成立時期を示し、『原中最秘抄』は行阿の手によって貞治三年（一三六四年）の頃に作為されたものではなかろうか」とされている。[4] 要は、『正和集』を『原中最秘抄』に至る前段階のものとみているのだが、稲賀氏のこの仮説にはかなりの疑問がある。『七毫源氏』には『正和集』の逸文と判断される箇所が一〇項目あるにもかかわらず、『原中最秘抄』と一致するのは一箇所しかない。さらに、稲賀氏は『七毫源氏』の注釈者が「『原中最秘抄』を無視し、『正和集』の方を採用したことになる」と述べたが、前節、Ｄの『原中最秘抄』で確認したように、『七毫源氏』に『原中最秘抄』の書名がなくても、注釈者が『原中最秘抄』を無視した訳ではない。稲賀氏の論文では【資料１１】の『七毫源氏』の翻刻箇所以外、内容に全く触れていないのである。【資料１１】の『河海抄』と『仙源抄』はほぼ一致しているが、『仙源抄』だけは『水原抄』から引用したとの情報が含まれている。一方、『七毫源氏』の注記内容は、意味が取りにくいのだが、一つだけ確認できることは、『七毫源氏』の「正和詞」が『水原抄』の内容と一致しないことである。

【資料１２】「紅葉賀」巻、「なかのほそを」

『七毫源氏』

一よりして七まてはふと緒と云八より十まてはなかをと云計為中をはほそ緒と云十の絃を中に用あひたなかのほそをとは云也又普通之説には四すちを三にわけてふと緒なか絃ほそ絃并の絃まてあつる也

此説にはなかのほそ絃と云事なし巾の絃を笙よりうつしたるあひた号筆

『光源氏物語抄』

ほそを十のを也ゆするを也平調には箏柱（コトヂ）をはさけてたつる也寂素

『紫明抄』

平調には箏柱（コトヂ）をはさけてたつる事也

『河海抄』

平調は箏柱をさけてたつれは也巾の絃を中のほそ緒と云々

『仙源抄』

愚案水原にも十のをゝ巾にもちゐるによりて中のほそををかくいふとあり紫明にも平調には柱をさけてたつる也云々しかれともなをそのいはれたしかならぬにやたゝいまの調子は狛一越調也これを柱をうるはしき一越調のやうにたてはちのをゝは平調の位にたてゝこま一越調の楽をひく事ありかくてひく時の巾のを平調にをしくたしてひく時の十のをにあたる也十のを又中のをなれはかくいへる也これは一より七まてはふとを八九十中のを斗為巾はほそをといふ説によれり今世の妙音院の流には一より四すちつゝふとを中をほそをとわけて巾のをゝはなをほそくする也かやうにては又義もかはりぬへけれと大かた中にほそきをと云説もあるへしたとへはいつれのやうにつけても巾のをの事と心うへし

『原中最秘抄』

なかのほそをとは委通流（イツウリウニ）云一より七まてはふとをと云八よりして十まてはなか絃（ヲ）と云行阿云為巾（イキン）をはほそ絃を巾もちゐるによりて中のほそをと云也云々巾の絃を笙よりうつしたるあひた筆と云と云々

【資料１２】で重要なところは、『七毫源氏』の注記内容が、実線部の対応のほか、特に『仙源抄』の『水原抄』説（破線部）、ならびに『原中最秘抄』の一部（波線部）と一致している点である。しかし、文言の一致度は決して高くないことから、『仙源抄』や『原中最

秘抄』から直接引用したようにも思えない。しかも、『七毫源氏』の注記の途中、「又普通之説」から「あつる也」の部分は、『仙源抄』と『原中最秘抄』の両本ともに見られない内容である。この『七毫源氏』の注記の構成について、稿者は次のように想定している。すなわち、この注釈のうち、「十の絃を…ほそをとは云也」という破線部は『仙源抄』とのおおよその一致から、『水原抄』の説といえるだろう。その前後の部分に関しては確定しがたいのだが、それらも、『水原抄』に含まれていたという可能性はあるかもしれない。なお、『水原抄』との一致が考えられる注釈が『七毫源氏』でわずか二箇所しかないことが注意される一方で、他の注釈で見出せない注記も『七毫源氏』には多くあり、それらが『水原抄』から引かれているという可能性も完全には否定しきれないと思われるので、『水原抄』からの直接の引用か、それとも再引用かということは確定しがたい。

『七毫源氏』には【資料１２】のような例があることから、『七毫源氏』には『水原抄』の内容が一部含まれていることは間違いないのであり、さらに、その前後には、従来把握されてこなかった『水原抄』逸文を含み持っている可能性もある。

五、『七毫源氏』の注釈中にみえる人物名

最後に、人物名が付された『七毫源氏』の独自の注記について注目して、鎌倉時代の『源氏物語』古注釈との関係を考察する。人物名がある注記では、誰の説なのかが明確なので注記内容のおおよその年代が判明する。大事なのはこれらの人物が鎌倉時代の人物ばかりであるということである。少なくとも『七毫源氏』の注釈内容に『河海抄』の書名がみられることから、書き入れが行われたのが『河海抄』の成立以降であることが確実な点から考えると、『七毫源氏』の注記を書き入れた人物は、直接これらの鎌倉時代を生きた人物に尋ねることはありえない。従って、人物名を付した注記を書き入れた者は、これらの内容をどこかから引用したことになるのである。さらに、これらの注記内容は『七毫源氏』にしか見出されない独自のものであって、現存している他の『源氏物語』古注釈に見られないので、散逸した古注釈書類から引用した可能性が高いと考えられる。これらの情報は鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の研究にとって未解明の事柄に属するので、非常に重要だと考える。以下、参照すべき他の注釈書の注記をも適宜示しつつ、名前の示された人物ごと

にまとめて検討してみる。

A、俊成卿女

『源氏物語』古注釈の中で、俊成卿女の名前を示すものは非常に少ない。森本元子氏の論文では、次に示す『七毫源氏』の【資料１３】を含めて、『源氏物語』古注釈にみえる俊成卿女の説について考察している。[5]『七毫源氏』に他の本には一切みえない俊成卿女の説がこうして示されていることからは、当該本の注記の書き入れをなした人物が現存していない古い注釈書を参照した可能性が考えられよう。ただし、残念ながら、『七毫源氏』全体において俊成卿女の名前がみられるのはこの一箇所だけである。

【資料１３】「葵」巻、「御心のつもりをおほしつゝ…」

『七毫源氏』

髪洗事也ゆるすとはしろ水也男のひん水いるゝをもゆするつきと云
俊成卿女説云御湯ひかせ給事也

『河海抄』

御ゆするまいり　髪あらふ事也云々或云沐浴事歟史記に沐をゆするとよめり

B、藤原経範

藤原経範は鎌倉時代の公卿である。藤原孝範の息であるが、[6]孝範は河内方、源光行の漢詩の師である点が留意される。[7]管見によると、孝範の名前は【資料１４】の『河海抄』以外では、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『原中最秘抄』の「紅葉賀」巻の「御きさきことは」の項目にしかみられない。経範の名前はそれより少ない。[8]『七毫源氏』に経範の名前のある注釈は一例のみだが、その興味深いところは『河海抄』との関係である。次に、『光源氏物語抄』および『河海抄』の注記とともに掲げてみる。

【資料１４】「賢木」巻、「ゐむふたきなとやうのすさひわさともし給」

『七毫源氏』

掩韵也　古詩の韻字をふたきて下句の文字をふたきたる韻字と何文字と推する也
ゐんふたきとて勝負なとにする也
経範卿説云四韵詩を将棋の馬にてふたきて推する事也

『光源氏物語抄』

掩韻會事古詩駒字ヲふたきて下句末字
をふたきたる韻字を何文字と推して勝負する　素寂　＊『紫明抄』ほぼ同じ

『河海抄』

掩韵　古集の韻字をふたきて何文字と推して勝負をする也（上）古掩韵を為宗不
好連句云々　見孝範朝臣記

『七毫源氏』のこの「賢木」巻の注釈は二つの部分に分けられる。前半は『光源氏物語抄』、『紫明抄』、さらに『河海抄』にもある素寂の「ゐんふたぎ」の説である。後半は破線を付した経範の説である。この経範の説は『七毫源氏』の独自の注釈であるが、『河海抄』には、「見孝範朝臣記」と付された注記がある。『孝範朝臣記』は散逸したため、どのような内容を含んでいたか確認できないのだが、孝範と経範の親子関係から推測するならば、これら両者の注記には何らかの関わりがあるのかもしれない。

C、邦兼

「邦兼」という人物名は他の『源氏物語』古注釈に例が見出せないが、『七毫源氏』にはこの人物の説が一箇所ある。

【資料１５】「末摘花」巻、「御そひとくえひそめ」

『七毫源氏』

紫のくろきなりえひかつらの色也

邦兼説云面こき紫也うちはふたへたるへし面は綾おりものゝ用也□□衣からきぬ
あこめに用之からきぬあこめは女房の外不用之　　＊□は虫食いで解読不能

『光源氏物語抄』

むらさきのくろき也　えひかつらの色なり　勘文

『紫明抄』

えひそめ紫のくろきいろなり

『河海抄』

衣服令義解曰蒲陶（エヒソメ）蒲陶者紫色之最浅（アサヒ）也

『仙源抄』

紫のくろき色也ゑひかつらの色也

【資料１５】で確認できるのは、まず『光源氏物語抄』の「勘文」の説が『仙源抄』の引用したものと同一であるということで、しかも、『七毫源氏』も一致する注記を引いている。しかし、『七毫源氏』の注釈の後半には「邦兼」なる人物の説があり、そこにより詳しい内容がある。『七毫源氏』のこの注釈はどこから引用したのかまったく不明であるし、さらにこの人物についての情報も非常に少ないが、『群書類従』巻第四四一の「弘安八年大講堂供養記」に「前筑前守橘邦兼」という人物がみえた。[9] そして、『続群書類従』巻第二六九の「永仁五年朔旦冬至記」には「予於前内蔵權頭邦兼宿所出立」とある。[10] さらに『群書系図部集』巻第一〇八の「尊卑分脈　橘」にも「邦兼正四位下」の名前がある。[11] 弘安八年（一二八五年）や永仁五年（一二九七年）は鎌倉時代で、『源氏物語』古注釈史からみれば、『紫明抄』成立の永仁二年に近い。あるいはこの「邦兼」は津守国冬の兄弟の「国兼」と同一という可能性もあるだろうか。結局、「邦兼」の正体は不明だが、いずれにせよこの注釈内容もかなり古いもので、現在に至るまで埋もれてしまっていた注記かもしれない。

D、藤原頼隆

藤原頼隆も鎌倉初期の公卿であり[12]、『源氏物語』古注釈においてなかなかみられない人物名であるが、次の【資料１６】に挙げる『七毫源氏』「明石」巻以外では、『原中最秘抄』「帚木」巻に一項目見出される[13]。稿者が確認しえたのはこの二箇所だけである。

【資料１６】「明石」巻　「せむしかき」

『七毫源氏』

宣旨かき非震筆仍他人のかきたるを云宣旨書也

頼隆卿説云宣旨書とはかみは文字おほきにしもちいさく書くたす名也仍前飛書とも宣旨書とも云々

『光源氏物語抄』

宣旨非震筆（宸筆歟）仍他人の書たるを云宣旨書也　教隆

『七毫源氏』においては、前半で『光源氏物語抄』の教隆説が引用された後、後半では、『七毫源氏』のみにみえる独自の内容で頼隆の説が記されている。先述のとおり、『原中最秘抄』「帚木」巻にもその名が見られることから、頼隆はある程度、河内方の周辺にいた人物だろうと予想されるが、そのあたりの詳細は不明である。

E、清原教隆

清原教隆も鎌倉時代の人物で、彼は公卿ではないが、『光源氏物語抄』の中に多くの説が引用されていることが知られている。『七毫源氏』の注釈には『光源氏物語抄』から引用されたものが複数あるので、それらの中に教隆説があってもおかしくはないのであるが、『七毫源氏』の注釈を書き入れた人物は『光源氏物語抄』を引用する際、基本的に注記者の名前を略すため、『光源氏物語抄』の中に最も多くみられる素寂の名前にしても、『七毫源氏』においては一箇所もみられないのである。したがって、次の【資料１７】および【資料１８】のように教隆の名前が残る例は珍しいといえる。

【資料１７】「須磨」巻　「くらひをかへしたてまつる」

『七毫源氏』

致仕之法辞官不辞位官位皆被止事は除名とて重科時事也而今位をかへすと云事如何教隆

裏書に此答書摂政を返し奉るを位をかへすと云歟凡摂政関白雖無相當之位□（摂歟）万機為一人之輔佐極位之主無比偏因之虞舜に□（摂歟）位と云り周書ニ位と稱せり故位を返すとは摂政の位を返也こしのへてとは腰をかゝむることは官位之礼也腰をのふとは■■儀私事也　※■は解読不能。

『光源氏物語抄』

尋云致仕之法辞官不辞位官位皆被止事は除名トテ重科之時事也而今くらひかへすと云事如何　教隆

【資料１７】の初めの部分は『光源氏物語抄』と一致し、教隆の名前があるのも『光源氏物語抄』からそのまま引用されたと考えられる。ただし、これは教隆説というより、彼が指摘した質問だと考えられる。なお、この部分は『光源氏物語抄』と『七毫源氏』にしか見られない。大いに注目すべきは『七毫源氏』の後半で、「裏書に」以下の長い注記部分である。これは何の資料の裏書なのか不明だが、教隆の質問に応答した内容である。ただし、この「裏書」の回答は当時のものなのか、それとも後人が教隆に答えを残したのかは不明である。

『七毫源氏』にみられる教隆の名前はもう一箇所ある。

【資料１８】「葵」巻「斎宮またもとの宮におはしませはさか木のはゝかりにことつけて」

『七毫源氏』

もとの宮とは定所歟然者いまた六条にて諸司御所へ　教隆

『河海抄』

もとの宮とは卜定所歟六条御休所在所歟さかきのははかりは神事の蝉の心也

さか木とは真賢木と（も）真坂樹とも日本紀にかけり天照太神あまのいは戸をとち給ひし時八百万神達天香具山の坂樹をねにとりていのり給しより神の縁木とす榊は非本朝の作字云々竜眼木と書之

【資料１８】の『七毫源氏』の注釈も教隆説であり、しかも、注記の最後に注釈者の名を示すのは『光源氏物語抄』と似た形式である。しかし、この注釈は現存する『光源氏物語抄』にはみられないのである。わずか一項目に関わる問題ではあるが、稿者はこの事例を非常に注目すべきものと考えている。それは『光源氏物語抄』特有の問題と関わる。以下、具体的に説明しよう。

『光源氏物語抄』の伝本は二本しかなく[14]、それらの本文もほぼ一致している。『光源氏物語抄』は注記の最後に注記者の名前や出典名を記すという、他の『源氏物語』古注釈と異なる特徴をもっている。従って、『光源氏物語抄』の注釈が「伊行」、「定家」、「親行」、「西円」、「教隆」、「今案」など、さまざまな人物の説や先行する注釈書から注記を集めていることは明らかである。しかし、『光源氏物語抄』の五十四巻の注記の中で、「葵」巻と「賢木」巻だけは他の巻々と大きく違う点がある。それはこの二巻のみ、素寂と『奥入』の説しか注記に挙げられていないのである。他の巻々に多く見られる西円、教隆、今案などの説が、この二巻だけ全くみられないのである。

こうした点を勘案すると、『七毫源氏』にある【資料１８】、「葵」巻の教隆説はいくつかの意味がある。考えられるのは、①『七毫源氏』の注釈を書き入れた人物の使用していた『光源氏物語抄』の「葵」巻には教隆の説もあった、もしくは、②この教隆の注釈は元々『光源氏物語抄』から引用したものではなく、他の出典から引用した、以上の二つであろう。この一項目だけの情報から結論に至ることは到底不可能だが、いずれにしても、この注記一つがあることによって、現存する『光源氏物語抄』の祖本にあたる注釈書、もしくは鎌倉時代の注釈者たちの注を含みもつ『光源氏物語抄』以外の何らかの注釈書の存在について、考えをめぐらす必要があることがわかってきたといえるだろう。

六、終わりに

『七毫源氏』は『源氏物語』古写本として知られているが、本文の周りに記されている多数の注釈は、本章で取り上げた例のように、中世、特に鎌倉時代のさまざまな『源氏物語』古注釈から引用されたとおぼしいものであり、中には何百年もの間埋もれてしまっていた注記さえ含まれているということがわかってきた。以下、本章において確認したこと、あるいは検討したことなどをあらためて整理する。

まず、二節では、『七毫源氏』の中で注釈書名が付された注記について確認した。確認ができた名前は『源氏釈』、『奥入』、『水原抄』、『河海抄』である。但し、次の三節の検討で確認したように、注釈書名が示されなくても、『七毫源氏』の注記を書き入れた人物は、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『仙源抄』、『原中最秘抄』を利用、参看した可能性がある。ただし、それらを直接引用したかどうかは、即断しかねる場合が多い。

以上をふまえながら、四節では『七毫源氏』の独自の内容と、散逸した『水原抄』の逸文とを比較した。その結果、内容の完全な一致はみられなかったものの、【資料１２】のように、『七毫源氏』の独自の注釈に『水原抄』の逸文が含まれている可能性が考えられる例があることを述べた。

最後に、五節では『七毫源氏』の中で、鎌倉時代の人物名が付された独自の注記について検討した。俊成卿女をはじめ、藤原経範、藤原頼隆の説は『七毫源氏』以外の『源氏物語』古注釈において全く見られないものであり、注目に値する。【資料１５】の「邦兼」は情報が少ないため、さらなる検討を要するが、鎌倉時代の橘邦兼である可能性について確認した。さらに、『光源氏物語抄』にたびたびその名がみえる清原教隆の名を付した注記は、『光源氏物語抄』の祖本、あるいはその成立期の別の注釈書の存在の可能性などをうかがわせる、貴重な情報を提供している。

このように『七毫源氏』は今までに確認不可能であったような鎌倉時代『源氏物語』古注釈に関するさまざまな情報を提供してくれる資料である。さらに、散逸した注釈書の内容も含まれている可能性が高い点でもきわめて重要である。本章では、この貴重な本の注釈史上の価値について明らかにしつつ、鎌倉時代から長らく埋もれて続けてきた注記の一端などを掘り起こしてみた。『七毫源氏』には他の古注釈で見出せない独自の注釈内容や、

『水原抄』との関係、引用されている『河海抄』の内容など、まだ研究すべき課題が多くある。また、『七毫源氏』の書き入れ自体がどういう営為を意味しているのかを含め、今後、さらに精査を続けることとしたい。

【注】

（1）『七毫源氏』の注釈に関する論文は、①稲賀敬二「中世源氏物語注釈の一問題――『正和集』から『原中最秘抄』へ――」（『源氏物語の研究 物語流通機構論』笠間書院、一九九三年、初出一九七二年）、そして、②稲賀敬二「東山文庫本『七毫源氏』所載の注釈資料――十四世紀中葉の源氏研究の周辺」（上記①書、初出一九七三年）の二本である。

（2）佐々木孝浩「蔵書家大内政弘をめぐって」（佐藤道生編『名だたる蔵書家、隠れた蔵書家』慶応義塾大学出版会、二〇一〇年）

（3）稲賀敬二氏、注（2）の①論文も、『水原抄』の名前がみえる「明石」巻の注釈に言及している。なお、『七毫源氏』で『水原抄』の名前が見えるのは二項目あるのだが、もう一項目は『河海抄』「幻」巻の例と一致し、さらに善成の説も一緒に引かれてあるので、これは『水原抄』説も含めて『河海抄』から引用したものだと判断する。

（4）稲賀敬二氏、注（2）の①論文。

（5）森本元子「源氏物語古注における俊成卿女説」（『俊成卿女の研究』桜楓社、一九七六年）

（6）野島寿三郎編『公卿人名大事典』（日外アソシエーツ、一九九四年）の「経範」の項目参照。

（7）池田利夫『河内本源氏物語成立年譜攷：源光行一統年譜を中心に』（日本古典文学会、一九七七年）の「承安二年（一二七二）壬辰」を参照。また、平野邦雄・瀬野精一郎編『日本古代中世人名辞典』（吉川弘文館、二〇〇六年）の「源光行」の項目にもこの情報がある。

（8）藤原経範の名前がみえる例は、『仙源抄』の「うけはし」にある。稿者が見出したのはこの一例しかない。

（9）『群書類従』第二四輯（続群書類従完成会、一九六〇年）

（１０）『続群書類従』第一〇輯下（続群書類従完成会、一九五七年）

（１１）『群書系図部集・第二』（続群書類従完成会、一九七三年）

（１２）安田元久編『鎌倉・室町人名事典』（新人物往来社、一九九〇年）では、藤原頼隆について、次のように記している（執筆は三輪淳子）

藤原頼隆（建仁二年（一二〇二）～？）鎌倉初期の公卿。本名は忠宗。父は入道前権中納言正二位藤原顕俊。母は石見守藤原能頼入道の女。承元四年（一二一〇）五位。兵部権大輔・中宮大進・氏院別当・右中弁・右宮城使・蔵人頭を経て、安貞元年（一二二七）、正四位下に叙せられ参議に任ぜられる。同二年、従三位。寛喜二年（一二三〇）、辞退（実は停任）嘉禎元年（一二三五）八月七日出家。

（１３）『原中最秘抄』「帚木」巻「物さためのはかせになりてひゝらゐたり」

頼隆卿説云此詞鴨よりをこれり　沸卉（ヒキトハネタハキス）　たゝいひゐたりとか心得ひい五音通する故也らの字はあまれり　文選日本記共以かろ〳〵しき心なり　輕粧日本記

（１４）石川一他責任編集『光源氏物語抄』（武蔵野書院、二〇一〇年）の解題（新美哲彦）では「完本はノートルダム清心女子大学本のみ。宮内庁書陵部も完本であったが、関東大震災で第一冊を焼失。現在は第一冊を内閣文庫蔵『紫明抄』より補写している。この二本以外に、実践女子大学山岸文庫、国文学研究資料館初雁文庫、東海大学桃園文庫に、昭和に入ってから書陵部本を転写した新写がある」とされている。

第七章　東山御文庫蔵『七毫源氏』と『光源氏物語抄』

一、はじめに

第五章と第六章で考察したように、『七毫源氏』の本文中には多くの注釈が記載される。そのうち、『七毫源氏』と『光源氏物語抄』の関係については、早くに池田亀鑑氏が「この本で注意されることは、頭部に種々の文献を引くことで、当時の源氏研究の一斑を知ることができる。書陵部蔵別本紫明抄（稿者注：『光源氏物語抄』のこと）と共に、この注記はよき参考資料となるであろう」と述べる[1]が、『光源氏物語抄』と『七毫源氏』の注記の重なりを指摘するものではなさそうである。これに対し、初めて本格的に『七毫源氏』記載の注釈について、『正和集』との関わりを中心に論じた稲賀敬二氏[2]は次のように述べる。

『七毫源氏』は書陵部本『光源氏物語抄』を参照した証がいちじるしい。『光源氏物語抄』の名は書名としてはあまりに一般的すぎるためか、『七毫源氏』所載の諸注にその書名を併記した例を見ないけれども、両者の間に注の字句まで一致する項目が相当数みられることからしても、両者に直接関係があることは動かない。

この稲賀論文では、具体的にどのように注釈が重なるのかということは示していない。しかし、『光源氏物語抄』と『七毫源氏』の関係について詳細に検討することは、中世において『源氏物語』古注釈がどのような展開を遂げたかを知る上で非常に重要である。そこで、本章では『七毫源氏』と『光源氏物語抄』との関係を具体的に考察していきたい。

二、『七毫源氏』と『光源氏物語抄』の注記の関係

そもそも、なぜ『七毫源氏』と『光源氏物語抄』との関係に注目するのか。まずは、これらが共通する注記を持つことの意義について確認しておく。

『光源氏物語抄』は長らく『異本紫明抄』と呼称されてきた。題簽と奥書に「紫明抄」とあり、注記者名も「素寂」が最も多くみられるから、『紫明抄』の「異本」と思われてきたためだが、堤康夫氏の研究[3]により、『光源氏物語抄』の成立は『紫明抄』より先行するとされ、これが今日ではほぼ定説になっている。

『光源氏物語抄』の重要な特徴の一つは、ほぼ各項目に注記者の名前が記される点である。この点は、栗山元子氏が「鎌倉期に行われた『源氏物語』の注釈活動のあり方を窺い知ることができる資料として貴重である」[4]と述べる通りである。しかしながら、『光源氏物語抄』は江戸期書写の伝本二本しか現存しないこともあり[5]、後代の注釈書への影響に関しては、『河海抄』が指摘されているのみである[6]。このような事情ゆえ、『七毫源氏』に『光源氏物語抄』だけにみられる注記が取り上げられていることには大きな意味がある。『七毫源氏』の書写は『光源氏物語抄』伝本の書写よりおよそ二〇〇年ほど先行すると考えられ、その注記は鎌倉期の『光源氏物語抄』原本により近い可能性もあろう。

さらに重要な点として、『光源氏物語抄』は、『紫明抄』や『河海抄』のように高貴な人に献上された注釈書とは性格が異なり、学者の研究ノートのような、言ってみれば生の資料と言いうる点が挙げられる。そのような性格ゆえに伝本も少ないと考えられるが、にもかかわらず、『七毫源氏』に『光源氏物語抄』の注釈が引用されているとすれば、『光源氏物語抄』が、『河海抄』に影響を与えたのと同様、大内氏旧蔵の古写本に影響を与えているということになるので、『光源氏物語抄』の影響圏という点から見て、留意される。

これまでの研究において『七毫源氏』は、注釈資料としてではなく、あくまでも『源氏物語』の古写本として扱われてきた。しかし、右に確認したとおり、『七毫源氏』は中世の『源氏物語』古注釈の研究においてこそ重要な資料であるといえるだろう。注釈史の中に位置づけることが急務であると考える。

三、『七毫源氏』と『光源氏物語抄』の注記の一致

『光源氏物語抄』の最大の特徴は注記内容の後に、素寂、西円、教隆など、注記者の名前が記されている点である。その説を発信した当人の名を注記の末尾に記す例は他の『源氏物語』古注釈にはみられない。『七毫源氏』では『光源氏物語抄』と同じ注記内容を挙げる際、（一部のごくわずかな例外を除き）基本的に注記者の名前を略している。以下に三例あげる。なお、比較対象として『紫明抄』『河海抄』の注記にも適宜注目してみる。

【資料１】「紅葉賀」巻

『七毫源氏』

内裏追儺之儀見北山抄私家未見之可勘

少輔難云ひいなあそひになやらうまねをするほとにうち散したりか

『光源氏物語抄』

わたくしのいゑの追儺事文選追儺也おにはしりと云事也

内裏追儺之儀見北山抄私家儀未見之可勘之教隆

少輔難云ひいなあそひになやらふまねをする程ニうちゝらしたりける○私家の實の追儺ならは何いぬきこれにましらんや若まねしたらは内裏之義をまなふる難分別

＊『紫明抄』『河海抄』ナシ

【資料２】「須磨」巻

『七毫源氏』

君還地辞炎我向忠州入瘴煙未死會應相見在又知何地復何年ト云事歟

『光源氏物語抄』

いつまたたいめ給はらむとすらむと云事

文集第十七（ママ）

君過秦地辞炎暎我向忠州入瘴煙未死念（ママ）應相見在又知何地後（ママ）何年　西圓

＊『紫明抄』『河海抄』ナシ

【資料３】「絵合」巻

『七毫源氏』

長恨歌には楊貴妃むなしく成て唐の玄宗皇帝なかき御ものおもひ也

王昭君は北狄にたまふ此故にことのいみありて留給と云也

『光源氏物語抄』

長恨歌王昭君なとやうなるゑはおもしろくあはれなれとことのいみあるは此たひはたてまつらしと

長　根（ママ）　歌には楊貴妃むなしく成て唐の玄宗皇帝なかき御物思ひ也王　照（ママ）　君は北狄に給ふ此故にことのいみありてとゝめ給といへる也　今案

『河海抄』

楊貴妃は馬嵬にうしなはれ王昭君は夷狄にとつみせられ共（に）其憚あるへき歟　＊『紫明抄』ナシ

これらの三例はいずれも『光源氏物語抄』の独自の注記内容で、『紫明抄』や『河海抄』にない。【資料１】【資料２】【資料３】の『光源氏物語抄』の注記者は、それぞれ教隆と西円と今案である。

先述したように、『七毫源氏』の注釈は本文周りの余白に記されているため、注記の長さは制限される。基本的には、長い注記内容をそのまま引用せず、要約する傾向がある。例えば次の例をみてみよう。

【資料４】「帚木」巻

『七毫源氏』

……しめやかなるよひの雨に殿上（仁壽殿）に（道長）も（道兼）……（道隆）

『光源氏物語抄』

あま夜のものかたりの事

花山院御時五月しもつやみに五月雨もすきていとをとろ〳〵しくかきくれ雨ふる夜御門さう〳〵しくやおほしめしけむ殿上にいてさせおはしましてあそひ給けるに人々物語なとし給けるにむかしおそろしかりける事ともなとに申也(なり)給つ(へ)るにこよひこそいとむつかしけなるよなめれかく人ちかなるにたにけしきおほゆましてものはなれたる所なといかならむ(ママ)ところへひとりいなむやとおほせられけるにえまからしとのみ申給けるを入道殿(道長)はいつくなりともまかりなんと申給けれはさある所おはします御門にていとけうある事なり道隆は豊楽院道兼は仁寿殿のぬりこめ道長は大極殿へいけとおほせられけり　釋西円

【資料４】の『七毫源氏』は、本文の右傍に、「仁壽殿　道長　道兼　道隆」と書かれている。この内容は『紫明抄』や『河海抄』になく、『光源氏物語抄』では「あま夜のしなさためのところ……」の本文についての素寂の長い注記の後、西円の雨夜の品定めに対する注記がある。『七毫源氏』の注釈者が『光源氏物語抄』のこの内容をみて、「仁壽殿　道長　道兼　道隆」だけをメモした可能性がある。

次に、『七毫源氏』における注記の方法がみえる「澪標」巻の例をみてみよう。

【資料５】「澪標」巻

『七毫源氏』

致仕之時ハ去官也而今云去位如何

四皓七賢事歟

商山四皓　周公　綺里季　夏黄公　甬里先生

『光源氏物語抄』

①　源氏の大納言内大臣になり給ぬ數さたまりてくつろ〻(く)所なかりけれはくはゝり給ふ也けりやかて夜のまつりことゝしり給へしとあれはさやうの事しけきそくに

はたへすなんとて致仕のをとゝをそ摂政し給へきよしゆつり聞え給ふをやまひによりてはしめの位も返したてまつりてし(てし)をと云事

致仕之時者七(去)官也而今云去位如何　教隆

商山四皓　園公　甬里先生　綺里季　夏黄公　漢高祖欲易太子呂后恐問留位留侯對田顧上不能致者天下有四人々々者年老矣為書使辦士因清宜来於是呂后奉太子書迎此四人々々至高祖置酒太子待四人従太子年皆八十有□鬢眉皓白衣冠甚律上□之問曰彼何為者四人前對各名言姓曰園公甬里先生綺里季夏黄公上乃驚曰羽翼山成難動矣　素寂

②　いよ〳〵おひのつもりそひてさかしき事侍らしとうけひきゝこえ給はす人のくにゝも時うつりよのなかしつまらぬおりはふかき山にあとをたえたる人たにもしろかみをもはちすいてつかふるたくひをこそまことのひしりとはしたゝ(ママ)めれと云事

四皓　七賢事歟　素寂

【資料５】では、『光源氏物語抄』の項目が連続している二項目があり、説明の便宜上①と②として分けた。①の注記者は教隆と素寂、そして②の注記者は素寂である。なお、『紫明抄』では①の教隆の内容を除く、素寂の長い注記内容だけを挙げている。一方、②は素寂による注記ながら、『紫明抄』ではこの項目が採用されていない[7]。

しかし、ここで注目されるのは、『七毫源氏』において素寂の長い注記の大半を略しながら、『紫明抄』にない教隆と素寂の注釈を挙げていることである。ちなみに、『河海抄』では、①の部分に関しては『紫明抄』の注記内容をほぼそのまま引用している一方で、②に相当する注記がない。

【資料５】のような例はかなり重要である。なぜならば、『七毫源氏』の注釈者は『光源氏物語抄』と『紫明抄』の違いを理解し、このような注釈を記したと考えられるからである。というのも、『七毫源氏』には、多くはないが『紫明抄』独自の注記内容もみられるため、注釈者が『紫明抄』を所持していたか、もしくは『紫明抄』の説にふれる機会を有していたと考えられる。一方、『光源氏物語抄』は、現在まで長らく「異本紫明抄」と呼称さ

れたほど、『紫明抄』の「異本」だと誤解されたりしてきた。しかも、現存している伝本の題簽も「光源氏物語抄」ではなく「紫明抄」である。そのようにしてかろうじて伝えられてきた『光源氏物語抄』と、『七毫源氏』との一致がかなり目立つ。つまり、『光源氏物語抄』も『紫明抄』も所持ないしは閲覧していたと考えられる『七毫源氏』の注釈者が、【資料４】のように『光源氏物語抄』を引用するということは、注釈書として、『紫明抄』よりも『光源氏物語抄』を重要視していたということを示すものであろう。

『七毫源氏』の注釈者がどのような人物かは不明だが、少なくとも彼は多数の『源氏物語』注釈書を所持・閲覧できる環境にあるので、ある程度の権力、あるいは財力があった人物と推測される。さらに、この注釈者の注記内容の選択をみると、『源氏物語』に対する知識も相当にあった人物だと考えられる。【資料４】のような例は他にもある。あと二つの例を挙げよう。

【資料６】「末摘花」巻

『七毫源氏』

ゑしちましゝまことちかひてものいはぬ事也

『光源氏物語抄』

いくそたひ君かしゝまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみにと云事

しゝま　誓言也　又無言之義也　素寂

又えしましゝまとちかひて物いはぬ事也　素寂

『紫明抄』

いくそたひ君かしゝまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに

しゝま誓言也　又無言之儀也

＊『河海抄』は別の内容なので、ここに取り上げない。

【資料７】「末摘花」巻

『七毫源氏』

たゝきぬのふくさはかりを云しろきもあり紅もあり五なともつねの事也

『光源氏物語抄』

かいねりこのめる花の色あひや見え侍らんと云事

たゝきぬのふくさはかりを云しろきもありくれなゐも

あり五（本ノマヽ）なとつねのことなり　素寂（重歟）

＊『紫明抄』『河海抄』ナシ

【資料６】と【資料７】の『光源氏物語抄』には素寂独自の注記が引かれている。特に【資料６】では、同じ素寂の説でも『紫明抄』にあるもの（破線部）とないもの（傍線部）の両方がある。しかし、『七毫源氏』の注釈者はわざわざ『紫明抄』にない素寂の注記だけを選択し、『七毫源氏』に書き入れたということになる。このような例は他にもいくつかみられる。注釈者のこうした傾向は、鎌倉幕府の将軍に献上されるほど、権威のある『紫明抄』ではなく、研究ノート的な『光源氏物語抄』の注記をあえて選択していることになり、甚だ興味深い。これは、中世の『源氏物語』古注釈の展開の中で注目すべき事例といえるだろう。

『七毫源氏』に引用される『光源氏物語抄』の注記からは、もう一つ大事なことが判明する。それは【資料７】にみえる「五（本ノマヽ、重歟）」のような注記である。先述したように、『光源氏物語抄』の伝本は二本しかなく、内容を他系統の本で確認することができない。しかし、『七毫源氏』の引用のおかげで、「五」が『光源氏物語抄』本来の本文らしいと判断できるのである。このような例をもう一つ挙げよう。

【資料８】「明石」巻

『七毫源氏』

宣旨かき非震筆仍他人のかきたるを云宣旨書也

『光源氏物語抄』

せむしかきと云事

宣旨非震（宸筆歟）筆仍他人の書たるを云宣旨書也　教隆

＊『河海抄』ナシ

＊『紫明抄』には「明石」巻ではないが、「夕霧」「御法」巻に「せんしかき宣旨書」がある。

【資料８】は教隆の宣旨書きに関する注記内容で、『光源氏物語抄』の注記の中に「震（宸筆歟）筆」とある。『七毫源氏』でも同じ内容を引用した上で、『光源氏物語抄』書写者が疑問を持った「震」をはっきりと「震」と書いてあるので、これによって、「震」が『光源氏物語抄』本来の本文らしいことが確認できる。

以上のような注記の一致する例に続けて、次節では、『七毫源氏』が『光源氏物語抄』の注記の構成をそのまま保つ場合をみていく。

四、『七毫源氏』で『光源氏物語抄』の構成がみられる注記

『七毫源氏』では『光源氏物語抄』の構成まで踏襲されている注記がいくつかある。まず、「須磨」巻の例をみてみよう。便宜上、注記内容に即して(a)～(d)の符号を付して示す。

【資料９】「須磨」巻

『七毫源氏』

(a)　鴈陣易消秋嶺上鳧舟不弁夕陽中（勘文）

(b)　鴈聲引櫓（伊行尺）　(c)　（文集）晴虹橋影出秋鴈櫓聲来

(d)（朗詠上）雲衣范叔羇中贈風櫓瀟湘浪上舟

『光源氏物語抄』

おきより船とものうたひのゝしりてこき つ(ママ) くなとも…〔中略〕…と云事

(a) 鴈陣易消秋嶺上鳧舟不弁夕陽中　素寂

かりの鳴つゝきてゆく聲かちのをとにまかへりと云事

(b) 鴈聲引 櫓(櫓カ) 伊行釋　(c) 文集五十四 晴虹橋影出秋鴈櫓聲来 西円釋

(d) 朗詠上 雲衣范叔羇中贈風櫓瀟湘浪上舟鴈聲引 梶(ママ)

『紫明抄』

おきよりふねとものうたひのゝしりてこきくるなとも…〔下略〕

(a) 鴈陣易消秋嶺上、鳧舟不弁夕陽中

かりのなきつゝきてゆくこゑかちのをとにまかへり (b) 今集 鴈聲引櫓

(d) 雲衣范叔羇中贈、風櫓瀟湘浪上舟 後中書王

＊『河海抄』は別の内容なので、ここに取り上げない。

【資料9】の二項目の内容は次のように、四つに分けられる。

(a)、鴈陣易消秋嶺上鳧舟不弁夕陽中

(b)、鴈聲引櫓

(c)、晴虹橋影出秋鴈櫓聲来

(d)、雲衣范叔羇中贈風櫓瀟湘浪上舟

(a)は素寂の説、(b)は伊行の説、(c)は西円の説、(d)は元々伊行の『源氏釈』に引かれている『和漢朗詠集』である。少し異同があるが、ほぼ一致している。しかし『紫明抄』では(c)の部分、つまり西円の注釈が採用されていない。しかも、『紫明抄』の(b)には「伊行尺」も記されていない。一方、『光源氏物語抄』の注記から『源氏物語』の本文を除くと、その構成は『七毫源氏』とそのまま一致する。なお、(a)の「素寂」は『七毫源氏』では「勘文」になっている。「勘文」は『七毫源氏』でいくつかみられるが、それらは『紫明抄』に限られない。また(b)の「伊行尺」の名はそのまま写されている。そして、(c)の「西円」の名前が略されている。

【資料９】のような『七毫源氏』の注記内容から判明することが二点ある。まず、『七毫源氏』の注釈者が実際に『光源氏物語抄』を所持ないしは閲覧し、そのまま写した可能性が高いこと、そして二点目としては、現存の『光源氏物語抄』より古い時代の『光源氏物語抄』も同じ構成で書かれていたということである。このように、『光源氏物語抄』の構成が『七毫源氏』にも共通している注記はこの例だけではない。

【資料１０】「蓬生」巻

『七毫源氏』

三輪決録云蒋詡字元卿舍中竹下開三道若又三道實階歟伊行尺

蒋詡字元卿舍中ニ竹ノ下開ク三道逕ヲ殖柳源氏顕定家卿

蒙求

蒋詡三逕

蒋詡は家まつしき人也三道は門へ行道井へ行道河屋へ行道也

『光源氏物語抄』

いつれか此やとにも必わけけたる跡ノあなるみつのみちとたとるゝ（ママ）と云事

三輪決録

蒋詡字元卿舍中竹下開三道若又三道實階歟　伊行

蒋詡字元卿舍中竹下開三逕殖柳源氏顕定家

蒙求

蒋詡三逕門へ行道井へ行道河へ行道　素寂

蒋詡は家まつしき人也三のみちは門井河へ行道也

『紫明抄』

みつのみちとたとらる

蒋詡字元卿舍中竹下開三逕門へゆくみち　井へゆくみち　かはやへゆくみち

＊『河海抄』の注記は『光源氏物語抄』・『七毫源氏』に一致しない。

『紫明抄』は、まず伊行と定家と同じ『三輪決録』を引用するが、「三逕」以降は『蒙求』の説を示す。一方、『七毫源氏』では、『光源氏物語抄』と比べると最後の二行に異

同があるものの、最初の二行の冒頭の「三輪決録」、そして末尾、「伊行」、「源氏顕」、「定家」、さらに三行目の途中まで一致する。

最後に同じ「蓬生」巻からもう一つの例を挙げよう。

【資料１１】「蓬生」巻

『七毫源氏』

顔叔子と云人男他行の程件の男の疑に塔のかへをこほちてよもすからともしあかしてゐたる事也伊行尺定家尺

此事云毛詩傳而彼文意者顔叔子隣女来臨之時為其人疑使執燭放乎旦遂盡㨰屋而継之然者文理已異豈引為證哉　此事云毛詩云史記共以為屋歟

『光源氏物語抄』

むかし物語に丁こほちたる女もありけるをおほしあはするにと云事

奥顔叔子と云女男他行の跡（ママ）件男（疑をのかれんかために）のうたかひの〇塔（ために）の壁をこほちて夜もすからともしあかしてゐたる事也定家伊行釋

今案四曰此事星毛（毛詩ノ）傳而彼文意者顔叔子隣女来臨之時為其人疑使執燭放乎　且（且カ）　遂盡㨰屋而継之然者文理已異豈引為證哉…〔中略〕…此事或文士云毛詩（井）史記共以為屋（云々）注文選（ニ）顔子加堂事有之可勘引（ン）云々而未勘書者也不審之（也カ）

『紫明抄』

丁こほちたる女もありけるをおほしあはするに

顔叔子といひける人、おう（夫）との他行のあとに、疑をのかれんかために、塔のかへをこほちてよもすからともしあかしゐたる事也丁与塔遍如何

【資料１１】では、【資料９】と【資料１０】と同様に、『七毫源氏』でも注記の末尾に伊行や定家の名前がみられる。ちなみに、『河海抄』では定家の説を引用した後、『毛詩』を長く引用しており、『光源氏物語抄』および『七毫源氏』と一致しない。『紫明抄』

も伊行と定家の説を引用するが、「伊行尺」や「定家」の名前がみられない。留意すべきは、『光源氏物語抄』にみえる「今案」の説も順番通りに『七毫源氏』に引用される点である。また、『光源氏物語抄』が「今案」の前に、伊行と定家の説、すなわち先行する注釈書の注記を挙げているのと同様、『七毫源氏』でも、伊行・定家説が先に挙げられている。ここまでの例からも、『光源氏物語抄』をおおよそそのまま引用したと見てよいだろう。

五、終わりに

中世の『源氏物語』古注釈書には、散逸書も多く、『光源氏物語抄』のように、編者が不明なものもあり、注釈の継承・展開の実態については、謎が多い。『七毫源氏』は『源氏物語』の古写本として知られてきたが、注釈を多く含んでおり、本章で検討したように、当時の『源氏物語』古注釈の実態解明の重要な手掛かりの一つとなろう。

本章での検討を簡単にまとめたい。『七毫源氏』の注記においては、『奥入』、『河海抄』、『水原抄』など出典名を示す場合もある。しかし、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『原中最秘抄』、『仙源抄』と一致する注記の場合、書名が記されない。『七毫源氏』の注釈記載者は中世の主要な古注釈書を所持ないしは閲覧することが可能な環境におり、『源氏物語』に対する知識も深いと考えられる。

先行研究では、稲賀敬二氏が、『光源氏物語抄』の注釈が『七毫源氏』に引用されることについて言及していたが、具体的な検討はほぼなく、本章が、『光源氏物語抄』と『七毫源氏』の関係についての初めての具体的な考察といえよう。

『光源氏物語抄』に関する『七毫源氏』の引用姿勢を以下にまとめる。

1、『光源氏物語抄』注記末尾にある注記者名が、『七毫源氏』ではほぼ略されている。

2、『七毫源氏』の注釈は基本的に本文の行間ではなく、『源氏物語』本文の周囲の余白に書かれており、スペースが限られるため、注記内容はしばしば省略される。あるいはメモに相当するような書き方もある。

3、『光源氏物語抄』も『紫明抄』も所持・閲覧していたと考えられる『七毫源氏』の

注釈者が、『光源氏物語抄』をたびたび引用するということは、注釈書として、『紫明抄』よりも『光源氏物語抄』を重要視していたということを示すものであろう。

4、【資料7】と【資料8】のように『七毫源氏』に引用された『光源氏物語抄』の注記により、現存『光源氏物語抄』の本文が、ある程度古態を残すことが判明する。

5、【資料9】から【資料11】までは『七毫源氏』の引用した伊行、定家の説などを含むが、注釈の構成は『光源氏物語抄』とおおよそ一致しているので、これらの注釈はそのまま『光源氏物語抄』から引用したと考えられる。

先述したように、『七毫源氏』は四四巻あるが、稿者が本章において取り上げた注釈は『光源氏物語抄』の引用を中心とした箇所にすぎない。『七毫源氏』をさらに研究していくことで、中世における『源氏物語』古注釈の継承・展開の実態は、いっそう明らかになるであろう。

【注】

（1）池田亀鑑編『源氏物語大成』研究・資料篇（中央公論社、一九五六年一二月）

（2）稲賀敬二「中世源氏物語注釈の一問題――『正和集』から『原中最秘抄』へ――」（『源氏物語の研究　物語流通機構論』笠間書院、一九九三年、初出一九七二年）

（3）堤康夫「『紫明抄』と『異本紫明抄』」（『源氏物語注釈史の基礎的研究』桜楓社、一九九四年）

（4）栗山元子「『光源氏物語抄』編者考」（陣野英則・新美哲彦・横溝博編『平安文学の古注釈と受容』第二集、武蔵野書院、二〇〇九年）

（5）石川一他責任編集『光源氏物語抄』（武蔵野書院、二〇一〇年）の解題（新美哲彦）では「完本はノートルダム清心女子大学本のみ。宮内庁書陵部も完本であったが、関東大震災で第一冊を焼失。現在は第一冊を内閣文庫蔵『紫明抄』より補写している。この二本以外に、実践女子大学山岸文庫、国文学研究資料館初雁文庫、東海大学桃園文庫に、昭和に入ってから書陵部本を転写した新写がある」とされている。

（6）新美哲彦「『光源氏物語抄』から『河海抄』へ――注の継承と流通――」（『文学・語学』第一八六号、二〇〇七年三月）

（7）『光源氏物語抄』の②の内容は充分な説明になっておらず、疑問が残るままの内容な

ので、『紫明抄』の段階でこの項目が削除されたという可能性が考えられよう。

第四部　九曜文庫本『源氏物語抄』の研究

第八章　九曜文庫本『源氏物語抄』の特徴

一、はじめに

早稲田大学図書館蔵九曜文庫本『源氏物語抄』が初めて紹介されたのは、中野幸一氏の資料紹介[1]においてである。当該本の成立した年代、編者、利用者等は全て不明だが、中野氏は当該本が「他に伝存を聞かないものと思われる」と指摘している。この資料紹介では「桐壺」巻が翻刻されていたが、それ以来、当該本は注目されることがなく、先行研究もこの資料紹介のみである。九曜文庫本『源氏物語抄』は、孤本であるものの、他の古注釈にはみられない興味深い点がいくつかあり、中世の『源氏物語』古注釈の利用に関する研究において重要性を有する。本章では、この本の特徴を改めて詳細にとらえてみたい。

二、九曜文庫本『源氏物語抄』という古注釈

当該本の書誌的な情報は、中野氏が「縦十四・八センチ、横二一・二センチの袋綴装横本十冊。表紙は紺表紙で、中央の黄色短冊型題簽に本文と同筆で『源氏物語抄一（～十）』とある。原装原題簽。本文料紙は楮紙」と述べる通りである。大事な点は横本という当該本の形態にある。『源氏物語』注釈書で横本は少ない。稿者が実際に実物を調査したところ、当該本は非常にきれいで、丁寧に作られたものである。さらに、当該本の保存状態はとてもよく、虫食いも少ない。また、当該本は第一冊から十冊まで一筆と判断される。

『源氏物語抄』は各冊とも百丁以上あり、注の項目数は、中野氏によって「すべてで七四四五項にも達する」と指摘された。これは約八五〇〇項目におよぶ『一葉抄』より少な

いが、『弄花抄』よりは多い。

『源氏物語抄』でもう一つ注目したい特徴は、和歌を目立たせている点である。項目見出は、本文の頭に朱で「○」印が付されている。一方、本文が和歌の場合は、「○」印ではなく、「△」印が記されている。さらに、注記内容が引歌であれば、その歌の最初の一文字の横に朱で「引」の漢字が記される（図３５参照）。このような印の使い方は、江戸時代の他の注釈書にもみえる。例えば、図３６の阪本龍門文庫善本『源氏物語紹巴抄』[2]にも、当該本と同様に、「○」、「△」、「引」が記されている（但し、記号の意味は当該本と異なる）。当時ではこのような記号の使い方は珍しくないようだ。『紹巴抄』の著者は連歌師の里村紹巴であるので、『紹巴抄』では和歌を簡単に調べるために、このような記号が使われているのかもしれない。朱の記号の使われ方と当該本の形態から察するならば、当該本は連歌師と何か関係をもつ可能性が考えられるよう。

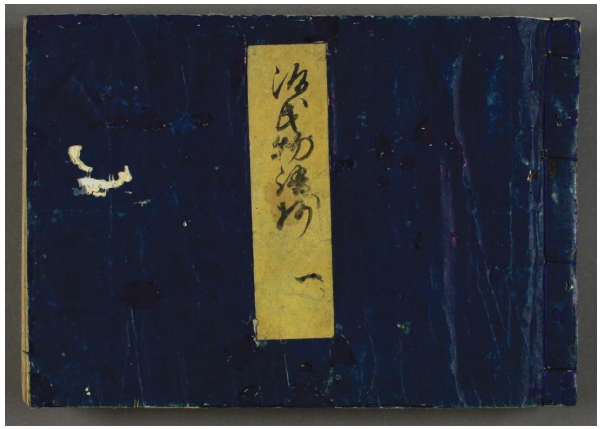

図３４：『源氏物語抄』表紙

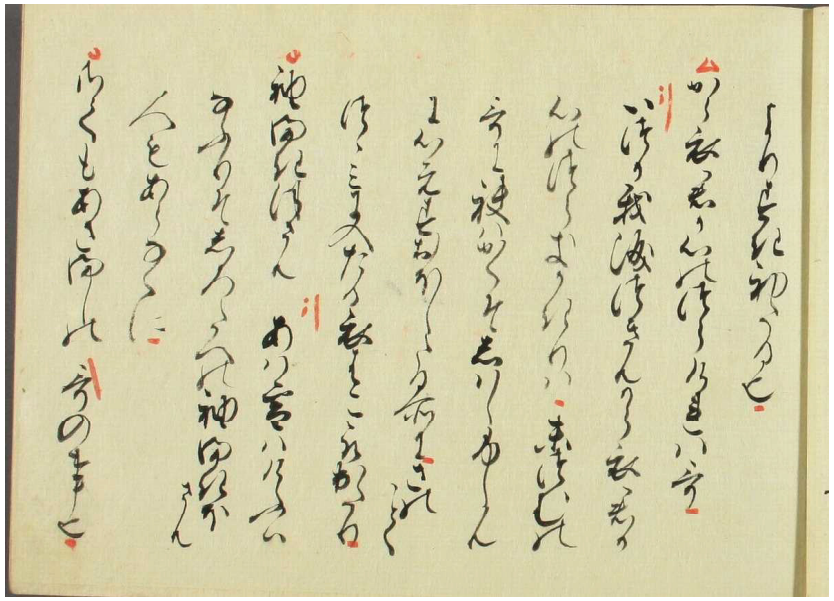

図３５：『源氏物語抄』「帚木」巻

当該本には、登場人物の系図も二項目において示されている。系図の線は朱で、字は墨で書かれている。一つ目は「賢木」巻（第二冊、図３７参照）にあり、もう一つの系図は「早蕨」巻（第八冊、図３８参照）にある。これらの系図は他の注釈書にもみえるので、当該本のオリジナルのものではない。

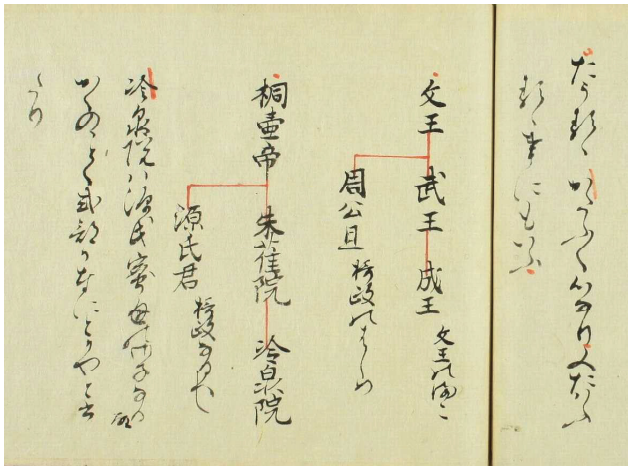

図３７：『源氏物語抄』「賢木」巻

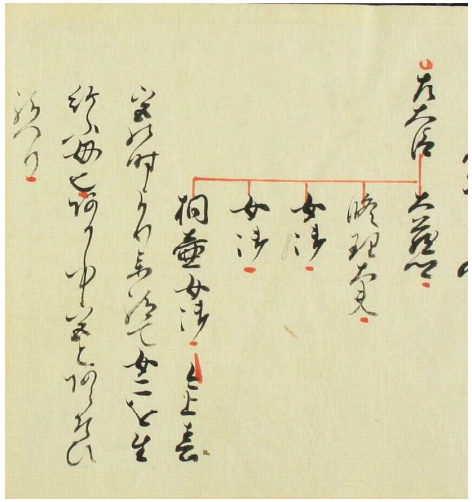

図３８：『源氏物語抄』「早蕨」巻

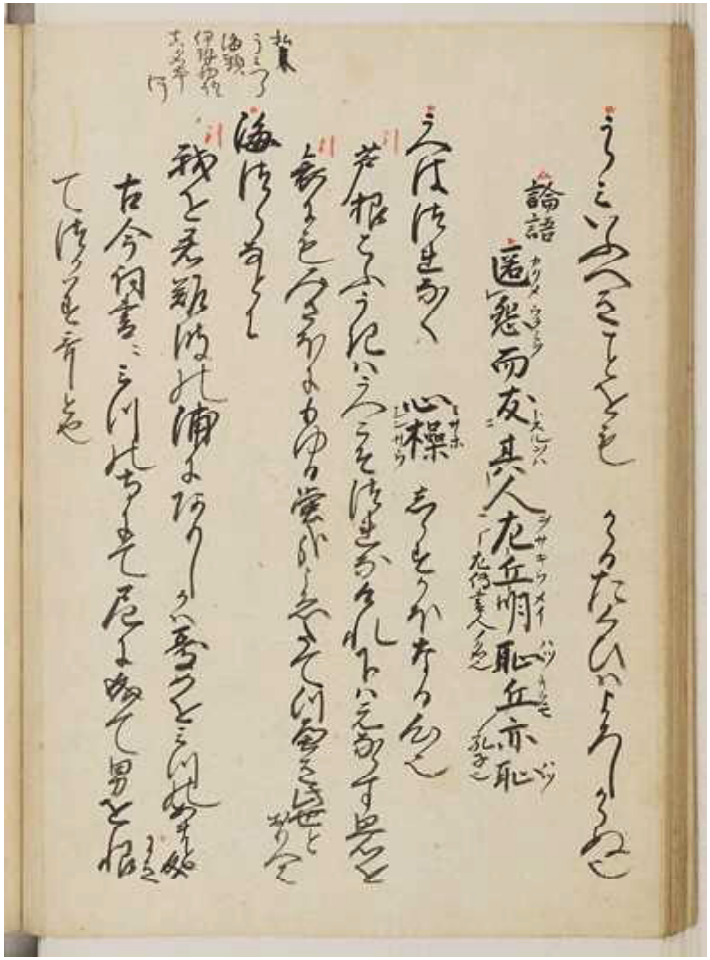

図３６：阪本龍門文庫善本電子画像集

『源氏物語紹巴抄』「帚木」巻

三、成立と編者

『源氏物語抄』の書写年代に関しては、中野氏が「書写年代は江戸初期、ほぼ寛永頃（一六二四～四三）」と推定しており、それで間違いなかろう。

当該本の注釈の典拠は第一冊の四丁裏に記される（図３９参照）。この件については本章の四節で詳しく考察するが、まず、ここに書名があげられる古注釈を確認してみよう。

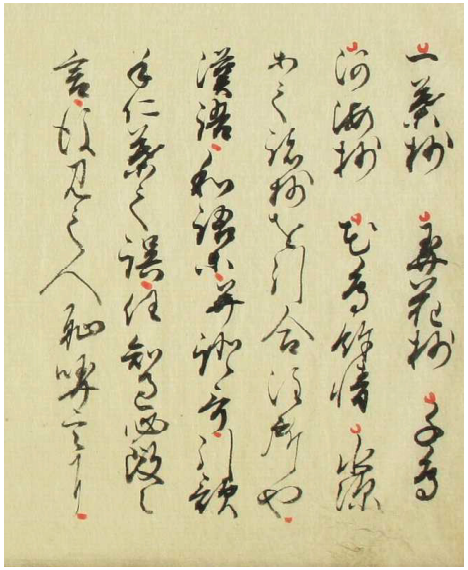

図３９『源氏物語抄』第一冊の四丁裏

○一葉抄○弄花抄○千鳥
○河海抄○花鳥余情○水源
等之諸抄を引合註所也・
漢語・和語等・并證哥・引歌
手仁葉之誤・任知過必改之
言・後見之人恥哢言耳

中野氏は、この点について次のように述べている。

ここには『一葉抄』『弄花抄』『千鳥抄』『河海抄』『花鳥余情』『水源抄』の六種の古注があげられているが、『細流抄』『明星抄』『山下水』『孟津抄』等の三条西家流の有力な注釈書や、室町末期の古注集成『岷江入楚』の名は見えない。

本書が参考に用いたとする右の六種の古注の中では、十五世紀末期成立の『一葉抄』がもっとも新しく、他はいずれもそれ以前の成立と考えられるもので、このことは本書の成立の時期を示唆するものとして看過できない。本書が十六世紀以後の注釈書を参考に用いていないとすれば、あるいは本書の原本の成立は、十六世紀初頭の永正・大永頃に求めてもよいかも知れない。

この情報において興味深いのは、鎌倉将軍に献上した有力な古注釈である『紫明抄』の書名がなく、逆に「水源」の名前がみえる点である。この「水源」は早くに散逸してしまった『水原抄』を指しているのだろう。本論文では、第九章で当該本と『水原抄』の関係

について考察する。なお、結論を示しておくと、当該本と『水原抄』とはあまり関係がないと考えられる。

続いて、当該本の編者について考察する。

『源氏物語抄』において、編者に関わる唯一の情報は、「帚木」巻の冒頭の記述にある。そこには「帚木」巻と「夢浮橋」巻の巻名の説を示したあとに、以下のように書かれる。

右二巻の名先年ある人講釈の終りにひそかにしめされしを中心にこめんよりはと筆者かあさはかなる心にて此たひかきしるし進上候

この点について、中野氏は次のように述べる。

つまりここに筆者が詳述した「帚木」「夢浮橋」の二巻についての解説は、先年ある人が講釈の終りに秘かに示された説であるというのであるが、実はこの説は『一葉抄』に見えるものと全く同一なのである。とすると、ここにいう「ある人」というのは『一葉抄』の著者藤原正存のことではなかろうか。その講釈を聞いた人物ということから、本書の著者も浮かび上がって来る可能性があると思われる。

だが、実は、この説は宗祇の『雨夜談抄』の冒頭にみえる。なお、この説が見られるのは、管見の限りでは『雨夜談抄』、『一葉抄』のみである。『弄花抄』ならびに、『弄花抄』のもととされる肖柏の『源氏聞書』には「夢浮橋の巻も同心也」としか示されていない。

当該本の当該注と、『雨夜談抄』、『一葉抄』とを比較してみよう。

『源氏物語抄』

此巻は序分にあたり侍へし・一部にかうふるへき心あり・其故は此物語作事にてなき事歟とみれは・昔有し事共を面影にしてかけり・たとへは桐壷・朱雀・冷泉院をは・延喜・承平・天暦の御門にかたとり・源氏をは・西宮左大臣に比す・是のみならす所〳〵に物になすらふる事かきりなき物也・又夢浮橋も巻名としたれとも・一部にをよほす名也・此物語に上中下の人もろ〳〵の行跡・みな夢中のたはふれなり・たとへは荘子か夢に胡蝶となり・しらす又胡蝶か荘子と成歟といふかことし・此物語はいにしへの夢そともいひかたく・此世にある人の身をうつゝとも定かたく・共に夢わたりの

うき橋・はゝきゝのありなし（也）・され（は）・作者の筆跡其色ふかく・其心はかりなき物也
・
右二巻の名先年ある人講釈の終りに・ひそかにしめされしを心中にこめんよりはと・
筆者かあさはかなる心にて・此たひかきしるし進上候・

『雨夜談抄』

光源氏名のみこと〳〵しういひけたれ給とかおほかなるにいとゝかゝるすきこととも
をするゑの世にもきゝつたへてかろひたる名をやなかさんと忍ひたまへるかくろへこと
をさへかたりつたへけん人の物いいさかなさよ
此巻を帚木と名つくる事は源氏の君中川のやとりへ方たかへになすらへておはしまし
たりしにうつせみのつれなくしてあひたてまつらすなりしかははゝき木の心をしらて
その原の道にあやなくまとひつるかなと読給ひしに女ふせやにおふる名のうさにある
にもあらすなと返しにたてまつりし歌にてつけたる名なり坂上是則かその原やふせや
におふるはゝき木のありとはみえてあはぬ君かなといへる歌をとれる歌なりうつせみ
かありなからあひたてまつらぬをありとはみれとなき心にみるなり巻の名なれとも此
物語五四帖にをよほす名也其故は此物語はつくり事にてなき事にはあれとも又昔あり
こし事ともをおもかけにしてかけるなりまつこの物かたりの桐壺の御門朱雀院冷泉院
三代は延期喜承天暦のみかとをかたどり光源氏は西宮左大臣高明公の太宰にうつされ
給しをなすらへたりこのほか源氏の君の左遷にはもろこしの周公旦の東征し給し事白
楽天か事我朝には菅丞相野相公在納言のためしをよそへたりこれのみならすところく
に物をなすらふる事かきりなしれは五十四帖はことくくあるものかとみれはなくなき
物かとすれはある物なれは此はゝき木一部の名になる物なり　天台四門をたつる中に
も赤有赤空門このものかたりにあたれり夢のうき橋の巻もその一巻の名といへとも五
十四帖の名になる物なりいかんとなれは此物語に上中下の人々もろくの行跡みな夢の
うちのたはふれなりたとへは荘子か夢に胡蝶となりしらす又胡蝶か荘子となるかとい
ふかことし此物語はいにしへの夢そともいひかたく此世にあるわれ人の今の身のうつ
ゝともさためかたくともに夢のわたりのうきはしははゝき木のありなしなりされはむ
らさきしきふの筆の跡その色ふかくその心はかりなき物なりさて此巻のはしめに光源

氏といふよりかた野の少将にはわらはれたまひけんかしといふまてはものかたりの作者のこと葉也これのみならす紫式部のこと葉ところ〳〵おほかるへし名のみことごとしくとは光源氏といふ名はいかめしうとほめたる心なりいひけたれ給ふとかおほかるとは世のその名たかくみちのほまれある人をも世上にいひけつならひなりかゝるすきことゝもをすゑの世にもきゝつたへてかろひたる名をやなかさんとしのひたまひけるかくろへことをさへかたりつたへけん人の物いひさかなさよとは源氏の君は好色の人なからおもては実を本として下にはいろこのむこゝろまし〳〵たるなり　さるにより て世にしのひたまふ事を誰かかたりつたへけんと紫式部かいふ也さるは世をはゝかりまめたち給ふけるほとなよひかにをかしき事はなくてかた野の少将にはわらわれたまひけんかしとは下の心は好色にして上に実をたつるゆへになよひたる所のなきを好色の本意にはあらすとかた野の少将はわらはむと藤式部か思ひてかけるなり片野の少将の事色々の儀侍れと作物語にかたのの少将といふあり　その人かきりなき色このみなりき光源氏とかたのの少将とおなし時代にはあらぬとも紫式部とりあはせかくいへるなり作物語の人にてつくり物語の人に対する事おもしろくかける物なりこゝまては此一巻の序文也

『一葉抄』

此巻は以哥為名源氏君十六歳夏事也此巻ハ序文にあたるへし一部にかうふるへき心ありと云々凡箒木といふ名ハ一部大意に相当せり其故ハ此物語作事にてなき事かと見れハ又昔ありこしこととともを面かけにしてかける也たとへハ桐壺朱雀冷泉院をハ延喜承平天暦のみかとにかたとり源氏をハ西宮左大臣に比すこれのミならす所々に物をなすらふる事かきりなき物也又夢のうきはしも一巻の名とハいへとも一部にをよほす名也此物語に上中下の人もろ〳〵の行跡みな夢のうちのたハふれ也たとへハ荘子か夢に胡蝶となりしらす又胡蝶荘子となるかといふかことし此物語ハいにしへの夢そともいひかたく此世にある人の今の身をうつゝとも定かたくともに夢のわたりのうきはしはゝき木のありなし也されハ作者の筆跡其色ふかく其心ハかりなき物也云々

以上のように、若干異同があるのだが、『源氏物語抄』が引用した注記は『一葉抄』のほ

うに類似している。しかし、当該本は宗祇の『雨夜談抄』と全く関係がないとは考えにくい。なぜならば、第一冊の四丁裏にはその名が示されないものの、当該本の「帚木」巻には宗祇の『雨夜談抄』の注釈が多く引用されているからである。当該本と『雨夜談抄』との関係については改めて第九章で考察する。

四、注釈の由来とその性格

先述したように、当該本は六つの注釈書から説を引用したことを、編者自身が明記している。しかし、「桐壺」、「帚木」巻の注記に引用された説は五つの注釈書（水源抄を除く）に限られているわけではない。

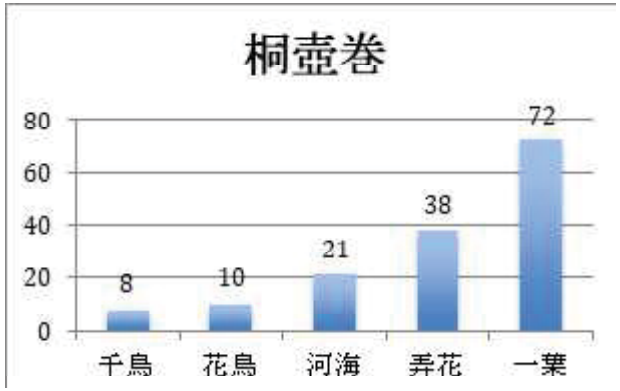

図４０：『源氏物語抄』「桐壺」巻の注釈

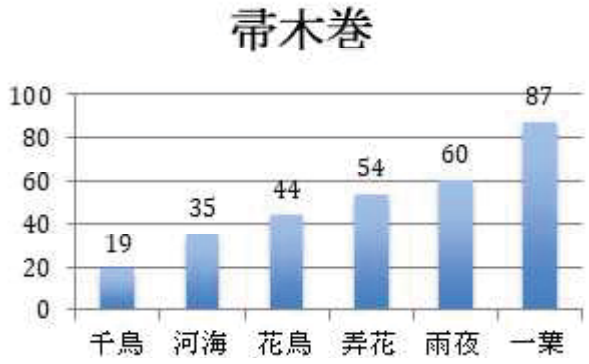

図４１：『源氏物語抄』「帚木」巻の注釈

図４０・図４１のように、『源氏物語抄』の「桐壺」「帚木」の両巻は『一葉抄』の説が最も多く引用される。[3] 但し、図４１のように、「帚木」巻では『雨夜談抄』から多くを引用している。『雨夜談抄』あるいは『帚木別注』の書名は第一冊の四丁裏に挙げられていないが、当該本では、『帚木別注』の名前は「帚木」巻の「ねたます」の項目にみえる。さらに、『一葉抄』が多く引用されていても、「一葉　ねたますと云詞心得かたきにや」[4]と、『一葉抄』の説を批判する内容もこの項目にある。

○ねたます　ねたみいふ心なり・跡もなけれといふもねたむ心ありて云事也・哥に此心みえたり・つれなき人をなとよめりねたまぬといふ説(セツ)あり・曲(キヨク)もなかるへし・是は弄花の説(セツ)也・男のとはぬ事をかくいひて女にねたまする也・是は花鳥の説説(ママ)也・上(ウヘ)人此女を右馬頭か妻としらねとも・いかさまにも此女に人のかよふと聞ていふ義也・心は本哥のことくふみわけたる給もなけれと・我こそたつねはへれとねたみいふ也・したの心(哥)の心もつれなき人を引とめと云てねたむ心也・ねたますはねたましくす也・花鳥にはかくいひて女にねたまする(＝)と云云・一葉　ねたますと云詞心得かたきにや・ふみ分たる跡あらんこそ誰をかよはしつらんねたむ心も侍へけれ・跡もなきをねたむ心は哥にて聞え侍り・惣(ソウ)して此女の所へ別(ヘチ)にかよふ人ありと・此上人聞ていへる義也・心はことの年も月もたくひなき御宿なから・御ためつれなき人をはえやはひきとくめ給へる・かゝる折ふしも我とて紅葉をふみ分てみはやし奉れと云心なれは・ねたますと云義聞え給るにや・又別注に前の哥の心はへちにかよふ男を上人しりて・難面人をひきやとめけるとよめるを・女は其かよふ人の事をは何ともいはて・難面き人といふを・今の上人にして読る也・此上人をひきとむへきことの葉なしと・琴を立入てよめる也・

このように、『源氏物語抄』における他の注釈書の引用は、編者の「等之諸抄を引合註所也」と示した通り、六つの注釈書に限らず、「帚木」巻の『雨夜談抄』のからの引用があるほか、一条兼良の『源氏和秘抄』と似たような注記も以下に五例挙げるごとく、多数ある。

【例】

「桐壺」巻

①『**源氏物語抄**』○きひはなる　／稚(キビハ)　いときなき也・

『**源氏和秘抄**』きひはなる　いときなきなり

②『**源氏物語抄**』○あけをとり　／わらはにてうつくしき人の元服して悪きを云・

『源氏和秘抄』あけをとり　わらはにてよき人のけむふくしてわろくなるを云

「帚木」巻

③『源氏物語抄』○かろひたる　＼軽（カロ）〳〵しき也・

『源氏和秘抄』かろひたる　かろ〳〵しきなり

④『源氏物語抄』○さうしみは　＼正身（サウジミ）・本人と云心也・

『源氏和秘抄』さうしみ　ほん人と云心也

「葵」巻

⑤『源氏物語抄』○おはおとゝ　＼源内侍か年よりたるをいふ・

『源氏和秘抄』おはおとゝのうへ　源内侍の年よりたるをいふ

ここでは五例だけをあげるが、『源氏和秘抄』も参考にしたことは明らかだろう。

当該本の注釈の性格をみてみると、個々の注釈は極めて短めなものが多いが、その記し方の特徴は次のA～Dのようにまとめられる。

A、編者は他の注釈書の長い注記内容を部分的に選択して記入することが多い。例えば、次の例のように、編者は『花鳥余情』の傍線部分のみ当該本に記入している。

【例】「葵」巻

『源氏物語抄』○あさかほの姫君　＼源氏につゐになひき給はぬ人也・

『花鳥余情』　あさかほのひめ君　源氏の君につゐになひき給はぬ人なり　さるか（ナシ）から又はしたなくなとはあらぬ御もてなしを人にはことなると源氏の君もほめ給へる也

B、編者は基本的に引用した注釈書名を示さない。示す場合もあるが、非常に少ない。示している例

としては、先述した「帚木」巻の「ねたます」の項目の「別注」がある。

C、注記を引用した際、最後に別の内容や、編者の意見が追加されることもある。

【例】『源氏物語抄』「葵」巻

○ふたゝひの御はらへ　＼斎宮諸司に入給はんとても東河にて御はらへの事あり

・是を二度のはらへといへり・群行の時西川くろ木のとり井をかはらにたてゝ御そきありて・五穀を大神宮へ御くうしある也・

この注記の前半は『一葉抄』および『弄花抄』の説と同一だが、傍線を引いている文章は当該本の独自の内容である。このように、注記の最後に内容が追加される場合がある。

D、編者は、一つの項目に対して、二種類以上の注釈書を参考にし、内容を一つにまとめて記す場合が少なくない。

【例】『源氏物語抄』「帚木」巻

○しのふのみたれやとうたかひ ＼上の詞に内にのみさふらひようし給とあれは・葵上かたの人我かたさまへはうとくおはしませは・内にて是かれに御心みたるゝにやとうたかふ也　春日のゝわか紫のすり衣忍ふの乱かきりしられす・

この項目の内容の前半、傍線を引いていない部分は『雨夜談抄』から引用されているが、『雨夜談抄』には傍線部の引歌がみえない。この引歌は『花鳥余情』、『一葉抄』、『弄花抄』、『千鳥抄』にはないが、『河海抄』と一致しているので、『河海抄』から引用されていると考えられる。ちなみに、この引歌は『奥入』と『紫明抄』にもみられる。

五、『源氏物語抄』において反復される注釈

最後に、当該本の特徴の一つとして、幾度も反復される表現が三種類みられる。それは①「～とよむへし」、②「聞えたるまゝ也」、③「明か也」である。

①「～とよむへし」

「～とよむへし」という注記はどの巻にもみえる。「とよむへし」は物語を音読する際に役立つ注記ではないだろうか。次に、「桐壺」巻、「帚木」巻、「葵」巻からみいだされた「～とよむへし」の注釈を列記してみる。これらの注釈から、編者が言葉の読み方を重視していることがわかる。

・「桐壺」巻

○後涼殿に　／こうらうとも・こうりやうともよむへし・

○五六日　／いつかむいかとよむへし・

○世人も　／のもし入てよむへしいつくにても如レ斯

○おはします殿　／おはしますおとゝとよむへし・

○くはさの御座　／くはんしやとよむへし・

○みつらゆひ給へる　／みんつらとよむへし

・「帚木」巻

○とりおほかなるに　／おほかんなるにとよむへし・

○なよひか　／ひもし清てよむへし・麗（ナヨヒ）いかにもよはらかなる躰なり・一禅の御説には・ひもしすみても濁てもよむへしとあり・

・「葵」巻

○いとましからぬかさしあらそひかな　／源氏の御心也・源内侍の哥よみかはしなとするはえんならぬあらそひと思へ共・たとひえんなる人のをとつれなり共紫上とあひのり給へははかなき御いらへも有へからす・ましておもなき内侍なれは心やすくもいらへ給はぬと云心也・おもなからぬ人はたとよみきりて人とあ

ひのりとよむへし・

②「聞えたるまゝ也」、「聞えたる分也」、「聞えたり」

『源氏物語抄』の特徴の一つとして朱の記号があることについて前述した。本文が和歌であれば、その項目の頭部に朱で「△」が付けられる。従って、当該本の項目をみると、どれが和歌の項目なのかが一目でわかる。これは歌を特に極立たせる方法の一つだと思われる。

ところで、朱の「△」印の項目にはたびたび繰り返される独自の注釈がある。それは「聞えたる分也」、「聞えたり」、「聞えたるまま也」である。すべての和歌に、このように記入されている訳ではない。しかし、例えば「葵」巻では和歌の二二項目のうち、十七項目に「聞えたる分也」、「聞えたり」、「聞えたるまま也」の注記がある。これらの注記の意味は不明だが、「歌の言葉通りの意味」か「難しい解釈はいらない」、ということであろう。当該本だけを注釈書として利用すると、大半の和歌の意味はよくわからないままとなる。興味深いのは「帚木」巻で、「聞えたる分なり」が一項目みいだされるのみである。代わりに、後に③でとりあげる「心明か也」は、「帚木」巻にしかみえないのである。以下に整理してみる。

・「聞えたるまゝ也」

【例】「桐壺」巻

△すゝ虫のこゑのかきりを哥　／聞えたるまゝ也　みな涙の事也・

△いとゝしく虫のねしけき哥　／聞えたるまゝ也・

△雲の上も涙くるゝ哥　／聞えたるまゝ也

【例】「帚木」巻

△手をおりてあひみし哥　／聞えたるまゝ也

・「聞えたる分也」

【例】「葵」巻

△あさみにや人はおりたつ哥　＼聞えたる分也・みつから参りて御返事申さぬおほろけならぬはさりかたき折ふしなれは也・
△のほりぬるけふりは哥　＼聞えたる分也
△人の世をあはれと聞も哥　＼聞えたる分也・
△あめとなりしくるゝ哥　＼聞えたる分也・
△みし人の雨と成にし哥　＼聞えたる分也・
△草かれのまかきに哥　＼聞えたる分也・
△今もみて中〳〵哥　＼聞えたる分也・
△わきて此暮こそ哥　＼聞えたる分也・
△秋霧に立をくれぬと哥　＼聞えたる分也
△あやなくもへたてけるかな哥　＼にい枕の哥聞えたる分也・
△あたらしき年ともいはす哥　＼聞えたる分也・

・「聞えたり」

【例】「葵」巻

△なき玉そいとゝかなしき哥　＼聞えたり・
△君なくてちりつもりぬる哥　＼聞えたり・

③「明也」、「心明か也」

「明也」あるいは「心明か也」の注記が「帚木」巻の和歌のみにみえる。この巻には「聞えたるまゝ也」も「明也」も使われている。おそらくニュアンス的には、「言葉通りの意味」という「聞こえたるまゝ也」と、「和歌の本意は明らかである」という「心明らか也」で、差はあると思うが、そこまで使い分けられているのだろうかまだ不明である。

【例】「帚木」巻

△うきふしを心ひとつに哥　＼明也
△木からしに吹あはすめき哥　＼是は男（女）のよめる哥也明か也
△あふ事のよをしへたてぬ哥　＼心明か也

△身のうさをなけくにあかて哥　／心明か也・是とりにたねてを鳥にそへたり・

六、終わりに

以上みてきたように、九曜文庫本『源氏物語抄』は他の伝本が存在しないだけではなく、編者、利用者、書写年代等々も不明であるが、さまざまな興味深い点がある。

まず、当該本は多くの『源氏物語』古注釈書の写本の形態と異なり、横本の形態である。さらに、当該本に使われる朱の記号により、和歌を特に極立たせようとしていることがわかった。このような記号の使い方は、例えば阪本龍門文庫善本『紹巴抄』にもみえるので、横本であることに合わせて、編者は連歌師と何らかの関係もつ可能性があるのではないかと考えられる。

当該本の注釈の引用書は第一冊に『一葉抄』『弄花抄』『千鳥抄』『河海抄』『花鳥余情』『水原抄』と示されるが、他に『雨夜談抄』と『源氏和秘抄』も引用されていることが確認できた。

続いて、当該本の注記の記し方について四つの特徴を指摘した。

A、編者は他の注釈書の長い注記内容を部分的に選択して記入することが多い。

B、編者は基本的に引用した注釈書名を示さない。

C、注記内容が他の注釈書と一致している場合でも、最後に別の内容や、編者の意見が追加されることもある。

D、編者は、一つの項目に対して、二種類以上の古注釈を参考にし、内容を一つにまとめて記す場合が少なくない。

最後に、当該本にはたびたび反復される表現として、①「〜とよむへし」、②「聞えたるまゝ也」、③「心明か也」の三種類があることも指摘した。

『源氏物語抄』は『一葉抄』の引用などからも、その講筵に連なった連歌師の関わりが想定でき、『源氏物語』の注釈書が伝播していく過程の書物として、非常に興味深い古注釈である。

【注】

（1）中野幸一「近世初期写『源氏物語抄』」（『源氏物語の享受資料―調査と発掘』武蔵野書院、一九九九年）

（2）『源氏物語紹巴抄』の画像は、「http://mahoroba.lib.nara-wu.ac.jp/y05/shahon-r.html」で確認できる。この『紹巴抄』は文禄四年写で、『源氏物語抄』と似たような朱の記号の使い方は「桐壺」巻、「帚木」巻、「空蝉」巻のみにみられる。

（3）『一葉抄』と『弄花抄』の注記は同一と見られるものが多く、どちらから引用されたのか判断しにくい場合がある。しかし、『源氏物語抄』では『一葉抄』のほうを圧倒的に多く引用しているので、当該本が『一葉抄』を最も多く引用したことは動かないのである。あまりよい数え方ではないが、同一の注記の場合、稿者は『一葉抄』、『弄花抄』とも両方を数える。

（4）『細流抄』では『源氏物語抄』と似たような批判をしている。

庭のもみち　秋はきぬ紅葉はやとにの哥にてかけりねたますと云詞心得かたき歟ふみ分たる跡のあらんこそたれかかよひつらんとねたむ理なるへけれともこれはこの女の所へ別の人のかよふときゝていへる也かよふ人はありともかやうの紅葉なとをも我こそ尋まいりて見はやし侍れとなり此心にてねたますの心きこえたり

第九章　九曜文庫本『源氏物語抄』と中世の『源氏物語』古注釈

――『水原抄』と『雨夜談抄』を中心に――

一、はじめに

第八章で述べたように、九曜文庫本『源氏物語抄』の先行研究は中野幸一氏の資料紹介(1)のみである。当該本は全十冊で、一冊に百丁以上もある膨大な古注釈書である。現在の調査は「桐壺」巻、「帚木」巻　そして「葵」巻のみである。しかし、一部の調査であっても、考察の可能な問題がある。それは、当該本の編者が実際に『水原抄』を参考にし、注釈をつけたのかという問題と、「帚木」巻に多く引用された『雨夜談抄』はどのように引用されているのかという点である。本章ではこの二つの問題を論じたい。まず、『水原抄』との関係から考察するが、その内容に入る前に、二節では『水原抄』が引用されている『源氏物語』古注釈書を簡単にまとめる。

二、『水原抄』を引用した『源氏物語』古注釈

『水原抄』は早くに散逸したため、その内容は、他の古注釈が引用した逸文によってしか確認することができない。稿者の調査では、『光源氏物語抄』には『水原抄』という書名がみられないものの、「光行」、「親行」の説あわせて四三項目ある。次に『紫明抄』の場合、京大本では『水原抄』の書名がみられないが、東大本系統（内閣文庫十冊本など）には第六冊の巻末に、仏教に関する『水原抄』の注釈抄出の一覧がある。また、『河海抄』には引用が最も多くあり、『水原抄』の書名がみえる項目は約六〇もある。そして、『仙

源抄』には一〇項目ある。『花鳥余情』には九項目があるが、その大半は『河海抄』から引用した注記の中にある。『弄花抄』には三項目あり、それらはすべて『花鳥余情』から引用したものである。

このように、『水原抄』の逸文は基本的に時代と共に減りつつある。どの時代に散逸してしまったのか、確定はできないが、引用された逸文の項目数から推測するならば、『花鳥余情』の時代前後といえるだろう。その後、三条西家流の注釈書、すなわち『細流抄』『明星抄』『孟津抄』などには『水原抄』の名前が見えない。三条西実隆の日記『実隆公記』[2]には、注釈書名が多数出てくるが、興味深いのは『原中最秘抄』が六度みられるにもかかわらず、『水原抄』は一度も見当たらない点である。これによって、実隆の時代には『水原抄』は確実に散逸してしまっていると推測されよう。

他に『水原抄』を引用したと記している古注釈としては、例えば、長享二年（一四九〇年）に抄出した『紫塵残幽』がある。『紫塵残幽』の編者は不明だが、宗祇を想定する説がある。[3] 伊井春樹氏[4]は『水原抄』の名がみえる点について、次のように述べている。

『紫塵残幽』は『紫明抄』、『河海抄』、『水原抄』、『花鳥余情』の内容を引用したといわれた。しかし、この注釈書にある『水原抄』は二ヶ所しか確認できなく、さらに両方とも『河海抄』から引用した『水原抄』であるとのことである。従って、『紫塵残幽』が『水原抄』を実際に使用したかどうかは明確ではない。『水原抄』という注釈書は有名であるので、多くの著者は『水原抄』という名前を自分の注釈書に入れたがっているようにみえる。

池田亀鑑氏[5]によると、『水原抄』を引用したと記している後代の注釈書はもう一つある。それは元禄十六年（一七〇三年）に成立した安藤為章の『紫家七論』である。『紫家七論』には「むかし竹園に侍りし時、此ものがたりをこのみて（中略）水源・河海・岷江などの諸抄に心をつくし侍りぬ」とあり、「水源」という書名がみられる。

但し、これは本当であろうか。『花鳥余情』成立の文明四年（一四七二年）から元禄十六年までは二三一年もの差があり、その間に『細流抄』『孟津抄』『萬水一露』『岷江入楚』『湖月抄』など、有力な注釈書が多くあるにもかかわらず、『水原抄』の逸文は見当たらない。池田氏はこの件について、「いくら贔負目にみてもでたらめである」と結論づけた。[6] この二例から考えてみると、『一葉抄』、『弄花抄』以降の成立である『源氏物語抄』の場合も、

「水源」という名前を記しただけなのではないだろうか。『源氏物語抄』の場合、『水原抄』という書名がみえるのは全十冊の中に、三項目ある。それらの項目はいずれも『花鳥余情』にもあるので、『花鳥余情』から引用したと考えられる。このような事情で、『源氏物語抄』の第一冊の四丁裏に「水源」という名前だけをあげていると結論づけられよう。だが、当該本には興味深い内容が「帚木」巻に一項目ある。それは『水原抄』とは書かれないものの、「河内守」の名前がみえる項目である。

三、『源氏物語抄』にみえる「河内守」

『源氏物語抄』には、「河内守」の名前のみえる項目が二つある。河内守は『水原抄』の著者、源光行もしくは親行であろうと考えられるが、実際に注釈内容から判断するに、その判断は妥当と思われる。まず、最初に「河内守」がみえる「桐壺」巻の内容をみてみよう。比較のため、あわせて『河海抄』『花鳥余情』『一葉抄』『弄花抄』の注記も示す。

【資料1】

『源氏物語抄』「桐壺」巻

○ 太液の芙蓉未央の柳　／芙蓉は面のことく・未央は眉のことしと長恨歌にくはし・河内守か本に・柳の一句をのそきて・をみなへしの風になひきなてしこの露にぬれたるとあり・其心は・若菜巻に・女三宮を柳にたとへたり・しかれは柳に人をたとへたる事二所なれは・こゝにてのそくとみえたり・

『河海抄』「桐壺」巻

たいえきのふようひやうのやなきにも

大液(奥入)芙蓉未央柳対此如何涙不堕(長恨歌)

俊成卿本に未央柳の一句をみせけちにしけり是は行成卿自筆本の様云々

親行云六条院の女楽に女三宮を二月はかりの青柳にたとへたり人の貞を柳にたとへたる事一部の内に両所あり無念なるに似たり然而芙蓉柳是又いつれも除かたきによりて

書なからみせけちにしたる歌云々

『花鳥余情』「桐壺」巻

ゑにかけるやうきひのかたちはいみしきゑしといへともふてかきり有けれはいとにほひすくなし大えきのふようひやうの柳もけにかよひたりしかたち色あひからめいたりけんよそひはうるはしうけうらにこそはありけめ

行能自筆の親行か本にはひやうの柳の一句をのそきたりはしめはみせけちにしたれとものちには一かうに略したるにや為相卿の本には未央柳の詞あり絵にかけるやうきひのかたちとは長恨歌の絵につきていへる也けふらはきよらおなし心也五音相通故也

『一葉抄』「桐壺」巻

大液の芙蓉未央の柳も　芙蓉如面柳如眉長恨歌に云る心也大液池の名也芙蓉蓮花也未央宮名也河内守か本にハ未央柳一句をのそきてをミなへしの風になひきなてしこの露にぬれたるといふ詞あり花鳥にくハし

『弄花抄』「桐壺」巻

大液のふよう未央の柳　見花鳥未央柳青表紙には有子細不能注也

この【資料1】でみられるように、「桐壺」巻の「河内守」は、『花鳥余情』では親行のことを指している。注釈内容も同じなので、『源氏物語抄』の「河内守」は源親行のことであるとわかった。なお、これらの注釈はいずれも『紫明抄』からの影響を受けている。当該本の注釈内容は『一葉抄』と最も一致しているので、『一葉抄』から引用したとも考えられる。「若菜」巻の女三宮の説は『河海抄』にも指摘があるので、新しい説というわけではない。この「河内守か本」は河内本『源氏物語』を指しているのであろう。

続いて、「帚木」巻にある「河内守」をみてみよう。

【資料２】

『源氏物語抄』「帚木」巻

○いたくつなひきて　／女は右馬頭きたらはさこそ打なひきぬるを・なを女をこらさんと思ひてわさとよりつかぬ儀也　引よせはたゝにはよらて春こまのつなひきするそなはたつときくと云哥にてかける也・たはふれにくゝとは・ありやと心みかてらあひみねはたはふれにくきまてそこひしきの哥の心也・あはんと思へと女の心をこらさんとしたるは・たはふれたる心也・妬記ニ曰・女おっとつのあしにつなをつけて外へつかはす・ある時其綱五十ウをひつしに付てをく・女住吉しうらなふ・はかせの云・あまりねたみふかきによりておつとはうせて羊に化すいふ・時になけく・はかせの云・ねたみをやめは本夫来るへしと云・さま〳〵せはしておとつと来れると云事あり・河内守の末抄にみえたり・

この注釈のうち、傍線を引いていないところは『雨夜談抄』から引用した説である。一方、破線を引いている部分は若干異同があるが、『千鳥抄』とおおよそ一致するので『千鳥抄』から引用したとみてよいだろう。しかし、最後の「河内守の末抄にみえたり」という部分は、どの古注釈にも見当たらない独自の情報である。これについて考察するために、まず『河海抄』の注釈内容をみてみよう。

『河海抄』「帚木」巻

つなひきてみせしかは

引よせはたゝにはよらて春駒のつなひきするそなはたつと聞

此哥心不叶つなひくは嫉妬の心也　秘説あり

『河海抄』には、『源氏釈』と『奥入』も引用する『拾遺抄』の平貞文の和歌がみられるが、ここで重要なのは『河海抄』の注釈の最後にみえる「秘説あり」という文言である。『河海抄』の秘説として、検討しなければならない注釈書は『珊瑚秘抄』である。『珊瑚秘抄』

について伊井氏は次のように述べる。[7]

（稿者注：『珊瑚秘抄』の）奥書によると、善成は足利義詮の求めによって貞治年間（一三六二～一三六七）の初めのころ、『河海抄』二十巻を選献したという。これは、保行素寂法師が将軍久明親王の下問によって『紫明抄』を選進したのにならったとしており、ここから素寂の俗名は保行であったことも知られてくる。『河海抄』は、師の忠守が「七流の底をきはめ」諸説を承けたとし、いわば秘説集成の立場にあるが、さらに最秘の説が存在したようで『河海抄』には「秘説あり」のことばが散見する。その秘説だけを、別冊にまとめたのが『珊瑚秘抄』となったのだといえよう。

『珊瑚秘抄』は全三二項目あるが、『河海抄』に「秘説」と指摘があるのは二〇項目のみである。ちなみに、『源氏物語抄』が引用したこの説は、『珊瑚秘抄』と『千鳥抄』に引用されている。『珊瑚秘抄』と『千鳥抄』のそれぞれについて、この「帚木」巻の「つなひきて」の注釈内容をみてみよう。

『珊瑚秘抄』「帚木」巻

つなひきて

妬記曰京邑有士人婦大妬忌於夫少則詈罵大赤捶打常以長綱繫脚且喚便牽綱士人依墻走避婦覚牽綱而羊至大驚怪召問巫々曰阿嬢積惡先人怪責故郎君變成羊君能改悔乃可祈講嫗乃七日斎聟還復本形復妬忌聟因伏地作羊鳴婦驚起呼先人爲誓於此不後妬忌

つなひきてとは女の物ねたみたる心也物語の面にも共由みえたり奥入にひきよせはたたにはよらて春駒のつなひきするそなはたつときくといふ歌を載たるは此心にかなはさるにや此故事を云也

『千鳥抄』「帚木」巻

つなひきて　妬領に云。嫉妬の女男の足に綱を付て外へ遣。或時此綱を引時羊に付て来。女仰天して占とき。博士云。あまりに嫉妬ふかきによりて。夫は失て羊来れりと云時愁歎す。其時博士向後嫉妬の心をやめば可来之由申時。様々誓言する時。夫来て。此謂云々。

この『珊瑚秘抄』の注釈内容から確認されるように、注釈の前半の漢文の内容は、【資料2】の『源氏物語抄』の破線部と同じ内容といえるが、興味深いのは、この内容が『千鳥抄』のほうに一致している点である。岩坪健氏によると、『千鳥抄』は次のような注釈書である。[8]

『源氏物語千鳥抄』とは四辻善成が、至徳三年（一三八六）七月から嘉慶二年（一三八八）十一月にかけて行った源氏物語全巻の講義を、平井相助が記録した聞き書きである。

『珊瑚秘抄』の三二項目は、そのすべてが『千鳥抄』にあるわけではないことが確認できる。つまり、『河海抄』の編者である四辻善成は、すべての秘説を平井相助に教えたわけではないともいえよう。これは善成と相助、両者の関係にかかわる問題である。

稿者が『源氏物語抄』と『珊瑚秘抄』の注釈内容を調査したところ、同じ説を示している項目は、この「帚木」巻の内容のみである。つまり、『源氏物語抄』には『珊瑚秘抄』の他の説が全くみられないのである。一方、『千鳥抄』説はいくつかみられるので、『源氏物語抄』の「帚木」巻の「つなひきて」の説は、『珊瑚秘抄』から直接引用したのではなく、『千鳥抄』経由で引用された可能性が高いと結論づけられる。

残された課題は、『源氏物語抄』の「帚木」巻の項目にある「河内守の末抄にみえたり」が『水原抄』のことを指しているかという点である。先述したように、『水原抄』の逸文は時代と共に数が減少していく。三条西実隆の時代には『水原抄』の逸文が見当たらないのであり、さらに、『源氏物語抄』において『水原抄』の名前がみえる項目のすべては『花鳥余情』から引用したものばかりなので、当該本の注釈内容と成立が想定される時代から考えてみると、『源氏物語抄』の編者が実際に『水原抄』を参照したことは考えにくいのである。『源氏物語抄』の編者が四辻善成の『珊瑚秘抄』と『水原抄』のことを取り違えたということがありうるだろうか。

四、『源氏物語抄』の「帚木」巻

稿者の調査によると、『源氏物語抄』「桐壺」巻の注釈では『一葉抄』の説が最も多く引用され、その次に、『弄花抄』の説が多く引用されている。「葵」巻も同様であるが、

注目したいのは「帚木」巻の場合である。当該本の「帚木」巻に『雨夜談抄』の説が多数引用されている。『雨夜談抄』は飯尾宗祇による古注釈である。内容は、「帚木」巻の雨夜の品定めの段の詳細な注釈であり、『帚木別注』とも称される。『雨夜談抄』の奥書によると、文明十七年（一四八五年）に成立している。引用された『雨夜談抄』についての考察に入る前に、当該本の「帚木」巻の注釈がどのような割合で『雨夜談抄』と他の古注釈を引用しているのかをみてみよう。

まず、『水原抄』を除き、第一冊の四丁裏に示されている各注釈書、及び『雨夜談抄』、『源氏物語抄』の項目数を多いほうから並べてみると、次のAのような順番になる。

A、各注釈書の「帚木」巻の項目数

①『一葉抄』　三七五　項目
②『源氏物語抄』二八六　項目
③『河海抄』　二〇七　項目
④『花鳥余情』　一八六　項目
⑤『弄花抄』　一七三　項目
⑥『雨夜談抄』　一一五　項目
⑦『千鳥抄』　九二　項目

右のように、『一葉抄』の項目数が最も多くある。次いで、これらの個々の注釈の中で『源氏物語抄』が引用した項目を数えてみると、次のBのようになる。なお、『源氏物語抄』の編者は基本的に引用した内容の出典を示さないので、Bの数値は概数である。『一葉抄』と『弄花抄』の内容はほぼ一致する場合がある。そのため、いずれか一つにしぼれない場合は両書ともに引用項目として数えることにした。

B、『源氏物語抄』が引用した内容の項目数

①『一葉抄』　八七　項目
②『雨夜談抄』六〇　項目
③『弄花抄』　五四　項目

④『花鳥余情』四四　項目
⑤『河海抄』　三五　項目
⑥『千鳥抄』　一九　項目

このように、『源氏物語抄』の「帚木」巻の注釈の場合も、「桐壺」などと同様に『一葉抄』が最も引用されているようにみえるが、『一葉抄』の項目数は元々多いので、引用された項目も多くなる傾向があろう。そこで、引用のパーセンテージでみてみると、次のようになる。

＊（B／A）×100＝引用された割合

①『雨夜談抄』……52.1%
②『弄花抄』……31.2%
③『花鳥余情』……23.6%
④『一葉抄』……23.2%
⑤『千鳥抄』……20.6%
⑥『河海抄』……16.9%

『雨夜談抄』の引用される頻度は突出して高い。一方、『一葉抄』は『花鳥余情』の次となる。『源氏物語抄』の編者は、第一冊の四丁裏に書名を示していないものの、「帚木」巻では『雨夜談抄』の項目の半数以上を引用している。これは、当該本の編者の『雨夜談抄』の内容に対する信頼の高さを表していると考えられる。次節では引用された『雨夜談抄』の説について考察する。

五、「帚木」巻にみえる『雨夜談抄』の注釈

最後に、『源氏物語抄』では『雨夜談抄』がどのように引用されているのかを確かめる

ため、具体的に三例をあげて検討してみよう。

【資料３】

『源氏物語抄』

○ すこし打わらひて　＼女の云詞也・みたてなく物けなきとは官位の事也・官位をそく共かならすのほるへけれは・其をまつ事は心やましからすと也・つらき心を忍てとは・右馬頭かあたなる心をみんよりはたかひ別へき身也と云はなつ也・心やましくもあらすと・句(ク)を切(キリ)てよむへし・

『雨夜談抄』

すこしうちわらひてよろつにみたてなく物けなきほとをみすくして人かすなる世もやとまちしかたはいとのとかにおもひなされて

これは女のいふ詞なり　見たてなく物けなきとは官位のあさき事也　官位はをそくとも必のほるへけれはそのかたをまつ事は心やましからすと也　つらきこゝろをしのひてとは馬頭かあたなるこゝろをみん事は忍ひかたけれはたかひにわかるへきさいなりといひはなつなり

【資料３】の『源氏物語抄』の注釈は、『雨夜談抄』とほぼ同じようにみえるが、若干異同がある。これは多くの伝本のある『雨夜談抄』の本文の問題か、それとも『源氏物語抄』の編者がこの内容を独自にまとめたことによるのか、はっきりとはわからない。『雨夜談抄』の注釈はとても長いものが多くあるが、『源氏物語抄』の注釈は短めなものが多い。興味深いのは、編者が長文の注釈をそのまま引用せず、長い注記をいくつかの項目に分けて、当該本に記した場合がみられる点である。その例をみてみよう。

【資料４】

『源氏物語抄』

①○ことか中に　＼ことなる中也・異中取わきなと云心也・

②○なのめなるましき人の　＼斜（ナノメ）なるましき人はよき女也・又なをさりにすましき男の事をいふにや・物の哀をしりなさけにす・（ス）むかあしにてはなけれと・実（シツ）なきはかひなければ・実（シツ）なる事をつよくたてんとて云詞也・又まめ〳〵しきすちを立てとは・後見に心を入て我身をもやさしくもたすみゝはさみかちにひさうなるをはきらふ也・みゝはさみとはひんのかみなと耳にはさむ事也・みくるしき様也・家とうしとはさたまりたる女の事也・ゆひたる（くひ）女にあたる・されと彼（カノ）女はかたちはあしかりしかと・身をつくろひなとして心もけしうはなかりし也・

○ひさうなき　＼無美相（ビサウ）・無貧相（ヒンサウ）ふく〳〵しき類也・

③○あさ夕の出入にもおほやけわたくしめにもみゝにもとゝまる事をは＼わか妻にこそかたらまほしきの心也・おほやけはらたゝしきとは・主人（シユシン）なともちたる身は・其主人（シユシン）うらみせつなる時もあり・又はうはいなとに口おしと思ふ事あり・さ様なる時も心ある妻なとにはかたりもすへきを・心なきにはいひてもかひなきあまりに・思ひいてわらひなともすへし・思ひいてわらひなと・口おしく思ひしあひてなとを・心になんてうそれかなと思て空わらひする事ある儀なり・哀とも打ひとりこたるゝとは・哀我身のわか身ならはと述懐する事あるならひ也・さやうにおとこのあらん時は女も思ひ入て・男をなくさめなとすへきを・其心なく事〳〵しく・是はなそなとあは〳〵しくいひたらは口おしかるへき事也・されは終のよすかと思ふへき人は心たらはてあしかりなんと・右馬頭君達に申なるへし・此段はさし過たるをなため・をくれたるをすゝめんとかけり・

『雨夜談抄』

ことかなかになのめなるましき人のうしろみのかたは物のあはれしりすくしはかなきついてのなさけありおかしきにすゝめるかたなくてもよかるへしとみえたるにまたまめ〳〵しきすちをたてゝみゝはさみからにひさうなきいゑとうしのひとへにうちとけたるうしろみはかりをしてあさゆふのいていりにつけてもおほやけわたくしの人のたゝすまゐよきあしきことのめにもみゝにもとまるありさまをうとき人にわさとうちまねはむやは　ちかくてみん人のきゝわきおもひしるへからんにかたりあはせはやとうちもゑまれ涙もさしくみもしはあやなきおほやけはらたゝしくおもひあまることなとおほかるをなにゝかはきかせんとおもへはうちそむかれて人しれぬおもひいでわらひもせられあはれともうちひとりこたるゝに何事そなとあはつかにさしあふきゐたらんはいかゝはくちおしからぬ

①事かなかにとはとりわけなといふ心なり　②物のあはれをしりなさけにすゝむかあしきことにてはなけれと実なきはかひなけれは実なる所をつよくそたてんとていへる詞なり　されとも又まめ〳〵しきすちをたてゝとはうしろみにこゝろをいれてわか身をもやさしくもたすみゝはさみかちにひさうなきをはきらふ心なり　みゝはさみとはひんのかみなとを耳にはさむやうの事なり　みくるしきさまなり　いへとうしとはさためたる妻の事也　このひさうなきといふには馬のかみかゆひくひたる女あたるなりされとかの女はみめかたちはあしかりしかと身をかきつくろひなとして心も下しうなかりし也　朝夕のいていりにもおほやけわたくしめにもみゝにもとまる事をはわかつまにこそかたらまほしきの心なり　③おほやけはらたゝしきとは主人なともちたる身のその主にうらみ切なる時も又傍輩朋友なといくちをしとおほふ事あるならひなり　さやうならん時は心ある妻なとにはかたりもすへきを心なき女なとにはいひてもかひなきあまりにおもひいてわらひなとするあるなるへし　思いてわらひなとはくちおしくおもひしあいてなとをなんてうそれかなとおもひてそらわらひする事ある儀なり　あはれともひとりこつとはあはれわか身かくならはなと述懐の事あるならひなり　さやうに男のあらん時は女の心にも大かたの事にはあらしなとふかくおもひいれておとこをもなくさめなとすへき事なれとその心もなくてこと〳〵しくたれはなそんとゝあは〳〵しくいひたらはくちをしかるへき事なり　されはつゐのよすかとおもふへき人は心たらはてあしかりなんことを馬頭君たちにかたるなるへし　此段はさしすきたるをなた

めをくれたるをすゝめんとかける也

このように、『源氏物語抄』の編者は『雨夜談抄』の長文の注釈を三項目に分けて、当該本に記している。興味深いのは、【資料４】の②と③の間に、注釈が一項目が入っていることである。この項目は『雨夜談抄』の内容ではなく、『弄花抄』の説である（『雨夜談抄』には「ひさうなき」の意味を解説する部分がない）。このような記し方から、編者は本文の同じ箇所について、同時に複数の注釈を確認していることがわかる。

また、『源氏物語抄』では『雨夜談抄』の注釈と他の注釈書の内容を一つの項目にまとめている場合もある。【資料５】では、『雨夜談抄』と『河海抄』の両説が書かれている。傍線が『雨夜談抄』の説で、引いていない部分は『河海抄』の説である。但し、『河海抄』については、この項目の注記が非常に長いので、『源氏物語抄』が引用している前半の部分だけをあげる。

【資料５】

『源氏物語抄』

○内の御物いみ　／禁裏の御物忌也・怪かましき事ある時物忌と云字をかきて・簾なとにつけてありきもせてつゝしむ也・迦毗羅衛国中桃林有・
其下一丈鬼王有・物忌号・其鬼王辺他鬼神不寄・誓願六趣有情利益・吾名号実者・若人宅物忌悪夢現頻示・諸凶害可蒙時其日除吾名書立門・故他鬼王不寄云・

『河海抄』

うちの御物いみつゝきて

物忌事　　義浄三蔵奉詔訳

夫以　迦毗羅衛国在世界名胡其国中有桃林東西南北卅六町也其中有桃木高卅五丈也差枝方々各卅五丈也其上平々譬如鏡面其下有一大鬼王号曰物忌其鬼王辺他鬼神不寄就中大通鬼王候百里之内奏聞於事由小通鬼王脆二千里之外被令奏聞於事由大鬼神王　大鬼神王誓願言衆生之中若有病苦疾疫之難者令早差若有短命者延其命若有無福者与其福若

有可堕地獄者抜苦難有未証果者令証果如此有利益六趣之有情持実吾名号者若人宅物佐屡現悪夢頻示可蒙諸凶害之時臨其曰吾名立門其故他鬼神不令来入但書時読児書之時尋得於陰陽霊験之師書吾名令持人々如影可令守護…（以下略す）

『雨夜談抄』

うちの御物いみさしつゝきていとゝなかゐさふらひ給　おほいとのにはうらめしくおほしたれと万の御よそひ何くれと

内の御物いみとは禁裏の御物いみ也　物いみといふは怪かましき事なとある時物いみと云う字をかきて簾なとにつけてありきなとをもせてつゝしむ事あり　なかゐさふらひたまふとはうちに久しくおはします心なり　よろつの御よそひなにくれとはさうそくの何やと左のおほい殿より御心に入給ふ事也

【資料５】の『源氏物語抄』の注記は『雨夜談抄』と『河海抄』のそれぞれの説を取り込んでいるとみられるが、いずれも内容が完全に一致しているわけではない。編者は注釈内容をそのまま引用してはいないのである。『雨夜談抄』との差異は、前に述べているように、異同レベルの問題にも見える。『河海抄』の引用からは、編者が長文の注釈を簡潔に要約し、よりわかりやすくまとめていることがわかる。これは、編者が『源氏物語』に対する知識を多く持っているとともに、丁寧な編集作業を行ったことを示唆しているだろう。

このように、九曜文庫本『源氏物語抄』の「帚木」巻には『雨夜談抄』からの引用が多く含まれている。『雨夜談抄』の流布県を考えると、室町末期の連歌師に近い環境に作者がいたことは間違いないだろう。

六、終わりに

九曜文庫本『源氏物語抄』は、中世における『源氏物語』古注釈の研究にとって興味深い点がいくつかある。当該本の編者は不明であり、成立過程とその利用者の立場などもまだはっきりさせられない問題がある。それらの問題の中から、本章では稿者が重要だと考える問題を二つ選択した。一つは、当該本と『水原抄』の関係であり、もう一つは「帚木」

巻に多く引用される『雨夜談抄』との関わりという問題である。

まず、二節では、古注釈の引用した『水原抄』の逸文について考察し、『水原抄』は『花鳥余情』の成立前後にはもう散逸していたらしいという推定を行った。

九曜文庫本『源氏物語抄』には『水原抄』の書名のある注釈が三項目あるが、いずれも『花鳥余情』から引用したものである。当該本の編者が実際に『水原抄』を参考にしたとは考えにくい。但し、三節では、『源氏物語抄』にみえる「河内守」という名のみえる注釈について考察した。その言及は『源氏物語抄』の編者による何らかの誤りの可能性もあるが、いずれにしても、当該本と『水原抄』との関係はほとんどないものと考えられた。

次に、四節では、当該本の「帚木」巻で引用されている注釈の割合について考察した。項目数からみると、『一葉抄』が最も引用されたようにみえるが、割合でみると、当該本は『雨夜談抄』の内容の半分以上を引いていることがわかった。

五節では、当該本における『雨夜談抄』の引用の仕方について考察し、当該本の編者がある程度、『源氏物語』に関する知識を持っている人物ではないかと推定した。

『源氏物語抄』の興味深いところは、連歌師がよく使う横本である点、『一葉抄』や『雨夜談抄』など、連歌師周辺でしか流布していないと思われる珍しい注釈書を引用している点である。当該本はまだ調査不十分のところが多いが、今後の課題にする。

【注】

（1）中野幸一「近世初期写『源氏物語抄』」（『源氏物語の享受資料―調査と発掘』武蔵野書院、一九九九年）

（2）土井哲治編『實隆公記・二〇（書名索引）』（続群書類従完成会、二〇〇〇年）

（3）伊井春樹『源氏物語注釈史の研究：室町前期』（桜楓社、一九八一年）

（4）伊井春樹氏、注（3）書。

（5）池田亀鑑「水原抄は果たして佚書か」（『文学』第一巻第七号、一九三三年十月）

（6）池田亀鑑氏、注（5）論文。

（7）伊井春樹編『源氏物語 注釈書・享受史事典』（東京堂出版、二〇〇一年）の「珊瑚秘抄」の項とある。

（8）岩坪健『『源氏物語千鳥抄』の系統と位置付け」（『王朝文学の本質と変容・散文編』

和泉書院、二〇〇一年）

終　章

一、はじめに

本論文では、中世における『源氏物語』古注釈の研究について様々な面から考察した。本稿で扱う古注釈は、調査不十分なものばかりである。しかし、稿者は、このような資料だからこそ、中世の古注釈に対する新しい情報を提供してくれる可能性があると考えている。従って、本論文は『葵巻古注』、三冊本『紫明抄』、東山御文庫蔵『七毫源氏』、そして、九曜文庫本『源氏物語抄』を選択し、研究を行った。

二、中世における『源氏物語』古注釈の研究の試み

本論文で取り上げた課題を振り返ってみると、まず第一部では『葵巻古注』について考察した。『葵巻古注』は散逸した古注釈の『水原抄』ではないかと言われるほど、興味深い本である。第一章では、『葵巻古注』と同時代成立の『光源氏物語抄』、『紫明抄』と比較し、これらの本の性格が大きく相違していることがわかった。さらに、最も重要なのは『葵巻古注』には本文区分に関する注記の充実がみられる点である。先行研究でもこの件について言及があったが、本論文では、より丁寧に掘り下げてその特質をとらえてみた。特に、「ノ給」と「ヲホス」の使い分け方はとても魅力的なところである。

続いて、第二章では『葵巻古注』に関する最も大事な問題について考察した。それは『葵巻古注』と『水原抄』との関係である。この問題は『葵巻古注』が発見された当初から、未だ定説に至っていない。稿者はここで、『葵巻古注』に関する池田論文の問題点を取り

上げた。それは『水原抄』が巻子本だったという説が成り立たないという問題である。次に、池田氏が『水原抄』の逸文から推察した『水原抄』の性質が『葵巻古注』に合わないことを指摘した。さらに、『葵巻古注』の注釈の中に引用された『源氏物語』本文に異同がみられるという問題もあった。これらのさまざまな点を合わせて考えてみると、『葵巻古注』が『水原抄』そのものであるとは考えにくいと結論づけた。最後に、『葵巻古注』の利用者については、ある高い地位の人物に献上するために作られたのではないかと推測した。

第二部では、内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』について考察した。『紫明抄』は伝本が何種類かあるが、完本としては京大本『紫明抄』とこの三冊本『紫明抄』しかない点が重要である。にもかかわらず、三冊本『紫明抄』の先行研究は部分的にしか検討してこなかった。従って、第三章では三冊本『紫明抄』のさまざまな特徴について考察した。三冊本『紫明抄』は分量は少ないが、独自の注釈内容が多くある点が特徴的である。また、他の『紫明抄』諸本と比較してみると、引用された『源氏物語』の本文の相違、それに編者の作成途上のコメントや、親行本および『水原抄』に関わる異本注記の存在等、さまざまな特徴がある。さらに、三冊本は『河海抄』『花鳥余情』のような後代の代表的注釈書の説と一致する注釈内容をも有している。このように、三冊本『紫明抄』は、同じ『紫明抄』とはいっても他本とは異なる注釈書であるということを明らかにした。

第四章では三冊本『紫明抄』の位置を中心に考察した。まずは、三冊本『紫明抄』には散逸した「水原抄」の記載があり、その祖本はかなり古いと推察した。さらに、三冊本の末尾には、他の『紫明抄』の伝本に全くみられない素寂の書状が添えられている。この書状だけが『紫明抄』の成立過程を伝えてくれる。つまり、三冊本の祖本は素寂自身の近辺からしか出てこない情報を含む本であるといえる。さらに、三冊本には『源氏物語』の本文だけがあげられ、注記のない空の項目がいくつかみられる。しかも、注記があっても「未勘」、「可尋」、「他本見可」、「前勘」、「後勘」など、作成途上であることを示すことわりが多数みられる。これらの点から稿者は、三冊本は素寂の作成中の『紫明抄』ではないかと考える。大事なのは三冊本『紫明抄』には『紫明抄』諸本にみえない注記があり、しかも、それらの注記が『紫明抄』の成立に先行する『光源氏物語抄』と一致するものがある。これによって、三冊本は現存している『紫明抄』諸本のいずれかを転写したものではない

ことが明らかである。先行研究では、三冊本は、抄出本、または略本だと推定されてきたが、三冊本『紫明抄』は他の『紫明抄』に先行する注釈、つまり草稿段階のものと見てよいのではないだろうかと提案した。

第三部では、東山御文庫蔵『七毫源氏』のさまざまな面について考察した。『七毫源氏』は従来、源氏の古写本として扱われており、影印も刊行されておらず、研究があまり進んでいない。しかし、当該本に記されている注釈は現存している古注釈の中に一致しない内容もあり、中世の『源氏物語』古注釈の研究にとって、とても重要な資料の一つであることは間違いないのである。

まず、第五章では『七毫源氏』の基本的な情報についてまとめた。

『七毫源氏』の由来に関する情報を確実に提供してくれるのは巻末の「教弘」または「多々良教弘」の朱印である。大内教弘の生没年から考えると、『七毫源氏』は『花鳥余情』の成立の前に、この本自体が既に存在していたことがわかる。続いて、『七毫源氏』の基本的な構造について考察した。『七毫源氏』の本来の姿が最も残されているのは「葵」巻であることを指摘した。次に、『七毫源氏』の注釈の種類について考察した。大事なのは、注記に『花鳥余情』以降の注がみられないこと、しかも、散逸した『正和集』や『水原抄』の逸文から考えると、『七毫源氏』書写後、比較的早い段階で注記が書き込まれたものと考えられる。さらに、巻頭と巻末にある和歌について、また『七毫源氏』の鑑定についても考察した。稿者は『七毫源氏』が江戸時代以降に鑑定されたのではないかと考えている。『七毫源氏』の解説の折紙では、『七毫源氏』は耕雲本『源氏物語』であり、当該本の書き入れは耕雲自身が記したと指摘している。この件について、簡単に答えられないが、『七毫源氏』が耕雲本の一種類であるかどうかは、今後の本文研究の課題である。

第六章では『七毫源氏』と鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の関係について考察した。『七毫源氏』には中世のさまざまな『源氏物語』古注釈から引用されたとおぼしい注記がある。まずは、『七毫源氏』の中で注釈書名が付された注記について確認したが、注釈書名が示されなくても、『七毫源氏』の注記を書き入れた人物は、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『仙源抄』、『原中最秘抄』を利用、参看した可能性もある。次に『七毫源氏』の独自の内容と、散逸した『水原抄』の逸文とを比較した。その結果、『七毫源氏』の独自の注釈に『水原抄』の逸文が含まれている可能性が考えられる例があることを述べた。最後に、『七毫

源氏』の中で、鎌倉時代の人物名が付された独自の注記について検討した。その中でも、『光源氏物語抄』にたびたびその名がみえる清原教隆の名を付した注記は、『光源氏物語抄』の祖本、あるいはその成立期の別の注釈書の存在の可能性などをうかがわせる、貴重な情報を提供している。

このように『七毫源氏』は今までに確認不可能であったような鎌倉時代『源氏物語』古注釈に関するさまざまな情報を提供してくれる資料である。

第七章では『七毫源氏』と『光源氏物語抄』との関係について考察した。『七毫源氏』の注釈記載者は中世の主要な古注釈書を所持ないしは閲覧することが可能な環境におり、『源氏物語』に対する知識も深いと考えられる。『光源氏物語抄』に関する『七毫源氏』の引用姿勢からは、現存『光源氏物語抄』の本文が、ある程度古態を残すことが判明する。さらに、『七毫源氏』の注釈の構成は『光源氏物語抄』とおおよそ一致しているので、これらの注釈はそのまま『光源氏物語抄』から引用したと結論づけた。

第四部では、九曜文庫本『源氏物語抄』について考察した。九曜文庫本『源氏物語抄』は他の伝本が存在しないだけではなく、編者、利用者、書写年代も不明であるがさまざまな興味深い点がある。まず、『源氏物語抄』は横本の形態であり、さらに、当該本の使われている朱の記号により、和歌を特別扱いしていることがわかった。当該本の形態と朱の記号から推定すると、編者は連歌師と何らかの関係があるのではないかと考えられる。また、当該本の『雨夜談抄』と『源氏和秘抄』の内容も当該本に引用されていることが明確になった。最後に、当該本には反復される注釈が多くみられ、これらの注釈の意味は不明だが、分類してみると、①「〜とよむへし」、②「聞えたるまゝ也」、③「心明か也」の三種類がある。先述したように、当該本は和歌を特別扱いしていると考えられるにもかかわらず、多数の和歌に関する注釈は「聞えたるまゝ也」や「明か也」としか示されていない。この事情から考えてみると、『源氏物語抄』は一般的な『源氏物語』と違い、何らかの特別な目的のために作成されたのであろう。

最後に、第九章では九曜文庫本『源氏物語抄』と『水原抄』、『雨夜談抄』の関係を中

心に考察した。それはまず、当該本と『水原抄』とはどのような関係を持つのかという問題と、当該本の「帚木」巻において多く引用されている『雨夜談抄』はどのように引用されたのかという問題である。

実隆の時代には『水原抄』は既に散逸していると推定できるため、江戸時代に書写された当該本には、『水原抄』を引用したと示していても、その書名のある注記は三項目しかない。さらに、それらいずれも『花鳥余情』から引用したものである。このように、当該本の編者は実際に『水原抄』を参考にしたと考えにくいのである。にもかかわらず、当該本の「帚木」巻に他の古注釈にみえない「河内守」のある項目がある点が興味深い。

続いて、当該本と『雨夜談抄』の関係について考察した。『源氏物語抄』の注釈は短めなものが多い。一方、『雨夜談抄』の注釈は長文が多いのである。それゆえか、当該本の編者が『雨夜談抄』の説を書き入れる際には、内容をまとめたり、いくつかの短い項目にわけたりする場合もある。さらに、他の注釈書の内容を同じ項目に一緒に記す場合もある。興味深いのは、同じ説であっても、そのままを引用せず、簡潔にまとめたり、大事な部分だけ選択したりしている点である。編者はある程度、『源氏物語』に関する知識を持っている人物ではないかと推定する。

三、終わりに

このように、本論文では中世における『源氏物語』古注釈のさまざまな面について考察した。　本論文で取り上げた『葵巻古注』にはまだ検討しなければならない点がいくつかある。例えば、引用された和歌の異同や、注釈の内容の詳細についてはまだ問題がある。『葵巻古注』は他の古注釈の内容を比較しながら、検討しなければならない点があるので、今後の課題はこれらの問題を中心に行いたいと考えている。

次に、三冊本『紫明抄』は稿者が内容を全部検討したにもかかわらず、まだ不明な点が多くある。それは三冊本『紫明抄』には独自の注釈が多く含まれているからである。さらに、引用された本文も『紫明抄』諸本と大きな違いがあり、本文をあげられても、注釈がつけられていない項目が多数ある。これらの件について、もっと検討する必要がある。

続いて、東山御文庫蔵『七毫源氏』は、本文区分の注記や、マイクロフィルムでは薄く

て非常に読みにくい朱で書かれている引歌もある。これらの点は実物を調査しなければ、『七毫源氏』に関する結論をだしにくいと考えるが、今後の研究に期待する。

最後に、九曜文庫本『源氏物語抄』については、他の伝本を聞かない上に、成立目的も他の古注釈と全く異なる。当該本には十冊もあり、稿者が検討できたのは「桐壺」巻、「帚木」巻、そして「葵」巻の三巻に過ぎない。残りの巻々の検討も必須であろう。

中世における『源氏物語』古注釈の研究では、まだ判明していないことが多くある。そのため、本論文では今まで先行研究で言及されていなかった内容や、調査不十分なものを中心に考察した。これからの『源氏物語』古注釈の研究では、本論文で扱った資料がより注目されるようになることを期待する。

初出一覧

※すべての章において初出稿に加筆修正を施した。ただしいずれも、大幅な論旨の変更はしていない。

序章　書き下ろし

第一部　『葵巻古注』の研究

第一章　原題「『葵巻古注』（七海本・吉田本）の注記―鎌倉時代の『源氏物語』古注釈との比較から―」『平安朝文学研究』復刊第二一号（二〇一三年三月）

第二章　原題「『葵巻古注』と『水原抄』の関係―鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の利用―」『WASEDA RILAS JOURNAL No.3』（二〇一五年一〇月）

第二部　内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の研究

第三章　原題「内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の独自性」古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考　第三一集』（新典社、二〇一五年）

第四章　書き下ろしだが、二〇一四度中古文学会秋季大会（一〇月、於京都女子大学）にて、「内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の位置―『光源氏物語抄』および『紫明抄』諸本との関係を中心に―」と題し口頭発表した内容をもとにしている。

第三部　東山御文庫蔵『七毫源氏』の研究

第五章　書き下ろし

第六章　原題「東山御文庫蔵『七毫源氏』と鎌倉時代の『源氏物語』古注釈」『国文学研究』第一八二集（二〇一七年六月）

第七章　原題「東山御文庫蔵『七毫源氏』と『光源氏物語抄』」（『文学・語学』に条件付き採用、最終段階の審査中）

第四部　九曜文庫本『源氏物語抄』の研究

第八章　書き下ろし（第三節以外）

第三節　書き下ろしだが、二〇一二年度第三六回国際日本文学研究集会（一〇月、於国文学研究資料館）にて「九曜文庫本『源氏物語抄』と『水原抄』『珊瑚秘抄』『千鳥抄』」と題し口頭発表した内容をもとにしている。

第九章　書き下ろし

終章　書き下ろし